北陸
東海
御巡幸之記

早稲田大学図書館
文書 27
B 29

始年我が天皇陛下には叡聖文武の天資を以て復古維新の偉業
を經綸せられ抄時を振はせられ明治の初めよりしばしば巡幸あらせ給ひ

東京に定めし以来五年九州に巡幸し九年奥羽地に巡幸し又本年八
北陸東海両道の諸国に巡幸あらせらるべき旨を命じ八月三十日発輦
あらせらる　龍駕東京赤坂なる仮皇居を発し武蔵国の中山
道を進んで巡幸の路程を案内せし上東京より武州浦和へ至り浦和より上州
前橋に至り前橋より信州長野に到り長野より越後高田に至り高田より
柏崎を経て新潟に至り新潟より新発田及び長岡を経て出雲崎を経て
加州金沢に到り金沢より越前敦賀に到り敦賀より柳ヶ瀬を経て
江州大津に至り大津より西京に到り西京より東山大阪に出で更に経て
勢州津に至り津より山田に到り内宮外宮を拝し山田より道を伊賀に
四日市に到り尾州名古屋に到り名古屋より濃州岐阜に到り岐阜より

再び江戸を去りて遠州静岡に到り静居卜定して東京に還幸ける
んとして其の経程は能く写すにして其のり程は彫刻を合せて凡ソ
七十余日其ノ間に於て能書の親筆を模写する其紫廟十ケ所裁判所
七ケ所学校五ケ所病院五ケ所法廷四ケ所製造所二ケ所博覧会二
箇所を閲覧せり嗚呼我が　天皇陛下此くの如く玉趾を労し給ひ此
御巡幸し此くの如く玉体を労せ玉ふの間に於て最も之を見るを悦
ばせ玉ふは何の為なりとするや

今や明治維新の偉業日に日に進み文化の未だ美ならざる写方に洽治せざるに
より宗教の法を如く観覧の法を謀ぶ其何情勢の法を見るべく其の
法を詳にするは其何其基本たるは賜ふ所が　天皇陛下の深く殊に意

往昔の定法にして今日は忽ち千載を一洗して朝威を張せられ光輝
となるもの何ぞ哉が　天皇陛下の夙に其親ら勇士を率ゐして或は秋水
利なるを大臣の胸中に蔵し給ふなり或は控訴の願書を許候旗に来せん
欲する者ありて未だ俄に之を聴て成くの良策を採用の枝上に実際と為す
者あり頑民の之を排除の之を除し之を懲罰せば昇平の法を為す
者ありとも然るか如く益其刑罰は法律の然るなりとする
箝制抑圧は束縛し圧制し人命我が　天皇陛下此親ら統風に典を挙行し
毫も其労苦を厭はせられざるは是亦下民情義を貴重し是所謂
の所為にして名目は其の業を勧め我良民の心意を発動せしめられざらん
ことを憂ひたまふにあらずや

然り而して今回巡幸の路次ハ僻遠なる地方ハ東海道を除きて殊に寒陋
にして未曾て歴世の 天皇が龍駕を枉げられしことあらざる今日ハ僻陬
陬の人民が世運の推移に関り計らざる巡幸の盛典に遭遇し親しく
龍顔を瞻ることを得るに到り其の感喜の情感ハ果して如何ぞや其の臣民を
光を拝し老幼を携へ以てとして筆舌盡し難く路傍に奉迎するを俟ぞ
余や却也新聞社之員たるを以て筆管を執り鹵簿の列後に陪従して
其の儀仗を記録し以て江湖の未だ観ざる所の光栄を博する古人
云ありて旅行の功益ハ知見を広くし教育の一部なりと此挙ハ
随意の一部分となりし余の如き微労を以て此光栄と功益とを
併せ得之を領収せし一身の幸福といふべし大なる労苦を労力以て之が

跋渉の途に上らんとハ思ハざりし所而して多年の希望を遂ぐるハ実に是余の幸福を賀すべく
云爾 天子の寶祚無疆を祈らんと 明治十三年六月二十日 報知新聞社 東京
巡幸御通信委員横飛文奏識

本月十六日午前八時を以て宮城を御発輦有られたり此日ハ板橋駅に御小休あらせられて
通行し鼻根埼玉県下に入らせ給ひしが天既に何時にして板橋を過ぎ蕨駅に到らせらる
埼玉県の管轄に入る各駅路ハ御小休御昼食等其他ハ総て行列式の通りし
戸田橋以北ハ道路新築にして路傍の稲田ハ早苗の翠生長して
植ハ大概出揃ひし上ハ其光景ハ上戸田より大宮ハ埼玉県下芝の
学区ハ学校生徒男女農業者の如民ハ開通する毎に生徒の男女
十二名と共に路の両側に整列して鳳輦を迎へ奉る其の老男女

の風俗ハ何となく正しく平日勤倹の風を知りて進て厳格の法
小体訓ハ并ひ給ふ主臣の交務亦よく業務の萬事ハ幕府を待りて
頃ハ農業之儀ハ府中より浦和ハ宿駅杯あり該所の今日なる浦和公園
の東側にハ埼玉縣と大書したる縣廳の玄関を取り事務を扱ふ西側ハ学校
生徒数多ありて共に進歩せり然るに浦和ハ新開の所なれは学校とて
右校門にハ縣民常に古き図を排列して一大関を張り構ハ煉瓦にて築く
学校ハ瓦葺にして殊に宏大なり夜間ハ広く庭ハ日本式の築庭をなせり
老幼男女のあらん四方より雑集して其周囲の地なる由を造り又その
道路の中央ハ東輪の幅ヾけに砂を布き修繕至ら行届き浦和公園
内数条の別路ハ砂を布きて高麗にて相合し廣く四週を含みて高き所ハ

通り抜けて巡査が来て道路を検ずる如く車の如きハ許されぬことの道
しき例として足をつまずきて草のを見るハ殊んと当惑せりと今日に及び
荒るに任せて昔の雑草ハ寄り合ひ方なく形の入り込み藪の如くハ
縣庁裁判所縣学校浦和公園内別業物置等に隣接せることの多かり
二千有余年来府中の景勝地なる月寺縣庁に隣接せる如く
白根縣令役を務め管内の諸所（南埼玉郡）巡察し行きたる
又中浦和村の大原に住へる浦和村新井某今は山林
更なく甲信武上の名の境を天下に知らしめて人民は挙りて義を質へ
樸なる新規なる一家の臨所を移して彼等の旨ハ中浦和村の名を上つ
多くなりて編せる其道路に足並みせんとしてとるの誠に其

大阪ハ繁昌なる都府にして其起の由来ハ昔徳川氏ニ至りて幕府を置
地なるを以て其土地ハ一繁昌の人ありて四方の人物ハ集合して他所ニ出るもの多く
浪花名所の旧跡ハ遊覧の客群集して家屋ハ追々に増加して容易に往来
足くし行ふて男女とも皆身を美麗に飾るのも衣服ハ山の如く土蔵を建て
錦とふものを織りて花を尊び婦人のアツモノを好み金銀ハ得ると
喰ふのを好み来て表ハ別ニ乏しく諸事相応ニ女ニ嫁ぎて家業の金銀ハ得ると
草臥木菓などを第一の品物なりて砂糖ハ甘きモノとて之を食して名の高きを
誇り病気なる者ハ死ぬる迄ハ方なく何の業もなく暮して其間の年月なく但し
職なき者ハ在て一生を送りハ教を見ず其中の出来る者ハ我身の為に其身の
家業を守りて其信ずる所の道を知り文明開化の今日に至りて之を知らせて皇恩の

僅涯なりて候達てありハ識を致さ其上の所作ともに益なるハ其人民の自由を
妨げざるハ立て其の出来る所なりて其の人の職務ハ先に出来る
道路を作りてやる様なれバ其人民の疏通ハ至る所迄を達し且臨時ニ
開き道を造り為に需用の諸品を製造する諸工場を建て追々と其の便を
得る者の為にとて何の用にも立つなる者ハ有て漸次の所なる其業を営みて
生死の職業を開拓せしめ大体出国民の持物を以て其業を行ひて其国の利を広め
類勧業の博物館を作りて人民に開知成化と云せる各類ありて其内
大体の出せし陳列の区画ハ第一区より六区迄に分ちて其の後ハ百種ニ至り
諸品を纏めて何れも御製作の出品より皆日本の天造人為の物品を陳列し奥の
方に置て又奇品の其外に用水を入れ植木其他諸種の堰枠の雛形又其

埼玉村の伏越樋ハ元荒川の水底を樋をかけて水を通し又其次の上瓦曽根村なる
ハ荒川の上を樋を以て水を通しける雛形ハいかにも実に便利なりとの事なり是ハ
享保年中に作りしものにて　聖上にも深く叡感ありせられけれは　夫より又是を献し大阪府
小山日本の船を匠ミてこゝに至るまて上けく世に行はる佐藤より此用ゆ享保年中の事
也其此淀川筋某日光の御廟下にて近年に見付を見せしも此水
を洞して閘を造れハ匠工の利益なりんと水利に妙なかりし紀伊の井沢弥惣兵衛を
召寄せ其人の工夫にて遂に其事を成功せしと右の高瀬へ船を行く法ハ
西洋にくハしく知りしを近来漸く其世に広まりて埋ぬるやうに除きて
流れして居りしハ実に国にとりて此等ハ其掛り官吏にて詳かに奏上し其事ハ
農業彼に入りせまへハ桃山（オヤコ）某に仕の製作のにて明くなりし営業の儀の

雛形ハ多く陳列せり座繰製糸業作の生糸ハ汝めの精製にて現今輸出上等の
好品なりとし　聖上此糸の製造ハ殊にけんしと聞しめしてや深く御賞美せられ
其物品ハ秩父甲山の材木の見本なり是ハ皮つきの儘材をそのまゝ木理（モクメ）を異にし塗色せし
ものなり又ハ近く寄て拝観せしに埼玉郡埼玉村の今井某なる者の出せる大縄ハ柄の
長さ七尺余にして又其先ハ一丈余に延び其頃の人もし新らたなる大縄ハ頗る丈夫にて用ゆるとぞ
聞きハ作りまし鉄にて大きなる所を係し近来始て新らしく作出せしハ何よ
用ひやすく我らの扇ハ樹木の新芽ハ見たりんとす埼玉の飛脚の水上に生えたる藻を云
ものと知り取りて田畑の肥しに用ゆる村の後にくいたりは多く風通の業を始むるを
思ひたる農家にもしかくして先づ彼と農業家の間に族々の縁ハ飛行に出る嵐空名
宿ぐるまのかくの如く町中にハ掛止の玉框（タマモリ）のかしあれし之を其所より大なる殊川

行り川口の坊国安孫子の氣迯せしとの記 此郡伊丹人杉之の寶物行り
寶上の出寶上にて陳列せし時其八幡宮藏 一足 公家毛遊去りし由 代價十兩
一寶花瓶 一個 玉井村 藤井安平の化宝内 此寶人図是出内 茶壺 同上
三寶 板額 一面 象牙作く 水仙花と雀とを作り 像前掛 猶其二子藏 秩父大宮 大久保
寶物出京十五日 猶藏七子 高麗郡 唐津村 清水寺 出京 猿楽山 出す 鍋作く
製しかる手文庫 一個 とも 九府中 物價と出せし 組立ト 選び作り年の出張
とめさせ 三年十月 浦和を出発 輦行せしる 皆出国と出御輦の折から 本陣より
ま人の男ツト走りて出来たりしと 来行しとらの行り 鬘者の巡覧をる 前にて 捕へ取り聞に
紀しもらふ 大森村下の出の地を下見して 秋紀深行りしか 小金ケ原 宿駅の主 をも 見
事なとなく 裏行紀行しまゐらし 此関御なりしを八幡上中宿へ 宿る 一両行りて 家とる氏元の

情ある人は情なへの上覧に其せらるなりん 事のあ秋き大戦は 家との此き 不幸の
民にあらぬ 前なし 保元平治世に源氏の治承なたり 此縁人ありてしとま 人にらうし
ちとぞ是は文明に年さらる 此たり 依り 實にまるなかりしと知りし
なほ書迄とも八幡宮まで 太平記 騰野表 旗をたるとみてまゐらせるなりし
檀原の 御代より つきの木のやつきしく 天の下 恵み しらしめ 御代く 乃
聖の御代はさまざま 此戦は 何時ぞとし 君がまにまに 戦は 何時とも 其の御代を ちらすも 御
国という出の限りの大石(オホイシ) 小石(コイシ)うしさきそらし 其の古地(トコロ)かへりまつりて 大御代といる
かしこき民出の国ても 国はみやとしる 波路 紀行 く まのもし 幾り 考へしと 年へ
事を 入りかしてさとし 事さとしかとして 出降の 道を ふたは 洞の 身のつて 行り
わくつきの海ても 海は是船のいく道しらけ 其てふ 学の道し 見まさこそ 月もすみて

置つとふ竃ひさもし村とさふ里家あり桧さし桧やとのなく庭ひろしころかなくて
かくたちり東との露は振ふ宮あまたりかあり由を世ふあわりくあまりこしち
なりきし山こえて西のりく玉乃まさんと鳥が鳴 东出さちむさしのを行きし
ませ力烯玉の所をしま道の人に菜ふり前く春さかへ志砂より多くいさを
こちらるさいで侍あくからし
むさし野の青人草しうらなりむさしの行幸を侍あへるかと
上尾の駅ばね後人り多く出く居て所ま近藤芳樹君が共るる伊勢物語ふ有る
みよしのの里ねさくらめ入(道)の辺の家ふ結しあるぞてみよしのの里ねこのむや此の地の名なりけり
と侍るま又大宮ねさふく女神の祠をわりてなうとて風ふりくあぐらの森の
大宮は月鏡ふさわ中り女神の祠なりとしふ見ゆ事し

宮一丁今り千宗の事八井二綫ゆく中隔りくろめし楠十二所山峯華ゆく計ヶ谷に村と
ゐさきさせりふ又女房の清水原ふ出家花森かぞしてかじ時浮野ふ咲花をへるかふ乃
此等を侍つ中さる心に化して大在への二ろを句せ旅の志しよかじお通をせりふ代へと何かる
べし夫ぞ所宇ふ往大在の節ふ久せりふ無きゆく此所あり(節の入ぐふ菜根の花ぞ多く並山ふて知れせり)冰川
の神社ふ参詣ゆゝせのふ無社八素盞嗚尊と申し此わ荒山の一宮と節の入ぐふ宇内祀か米
又森の中ふ入りて奥の方ふ多居こゆり一の鳥居の前ふ池あり西面の傍を通て其一鳥居ぐ
入りせふあへさ居なれと無房ハ狭くて此華を見すゑへりて池の其の堤を華麗と
見ぐ此華を返しなき無池ハ古の御祖の名あらく高祀遠ま汀ふせゆしけり志雲ま稲森を
とていと神さびさるハ何とふくちらえ祀せら無花の堤と此通華の宮ゐと此信ふ名山
三度目義去る御縁を宮りまりらいと面白く此ふあり 言ふ多流か入りせのふ無り参宮あり

神在神陰と信し嵩山岩常と信し他所を参るに益無き者付て山軍をとり立せ給へと侍臣
山谷を退きしも夫々此れの家にて売る世のへ入者無く山軍と挑って是を退きしに立上りて
山軍ととりしに山谷を攻めんとして送付けしも成らぬ此所又夫楽付て信玄の東へ去り給ひ
將軍神二千山神隊神五円を山高附けしゆく　二十日[illegible]発せしてやがて天神信と云
毛と源氏の世の農家の畑には多く豊穣を極めし是が為上越と云物を植へて松なる
辛き世を経しある相をへて見て知るよしもなくやがて上尾の紡績に去る文政十一年の生れ
多くの者の人々に主に童山[illegible]信し相之人は足山の[illegible]一所軍勇将[illegible]
の時は中と[illegible]て[illegible]の往くしも世の未往になるを人は農業の忙しきにはや
わらん兵大将上尾なとの町中に子を[illegible]山姫と[illegible]なとしる村々や村々の
大[illegible]の[illegible]人の世軍みな[illegible]今日を[illegible]て見かぎりしに行きし行くべに

却ろびし刹け方いとその無きなるども今は大概なく抑し合ひく戦ふことなく山軍を得んと
さきぞの人を守り府中より楠川の館に寄せ力を給ふに府川まで仲く
九月三日今朝は例より共に出でて八年に楠川と山発聲向り朝の往く霧多く茂りて天守
いりぐと見ず往けく東は忠勝書にうるわしと守りて山と丘高く嵩く見えて名は是とぞ
岸の人とも今日はよけれど出でなくもやさしき山の子楠川に鳴る果との名に残る也
人も多くるを先ず出でて（知も）子の居は里に近き村人もはや博く集り給ひぬ漸く道ぞ村より中道に
出ぬ人の山に在る男女うちつどひ今子年を祝す深江と云ふ所を越え世の中の学校の生徒
と云ふのが居る右に年をし岩山に居りつゝ山軍の子ろと共に名を呼ぶ人に吟ずる所の風聲
を見ぞろてるまり横浜の商人平左衛門（[illegible]）と云ふ人は是を売る帯を二つに付けて是服なる帽子
をかぶりて其の山軍の先になりて名を達せて其の旅の方に行きて山軍と待てるなんと

殊に其人を出すれは人々先生ときこの上人の如くおもひをられんと帽子をとりて立礼なされしとお
かし　鳴巣禅師六十二偈を作られ居られしか惜しむべし今は其なかれ業なりしとも何ものとも皆
とかく是のふかき所にて此事にて鳴巣の作を見せしに紛失なし給ふ橋本元昌と云者の家に在り
岩の中旅にありし時此者に勝軒手として古き寺にて近来寺樹蔵の集を所蔵なし且其書を出して
余家旧蔵なども頒ちて仰せ付られしを此を拝して吟味と共に其時の勝軒手に寄せて賞翫
なしと見てとらんと思ひとて古き保存して此に受けし寺近くにて一閑の作を見るに見ると古き一巻を得
の中為に是にて続き蔵是あり慶長十年に南都に唐本の法観音を尊敬せし都の名家の筆跡と
此もまたかかる時に得し所蔵の寂照天皇の御筆にて法華の世尊寺の芸を経巻の書を見せしなども右
の寂照などとして又徳川家康公の世にあるもの古き先の名を以てなどもなく寂光寺の宝物なりとて
となりし時に此を尊と成とし其時にとて古き写経の筆と一枚の寂光寺の宝物を見ると見るが

十行り侍れハ古き行りて地金の味出たるを考ふるに岩の中にある古名の小堀氏に似し土
模様ハ無地を出さむ尾張其外に作らる七寶のかゝる事とは全く同　形ふれハ其此傍
と見ゆれハ此せる處なるべし此にて此ハ寛年前より日本にハ来さし白紙を掛けたる
従来之にし出来る世に於ハ七寶焼の出来る嘉永の年々古流の物多く又古瀬戸焼
の大家頃元行り是を徳川公の家紋あるし　伊賀焼の作もあるゝ惣の物多く有と思ひの
其家也て作り述て佛具をなさる地のもの世に徳川家の紙表にも有りて伊豆の家の蓋アリ
家のか世にも古物を頒ちかくして居る様に　立ちて出で絶えし其世の古画の作りを
なされず十分に作業行りて色々せ出すハ昔にて大阪近来のこと極の如くなるは
殊て此処を見るへせる古く出来る堤の掛せられ其年代さらる考へ者きくと
進まぬ女の妙珍様名の山にハ雲間ぐしくて見てわらぬて様々の作品は元より相当にて速けり

赤城あり　其外の山々ハ東北の際にあり荒川の水清くして佩も清き遠の峯々に麓を

ハ秋風のそよぎて儀仗旌旆の光に傳へ残る古人の詠なる命代の盛なる更なる

万民皆万歳を唱へつゝ　昨日迄ハ道の辺にありし男女となりけるが今日は村の者

多く十井田の能方より集りて弥さかえ　能都を舞ひなんとて押合へりし其さまハ誠

日本の盛んなる此國の名高さ歌さらにとてはなし　此ころの村近の男女の生徒二三人又ハ子人の残して

並列して風琴の音に随ひて拍子を合せ久下(クゲ)と云ふ所にて多くの男女多く集りて

往来をなして　近藤芳樹うたをまたて熊谷とて久下の女をもこさけて行幸まつなり

熊谷の宿ハ中山道にして殊に有名なる大にして町も広く家も続きて夜の入にける

清水橋の東にも学校の生徒凡そ百名人並に並び立ち女生徒ハ袴をつけてしく京人によし

券をまうく　午後二時過に此の熊谷に行在所ハ本陣一所目の竹井耕平が家にて其家の庭に

据えてる古偶ハ源平の時代の名高き中将附の地座ハ掘出したる古物にて余年の

物といふしれて高さ三尺ばかり文字も残しき古なしと黒して残りて見えて今も此

天皇も御覧ありけんと心せまりて帝や歩り行く午後に熊谷の某の家を拝借して古物

などを持ちて天覧に備へまゐらせ甲冑又直実が用ひし弓の鞘と鍬の鞍又は鞍の名前

なとハ数百年の物にて錆たれど切人し熊谷ハ古く續けり市中ハ仮屋の陳設を

四ツ谷の家より墨染の旗と云ふ紙を道より集りて来る所に余る程なき

九月六日朝十時に熊谷行在所を御発輦ありて旅宿に出られて着かれたる所ハ御門を掛るよ

今朝ハ四方の山霧晴して清き空に朝明(アカリ)の風に袂をふれしく人もせず出て沢を出て西北の

方に出り入りハ秩父ハ妙義榛名の山々南ハ小の方の遠く霞て赤城山の麓に同じく見ゆ

さまさまく一面に青々たる広き田の面に大宮駅の辺りより見ゆる大人し女たちの熊谷へ

此方ハ道も能あしからずして田畑の眺めよく何れも皆作りて 風景のよろしきを詠けり
原嶋の里玉井村など過ぎゆけば 新堀村ゆく中村まで石方に宗休をあり此て主とし
主せしもの指見へ人並多く外にも学校の生徒共百人となく 並列して指行を 一直
にゆく様に並んで行列にて先立するに続く男が生出まゐりて秋草の草に寄り居ていと
たぐひなき狼出すと何事かりと立止まりて見ケバ「旅人よ あらけらぶ飛ぶみめぐその
つゆ火を折て放むしの原」とぞ誦みける 吟ウなり 座するハ此行なる去の身の呆ける
家ハ世界の希なり 此年に先だちて車をもおせる 行ハ程なく深草に忘れける 草木が
町の寺町に至るまでつゞく間と右手の竹を並べ主て 寂蓮庵と号見き鍵をきり
かけ又吉川に来て 桜町を詠して 宿ハ寛と 盆を背が一夜もまゐりける 少く山を 新古くし
押しろく背負込く悼ましき京の家と 新摩くならふく 此前ハ拠安かり何とて とり

晴まて姿りまて茶飾りて以て歌を書うんて新を争ひ走て実ハ此辺は殊の外
外し見て宗と世界えし稲田の方え宗休の跡を出まして少しとして桑畑にて
道の案内なりて人家に寄りしに姑娘かりハ農家の盛んなる地にてならく抱へて出来る男
女も共に業の家に解け集まりて賑やかに打ち寄り連れて風景の見事さを詠むなりけり
誦みて事く見えの帰とて中しありしかやと思ひのまゝなり 足部村より
萬海寺村の道 此所ハ此所よりの村なり 学校の生徒凡そ三人 中楽校生徒と此て高傍を
主て一様くに並び座りて去ゆく温勝寺にゆく此所に門口に一寸山体なり
此寺に拠したる柳宗元の画と云物と天竜に依絹地にて男女の仙人を画けり
いと古雅にて面白き物也 是ハ寺の流形の物にてなりし窓氏邦此寺の傍に結りたる
物と又道の傍に小さき寺 足部 忠滝が寺とて忠滝吏の像 物 大き

抑かゝる文字の時の抑も思ひ付しと信解しなりて蓋漆其紙任し既に式ある文字の大概なりし迄
なる者は難し思ふ是は紙等に丹後王宝が造紙のありと見えて尤も風しなりし丈夫
貴く努むべきなりと思ふ好事者も猶化せしやけるん紀王は世に大夜を人伝へ来る
去に於て主として是なりとて其大枝と云字も記しつゝ今世の予は小山川は新子に任侍し
去りとて筆を何ぞ為る堀田牧国の作りし学校生徒家多く三五もで私は其ぐ
東の方に回りに島村なりし十府廿しる色そ去れ後に其業作りせし小松与兵衛翁村
左の如く了へ某君と申ふ筆作りしに之府には松陰の如く中道く梅川と申すの上に三百と
是まで修業作りし中学寄宿より作りし中学の塾に入りしに今より十府の学舎に行き
仏蘭の大学人には少人には其腹の玉織りとあい塩梅くありて高殿の歌すおそる翁其也
へつらひし勝りの腹より行べくしと云う迄々に吟ぎもとて行くべきの出る下ど

是ならしと附言をなりとさきこと一つ文の際りもいくる　一所に印刷書あるや
其町の小児皆其製紙所作り募しげなる十七八の娘が三年余人住かりし紙を
とりたる世界を開通する処の者にて世界を一筆させもいく敷地作らせ
是は輪出業に習う洋の精製なる彦根を以て京都より三月しと天皇陛下は修へ
扨前者其の名を存りて其業の便に立て敷地はの錦なり記は勧励
貧かくに今千名を示し編みり其のか小島村君行待なとしる通りて職種の全家
学校の生徒其名百人となく其業を信しりが中より鬼の以例しく生をみえ
利くしあなる此人の製品を見えたる世界の其好ら家人の家紋の出来しくる所柄なる是非
恐るべし其の徒へ何業の其種とり其積業の本とり得世るべき事をとや成りんと見る
約さぬ令夕の新町の緑に沿ふ之年後二十五年に開化

今朝ハ七時新町紡績所を御発輦にて屑糸紡績機械所を御巡覧行り掛り
官員并に女工男女等まで宿舎より皆出て迎へ奉り紡糸製糸法など其計算等まで奏上に
及び左ハ深く感賞ありて御褒賞を賜ひし名高き行り滝の体ある所行りて右に
出でましまして百年の家より川行り家々千余戸を出て御巡幸の為に供御
給ひし處前橋を御幸遊ばされ御家人案内其他を供奉せし外全く其地にて御休所行り
従来大手町なる紡糸所を御覧ありて又新町より出立し前橋に入らせられ県庁にて
御休み遊ばされ夫より四方の眺めいと好き所に御座ありて一同拝謁なし奉り
給ひし者へ御菓子を賜ひて此度は共に恐れ入りし由を奏上しける程に
上の御車を拝し奉り数多の人々群集して御車の通り行き給ふを拝し奉りしが
なかなか筆にも尽し難き御威光にて十時頃前橋へ着御ありたり

生糸所と紡糸所とにて御覧ありし時十二時半頃此處を御発輦ありて夫より少し
進ませ給ひて前橋なる群馬県庁に臨幸ましまして所謂県庁に行在所を
の御旅館と定め給ひ参議供奉の人々を御召ありて玉座の辺に御物の青木の
落合にて桃の木なと植え給ひて四方の眺めいと好き所に位置を移し給ひ
とど此處にて田園の景色なと御覧ありて夫より進ませ給ひて御車ハ前橋の
林倉等まで進ませ給ひ又此処にて楽しみて刀利川の景色を御覧せさせ給ひ
官ハ此処にて御休みましまして二十余丁ばかり行くと程なく御着ありて此供
の人々もし大いに御威光を拝し奉りし府県の御先導ありて紡糸所を
出て後ハ高く御発輦ありて又行在所に入らせ給ひ文部大輔も供奉
右の儀楊州の紙にて上つりしものなり

中にも年の若き多く上尾の驛(えき)を過ける男をみな人多く拝みに出るを見て伊勢

物語なりけるみやこ鳥の黒ものぞかりけり) 道の邊と 風ちよくの歌が若かりしも睡

奉拜 富岡製絲場長句四韻

佩玉鳴鑾鳳駕 肅拜儀衛畫鳩班 雲懷異日張青繖 水起清風是碧瀾

草木添光連北闕 旌旗輝影度東山 聖時人士何多幸 仰拜天威咫尺門

皇后宮七時頃製糸場に臨幸あらせられ大書院にて御昼餐を召させらるゝかく

直ちに繰糸場に出御ありて廊下より段々に御覧遊ばされけるを

(此所は初め製糸の機械を見て廊下に新築し縁側より元年拝観を許されし所にて御前に

小女子等拝見なりし)暫く有て繰糸場の後を御巡覧 進んで先づ

座右の女工場を上られ次に繰糸場を御覧ありて人民の作業を

なすところの業を御覧ありて御感ありしとなん)又繰糸場の外に

尚又御覧所を上られ其後御休憩所にて御物を召させらるゝ(皆此所の事務長の役を勤めし

事なり)又繰糸の傍らに役所あり一同其所にて御覧あり陳列せし物品を

能く御覧ありて又御一同に御上覧(諸種の物品を差出して御覧に入れ)

陳列したる品の内に生糸繭類の多きを見て洋服を着たるものの精細なる

事の次第を述べて(其由を申上げて)御感ありし(織物及び糸を織りて

又物品を以て御覧に入れ繰糸の由を申上げ雛形を出して製糸

業の組織仕方にて製造し又御覧ありて又製絲場に至り又製糸の

縷を以て製法の所を御覧ありて其功は製糸のみならず又世に

生糸の第二位にして御覧せられたる際其製糸の製法を出して便安くして

且役料ハ相止ミ出兵の苦労ハ上へ萬代金五千両を下し二十四万石余ぐみの恩を以て供奉れ
方これ以宗要よりしと少からしと　此日見寺にて平山藤中の役務に入所擁く
体裁にて兼せ命ニ　隠居なる謹書を移く　於今ハ教え及ひ生徒の名簿まで
候ゆへ入級の上友文備へ筆く史ハ師範を採録方と從見へ事りて紀事命下
還年行かせしまでう　今ハ営下此先人を招待あり精ゆくてそはや二千人斗りの
老義を与る頗よ高せ又ハ人分なまの世話ハ容貌にかなふして難儀ハ与る元と従ふ
此道筋よかる前ゆく走ハ又かづさ出してあちこちとまでつきあり小御養挙の附よ
本町通り御通行の節よ宮を掛て招待役をあつとの他にしはらくまし止やまで腐り
此通りの折からハ割数の徳度の端なるとの外ハ又えぶらし　手控所文前橋御養挙之
今晩ハ子供の惣ゆく紀五前ハ先院新築の正勝前く　昨夜々の夕刻く道ハ付しか

夜く渡り前し去れ桂ハ十一ケ年二十年をの道と来りとせ之御掛け小蓮く来りかさ給
男女の相見人多くハ聖護宗中よ元屋し候道と小室山の如くよ集り例の学校生徒ハ総て成
加く并列せり女生徒の詩を歌しくて見物ハ又事宜商家農ハ多く詩文書巻の旅あり
宮殿を高築なる様なるへし　昨今前橋御養挙の時ハ甚しき雑踏にて使よふとたり
従家人しかるに公中にハ花を高たるハ何家の先りハ知る様に取く松を飾く花
沿ひてなく女たり当ハ先生しき此なとてし公家の庭の額事ハ沢錦よ出途之
昨今の本家上府へと庭前樹ル花を告て縣庁是郡役所をはしへと出前して
有名なる上段の三方簿をみんとて新町を出て之より之道を作りて難所を通り
藤岡をまとの道北角に二丁斗り入りて宗永寺とて云寺に冊本ハ古稀何のるを
三番りてみるよ老仏をもく近へて下る僧は其寺主名と示せて家をあるよ来又

の剣一ツ片刃の剣二ツ何れも佳にて清く霜を結ぶが如く鋭性なる者也大なる鬟瓶(イハイデ)一ツ又青銅の
盃杯何れも面白き物也是は五六十年前に此寺此東の小高き岡を堀りしに石櫃
の内より出たる也其石櫃は出てしと同じく此寺に存りと云傳て行て見るべし
長サ八尺巾四尺程の木の石は船の如くに作り蓋の高さ一尺八寸斗にて四方に縄を
掛る為に付たるなるべしさて是なり古へ貴人の墓なるべし此寺の西に二子山と云岡有り行きて
見るに東西二十計南北も十余間前方後円の池を穿り葺石を続らせり是ぞ天子の陵墓の法に
似たり古の皇族の墓なりて疑ひ無し思ふに豊城入彦の尊此皇子にて日本書紀に豊城
命令は東山道上毛野君下毛野君の始祖也と見ゆ其子孫下毛野朝臣古麻呂
公等あまたあり嗚呼其の考へみるに此佐太公の墓成べしと其説は今此白石村
又其隣りなる落合村を猿田と云へる地名の存るなり此辺は猿田郷と云へり今鑑実

君の孫に上毛野朝臣の又世の孫に佐太公有り

の帝御代にも云ふ後人の思ふ所に此佐太公の石村此地なりしこと思ふべし
又小串村石神村なども有る二丁斗りして多胡郡矢田村より此多胡の古
碑へ行くべき道は近道は田の間を通りて小山を越へ小川を渡り池村と云処より此碑へ
高崎に出て帰る

今日午後所有の多胡碑の傍なる山に在る所の多胡郡が建郡を祝して出せる
の礼に此碑の拓本を刷りて見せさせしに其情にて思ひ是に写してみて写せし
玉への土産に当館にて作りし拓本を贈るに此八千年の昔人が彫刻せし事なるべし
此碑の文字の形も太く正しく見るにも碑の文字と書の筆とは異なり
今日当館にて精緻なる拓本を取らせて是を返へし給ひて金百円
を賜りし右大臣岩倉公に之を贈りぬ其文に

深沢睦象
是郷長にて

其方共悉皆設置ノ製絲器械ヲ以テ絲ヲ精良ナラシメ就中 桐生組 吾妻組
沼田組の如きハ其最も顕著なり依て其効を賞し 従前奨励善意の道 右之通
盃一つを賜ふ
明治十二年九月 日
右大臣岩倉具視

と此節聞ゆる其精絲原料を出す生絲を勧業場にて一見せしが底抜上等之
勧業場の列品の内に赤城牧社より出したる牛乳粉と精製にて見るべきもの又相生
より出したる絵紙の織物に劣らぬ製造あり共に糊を用ゐざる品にて大に面目の出来
意外に宜しく思はれたり」 今月十四日より当所の前橋町にて聖上御発輦に
成るや前橋町の商家ハ其来るを待ちて行燈や屋台を掲げて祝ひ
ける其余の往還を通ひして此所の人々の待ちて御目に為し奉らんと待ぎ
立ち並ぶ方より出る数人に供奉の娘の婦人迄も見送り情の深き人小学校等を迎
せんと言ふて大混雑なく静かに市が並ぶなり

午後に前橋に帰へ御出輦の時ハ東京往還筋の各所で新町の両側に並列せし
紛と松蔭の所をなせりし 夫れ御出立に午後五時頃供奉の皮具へ祝酒を給ふ
但別に陛下より料を得れり今日午後前橋へ向ひと御用の出来に係りそ大に国都せり
今夜五時の四半頃の旧の頃より烟火を空に打揚げ上級の家よりも仕る天が下に
両を衛て打揚る烟花ハ皆雲中に消して能く見るに是こそ近くて早く消るハ残
帰りしなり」 続て居待臣ハ聊か家なる御土産を見せし迄にて
然るにより陛の旨にて大方保の勝人の此度の御待をして与まれりとも思ひ
其風やすも絵と平記しこ後ハ世俗の年中にて有りし 然るに大方保去ハ来して寛せて後ハ
世及アノ一件ハ皆うちなく然て切実せしむるかとの評判をなすハ忠臣五例の是様
の心を振り為の謀略なく実ハ取せたるして世紀に表向の体裁に加へず慶と皆也

五月
九段
招魂社祭

せき達へる池塘の流をもちゐたる中を大なる哉人が知る世来より秋は廿と定体が知り
今朝年ぞ七月五日を定め東京招魂社の祭は年々行せ
られ当年の武官を招く隠なく戦死者の霊を慰めんが為に設けし遊魂の人を悼ならむ
深き此恩恵の程を知らしめて祭を行ふ其の儀式を催しける人々ことに多くして紀念の標と
此頃に世に知られたる年で祭典は還行せらるゝに此処を流れし今年十一月にも
宮前は付近に至るまで供物を降りて賑はしく遠く田畑の如くなれば
相見ゆる宮の所は近く有りて鳥居の柱の道より遠く高く其の社殿の堂は
神殿を繞らる本殿を立て一二町に並列して相対せる岩井鼻など云ふを
見るに道は社殿より世の雄弁なる高利根などの境内に出て見るなる人は
人家の屋根より高き田の畔に掛けなどして家が在るは高欄に凭れて

一天下泰平の御代を祝ひまつると祝ひ錦の幡かざりて賑はしき中に枝葉繁く茂りて休みあり
其夜は燈火の如く列ね照らして趣向の老翁を見物の人が目を驚かしくと競ひつ方に紅提灯
まで点して三七日間は賑はしく更に葉の茂れる高き処に世の人を送りて皆百余人
降りて来る参詣人の群集が何れも見えずして只先を争ふ人も多く肌を見せ汗を
道の松並木何れも両側に立て行くを見る人の多くの提灯の光が並
乙女たちの風俗は一人一人趣き異なる(写真参照)小間物屋様の品などは見るべし
大抵皆揃へ出で一本様の人になる樹木の下より白き物の多く見ゆるは誰ぞや
わらんべども見物に来ては多く集ひて行く何ぞと云ふに神前の御輿を迎へて
白絹を着たる神主(白き装束)を乗せたる神輿が廿人余で担ぎ行く是も其行列
只の鳥居の前を通る時は大いに見物人の世話をする枝葉の陰の柵の外より遊ぶ子らの

此く下野国都賀郡の旧家なる某ハ高峯を越へし時見へし趣ハ土中を掘りし時
三尺余り掘たる所に庭石の如きものありて尚掘りて其半の奇なるを見れハ又一尺許り
しきものにて立石とも見へ四方の奇なるを語り出して見へけり其様ハ
十町斗り東に常村と云所にて其長さ一寸ばかりの角の長く其体あり其長サ[illegible]
又宝暦年の頃大国郡の如く出たる頭の骨を得て公京。八木なとと
云ふとも是にまた雄川の西畔にて龍が窟と云ふ所にて是は大坂とて険しき坂の
なりしを世の此事を聞て其後の此より切りかけて掛りしが背後初めに懸りて
御功を奉り又此の事の尚ハ山に登りて其の事の頭に骨を得たり
し熊は蕃くんを用ひて待事二十余人の者の骨を見る事ありて
通りなりし其山に入りて川向ふに來て頭をとり復て其葉の里のうちゆ

より其村に来たり其辺田畑の中より骨を掘出せしに其の頭ハ[illegible]
りしと見へ其地を掘出して見れハ其骨とて其玉を出せしと
一眼の骨の所の山骨の頭ハ今も其円形なり又今も其所に其人の
の前に出て又其事を記して是ハ天保元年の新川の人の云ふ
の頭の骨にて角の長さ一寸程にて二尺余の其頭の骨ハ是ハ頭骨の如し
かるに其骨の形の其余ハ出して角の形を備へたる其骨の
係りし是ハ其頃の角を備へて奇なる其角の如し世の人よりも
其奇を顕してある中に上州勢多郡の新井氏と云者の
語りて奇なるかの其骨の如くせしを其人とも見へ其のみ知れるとも
と云ふ事を記せしものにて其の後其の出せる其骨の事を記す

六十三経 辰巳荒

しくの風情を賦す

人ぞり千束大府松井田りまでや比奈柳行り旅程を修り終りて夜しも朝六時備ふそ

駕籠を乞うて行く出立して十七町余今に旅程を終りて出立の事て以支度せる是

すでに帯ひの雲に隠るる軽井沢の宿を眺めて三ケ所やまぬし 碓氷峠の麓近くと

思ひ出でて南は碓氷川を隔てて妙義山を鼻付に渡しき坂を下りて又半里で坂本村なる

近の右の方なる高く中村重三郎方で宗休行し 湖の初めきその名残りや横雲

なりじき傍りて妙義山の表情を見て下りて朝日の果たる比は浅かり情を流りて

後とてる五高峯の性近くも畳として 雲表に聳へ宇宙断崖その風を映く

群仙の遊屋しても三十の峰を妙なるの奇を数へて端霧たるが如く降下らる

其の何とも云々相携へて清楼るが如き奥は漸く雲方ふるれ霧もる其の余り候さ

先へ高く一峯立ち一峯後に一峯出で事又一高き表をそ聳え立たる中に一巻の

能く見えて市に比するを 雪立ちて珍りしや思ひはん竹枝惠の用ふる目が送りて旅館

やうやう出立して井村の小さん山の後き切り坂たる其前より森の中を旅人のゆき

今日男が物語りして三分五十鐘を聞き道洋靴をもささ御通輦を見分けて風の鳥居

をヒラリと見さとりたのみ物がたりける ザンギリ頭をあげて思へ行くは三ヌトには素手の

胡座がりに行方知らんと囁き合しは例の拓の山さんやら横川村の名は山枝と云ふ

女とて一遍にて雅筆は此道によし君鳥居さん相手とて高く人をして矢し碓氷川を渡りて平村と云

急に別をしても人家行きて桑畑いと吹く芸者とて何家にも出かけて此山岸なる[illegible]

鬼にかかる身かな人して世にも蓋ても云ふ茗荷さ淡路を取り附ひ坂の[illegible]

王せる山々に悩く世の休所て世路を無きに左に人心を向ひて生まれたる只一掛の[illegible]

碓氷の坂なれど近ごろ郡長の尽力ありて新道を作らせ稍平坦にせしめたれど猶すくなからぬ
先月の大雨にて破損ありしかバ村道難ハ旧道なりしなりとのことにて掛りの
官吏と人民の協力にて一所に近隣集りて今日の修繕をなしたるハ亦一つの
徽章を感ずるなり其ハ行旅の人為に其恩を懐く屏風岩とて切りたてたるごとき
巌の聳えたる多くあり其下ハ山谿なり見えわたり見えがたく山に沿ひ曲りくねりせまりて踏みあやうく
此処よりハ以下ハ信州の人にて担ひ歩むと行みつゝ山を登りてやがて碓氷の山頂に至れハ
西四辻侍従山本侍補其他二三人と共にし一葉の山上にて断崖より飛瀑の落つる処多かり
分れハ今を見て目をとめて山みちハ夫々又以て坂を又以て羊腸(ツヅラヲリ)なる坂を登りて山家ぐ゛ら
と云ふ所に宿り休みて来りし秋とまたなる楓の紅葉のいと見事なるを見て
厳窟にて休みて事ありハ行在所にて安ひる近藤芳樹の設ありし所に

紅葉し前代の秋のさまをけはひと深くさまざまに似たりしたるものの紀
如き碓氷よりも軽井沢ならハまづ御休憩所にて暫くしてそこの先に戸毎の家々に旗旒を立てゝ
掲げて奉迎せしを又後方へ出でたるもの沿道の人々なり人史にも似たり
今日はとく至着の如く小学校の生徒を出だしたる道の傍に学校の生徒数名
並列して拝礼せり此地の大師は御遊の例に従ふて御迎へ入ろし人々九歳計の小村
某と云ふ学生を召して法律を三度試の答をなさしめ学術を問ひ給ひ知識を見たまはんと要
せられ漸く読書を聴かせたまふ御輿に入らせ給ひ猶ほ御覧せられ給ひて
らせ給ひて御前を過させ給ひて坂を登りかゝりし山の上にいたりて皇后の御使を召
せられし平会町の間に人家一軒もなし暫し日本武尊の吾嬬(ワガツマ)はやと宣ひし
地なりとて山に入るに上りて切りたる処の南面を碑所とて僅かに人家ありて立たる上州

と信州の国境にして共境に在る碓氷峠の往来にて繁栄なりし今日は坂道にして且つ
道程も長く多分平地にして人家稀にして旅人の疲労多し（四五里
信濃路）さしも猶て陸は十町余なる見るべき所は明らかに書き尽すべし
（但し軽井沢より横川迄今も未だ手帳（日記）に記す）
略して諸書を載せずこれを省略す　碓氷峠は此横川駅より宗休の
之これ井沢より英語の所謂ガルムメートル（ガルムメートル）を以て世界の高さと
測る也　是は東京にて計る所で千二町余にして高さを云せり　此の坂は急なせし
て坂を下りせる暫くの所にて漸く軽井沢の駅に至る　又足の下よりして其の方よ
小さく見ゆるは離山にて佐久郡の山々も目の前に連なりて箱庭を見るが如き景色を指
とまりて方に見へる北の方に浅間山あり　今日は雲深くして全体を見ることをえず坂を

下り切りて西の方を見ると雪ある山々して軽井沢の駅に至る（此は無駄にて此処迄今宿とな
らずとも荒れたる佐久郡高原の一部にして土地荒廃せり是より先は荒地にて土地痩せたり（軽井沢より
沓掛までの間は東に碓氷の山脈を控へ北は浅間山の山麓にて地形はなだらかに平坦なる
荒野にて広き原野なり牛馬の放牧に適せる所多く人家は稀にて耕作の田畑もなき原の中を
行くこと寂寞として高き木なども稀にて只だ雑草のみ繁茂せるを見る又は地味痩せたるが如し
浅間の麓より西の方に向ふに平原にして其の方や無数の南の方に人家あるさ一村あり
発地村といふ　之は宮路にして沓掛の駅は今は長倉と改称せりとぞ　此辺より離山
の西には碓氷の峠見ゆ　此の下に在りて小さき丘と見ゆる離山は富士山に似て高く見ゆる
高山なり　成る程人の世とさまざまに似たる事共多くして猶山の景色つきせず又やむことなし
是は浅間山の南麓にして其の人家は何れも田畑を耕して生計を立つる人々は此辺前より十人

二十丁程て稗田ゟ渡り行道を見へくし山家なぐら家居の多みて美しく衣服などの徒
げなく稗田文庫老なうかうたし依頼と云ふ道ハ稍人里めきく趣かきくる娘結ひ
又印文字の家の管下に往路し見ゆる女の十七八年生髪を造の方優とえ見し初なるして立ち
居り夫より西の坂をとり待つる西の方へとしくる東へ八王子方ニ出る道見へ今左三日人年
集落あり学校の生徒ハ何れに洋服を着物へ道氏小例に並列して来迎ふると絶し
かる騰て作そ士家牛枝尺ニ朝し内道筆を待ちく了秋の板橋し来迎ハ夫々
二三十の間ハ文陽と並ふきよりの道なく清水山の木林の東を走るき竹垣一所となり
古みうる村ニ進みの降行坂の南清水淡の入口を過ぎ其なく近村と云ふ八見え出る
老女が家にて秩さる天然を掃しなるんと山あき家し久僧其なし
高尾の方なり　清水山の名を此紛失なぞそて花ちらくの花咲くつどくる

今井ハ進みて龍ケ谷を経て町を東ハ左へ一二丁へ入ゟ八幡神社の
神楽其所左に笠め秀に社の古き画などし此里田の人民の頭花多く集ふく
悦ふ保なり　今ハ上市進みを中宿村馬場村なく以小仏峠へ十家ばかりの平ニ
ありし以小仏行ハ文小沢村の出代坂乃なたなる唐松坂の上にて宿を走り此宿ハ前ニ余甲州
なえ通して風景よし　小沢村ハ上岡部次方からて以宿の全なる所此宿の駅筆行なせられ
西京ゟ以小仏行の此辺ハ西ハなれども地体てあらく淡水村のきよりハ葉細し次第に多し
牧(ボツ)家と云ふ道なく以小仏行まで文甲ハ以小仏行の甲州の所ハ坂の麦側ゟ行ハ田の中よ
流れ行て其流れの端に桜木を植列ねるハ大方の平也よしまた又新井ゟりて海野(ウミノ)によき
無気にて高尾彰を遥かにいと很りし大かたと云ふかへらき町の茂れ合ハ以小仏行の無道ハ多田川
又波にて原の方へ道なり　宿村寄附の以寄筆あるせ　礼付会の新築しける学校を

紛ち新しきなり
長崎御下之学校生徒の内又出る者ハ大抵皆洋服之女生徒ハ
業の時もさらに上田を占め洋服でなく生徒ハ又へ入り
又女は赤のわるのシャーツだらり着く衣を着る多く見くる掛つてカしくのり
でおろかせるハ習ひかろう 昨今ハ道の様にせく随ふ雅楽と撃わしめ人大より
疲労し詠ぶなつとて両国之草稿を綴る支りて寝床に上がりと登るが多くて中く
寝ても通り展帳及剣ある日ひるや 役者の事多き方ハ起きも トウし 一下同を眠りやさん
気ちおりハ大臣を死して部長をもり
途中より来年共ハ技術者ほつきて
昨年より上国の生徒ハ学校多く之居候之世務と又久信しもく内を出でより出
それハ辛ふして信者の人々し欲はす詩作りなどして議の人を越ゆらせてらむ
昨夜紛ち来る昨年七月より西南の軍に従事せし人の年々部人者の思岳にて友勝よ
流劇を見け済よ免かりしと漢軍高徒に入りて命を助りう当時の庭前中なる
上国の士族達軍と対懸山盛陀を本邦の相撲を任せ付くまでしたらよ 盛陀ハ彼様
一節とたち山嶽軍女帰りて居し 今々の中近年を祝して参り近々源氏の香をさ長狩むり とりのす

今々今ハ長崎を通して以しきき出入の例より子く年来崩より上図と内業華
行せる上国町への絵の放事世務所く左する店ある有なりとの年 出方衛近の
よりハ二三年をかけく名丈よ出でるとの多く来近ふ云やしと云ふ方 世多く上国絵と
云歳枚も出来せ来し出るも古地方人気くし之派名く相見る出てる人くし御りして貴様信仮
輯集して之旋の地ときき程之世務と来出しハ町をへ通の来りし有名人ハ輯集せり東ホハ今
其のき山脈の上に示は大ささかり最山行う其下曲りの川に浴りく泉山の方を少よ迫る
世務も塩原村と云世辺の村とかや出る有名人ハ多く嵐と云所ハ川の方ふく十ケ位の外
之世之の流浄澗々るみく此休行り並新仲徐なれど之村ハ其出ず向さて俗する多く
九岸枝味画客の高名在る方まて此休行う学校生徒多く道信よ礼拝せり世務の新町
まて長持の人足びやと并例とても死しるヤしとして除の医者を兄せしまでともや無し

せざれバ足ハ頭痛せり然るに良薬を塗り冷水を注ぎかけ冷せば頭に冷水を注ぐ
掛けて且つ其上に指をもって頭より水を注ぎ足の裏に灸をすゑなどして立て夜
もすがら足をさすり布団に臥しけり翌朝ハ未だ起きず或ハ頭痛でハなくいかにも何ぞして
かゝる事ありて　坂木の宿ハ人家の多き村にて稲荷が森あり道側の人家の裏に宿りて
見るに僅し人家の間より出でゝハ見えたり坂木を出で横吹と云ふ所より坂部に岩間の
新道あり是ハ元ハ山腹にありしを千曲川の川に沿ひて石垣ある道を築
きたり　十日町(?)に至り兼て用意の弁当を取り柳原某方にて昼食をとりける
当時此所を出て千曲川に沿ひて小宿所多く人家繁昌して自ら
町の体裁をなせり其宿ハ途中絶えず当宿の主人ハ古き人にて之を語れり
時に詳細せり松尾村に南朝の宗良親王の墓所と云ふ墓ありと遠くより拝したり

寂蒔(ジヤクマク)村といふを過ぎ新町中を出て屋代に至り宿なくして梶浦某方にて休みアリ
旅店を出て少しゆけバ千曲川の渡しあり舟にて渡り水を渡りて舟橋をかけて
風雅を添ふ橋を渡りて矢代に至る是より川は桂川の右
狩場にハ姨捨山ハ西の方に高く見えたり姨捨を過ぎ篠ノ井追分に至り此所ハ駅なり
此駅の出口を過ぎて山村より出る娘ハ之に逢ふ十四五ばかり頭に笠を戴きたる女等
髪ハいやしげなるき島田髷なり其外のかんざし一つさしたり顔共に
日にやけて黒く肩などつけたり いかにも賤しく鼻も
低く新しき赤き襷を腰にまとひて或ハ百姓家の
軒下の縁の際にて傍の人の居るを見てげに見る所ハ
めぐりくるくる上げなまりたる人を多く振り返りて見てゐるもをかしきさまなりや

尓と云ふ處は伊藤盛景か館方にて此山休らひ光秀の陣の方は郎ら川勝島の左陣の方へ
今は篠とき斎田のもとなれども謙信が陣取りし事（西條なるべし）ありし旗鑑の前にて山本勘助が陣
張せしと云ふ其代の城を備へ其後永禄二年ト計なりけるは背附の旗を思ひ出しけれ歴とれし行
とも思ひやりもなかりけり然るにかくの如く今も今宝永泡など云ふ村を見させ玉ひ
丹波島にては柳沢山で方々に此山休らひ丹波山を此に生ずるは犀川の末なりて来まち
千曲川と合ひ犀川の東よりの所を見て相見え今さ鹿の如く群集せり其處より聞は洋勝
にて二つに並列し其後ここに池しまる旗を流出して少く川風に吹かれて整へは
指令長髪と云ふ者達へは遠く山の旗をとり我子帽を脱ぎして陣事をかいくく
一統に相待ちて京の旗を翻せり是を揚げて此の所見ては相見え人多く是ぞ長髪
軽尾にて二十丁計なれども兵者は両側へ人家多く山にて宿り計に寄するところ

川中島陣に行せしは今夜光秀方か遠々も姫の町々の縁に家より一方なりしに今日大雪と
井上某か備へ光秀を見よとて遠く戒樫を見て陸遠寄と云ふ雲の如く広くせし遠と
志備へ今日は古備より火をともしも世よく言ふ所より世形は有々火はとも一所に亡兵の来り
然らば陽明の地より行くと云ふしや其の何と云ふ事の所へ至りてく所々在せる長髪軽居
又中村之火を炊せしく見物して見て十五六歳の如くに営の下此土坑せり下るは
京都延としきて行しとの事　今日は長きに丁卯（上田より十里）にて人々来りて大いに寄せ来り吟味
吟味の別として京さ中にの共なりしは丹波島の足の如く本来は大よりも動きを寄せて吟味
あり人家より京都牛（うし）を足借りして云ふ連の人で行くものへ由りて四方は人の来るとして
様なくして云ふリンなるものが国の志をしてまつてイヤとして牛よりも振く光秀寄らせて
まるで様なくして　長髪軽の物よ京は光秀此の大勢を以て云ふ南京なり

内藤芳樹之を作奉りし嫁給ふの詠をとるところとぞ

まださりしや今宵ならずをバさて、しくと回毎の月をみんとおもへど

手前入所の生素は此の如く御座へ[illegible]せしる艶に樹[illegible]度へ[illegible]草の如く

女高紀更像高を写して艶麗の[illegible]へなる　雪の上草をうつしたる[illegible]

せしる夫々正確に入せしる其艶を詠め文艶麗華粉の模写を奏上なり

奉る　雪の上は金[illegible]を離れたるも多く保を此迄[illegible]行き[illegible]

[illegible]此粉[illegible]に入せしめて[illegible]行きて[illegible]

の夫々[illegible]の例に従ひて[illegible]

[illegible]行せしれ夫々裁判所之庭へ[illegible]行せしれ[illegible]裁判[illegible]

[illegible]裁判[illegible]

[illegible]親しく開きて手前井十[illegible]

[illegible]雪の如く[illegible]

文[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]其人[illegible]の[illegible]小説上[illegible]の[illegible]

[illegible]

城山公園へ[illegible]行せしる[illegible]

[illegible]公園[illegible]行せ[illegible]

[illegible]入せしめて[illegible]行せ[illegible]の[illegible]文科[illegible]

目にみえつき高爽の地にて犀川千曲川を始め川中島の古戦場なと指顧の間にあ
りて 望むに一入感慨を起さしむ 折柄午後二時頃にて荒の人家が耕し立入る芝
ふとて花火を打揚けたく 處々に倫人等か耕作人の如くを移して変化して
雲際に現じまての有様にて誠に面白く暫く立止て寒気に耐難しまゝして
厳しく行せられたり 帰りしかは其時は夕暮となりて燈火の光を照らして思し
かくも明かに見る人もなし此しこそ満に成りて前者らしく又何ぞ志多し 将に鳴る者
の或は此方から今夜行く道を西の田間に取りて千曲川を渡りて信州の名所姨捨山を
又南に行き進みて今の人此姨捨山を指して以は更科山の山腹にある地底(コブ)にて
前の方より之を望めは後の山と一所になりて信州の名所にてなく孫に月を賞せる所
雲際に聳へる山なりて古人か歌なとに詠みし冠着なし思ふに見て道

高く聳る山寺の元世法師とか等しく今やも家に存在を付けて 姨捨と云
修行を附会しけることのかうかうて因みの月は近世の俳諧師などが彼是と云ひさせけ
る此修行者も歌人なりとて将に月の姨捨山は今の俳人冠着(カブリキ)山を云ふ名所にて詠み
此山は最も高く聳えてあれは嵩なる月の景色は定めて宜しかるべく
此八日六合目駅にて中食を取りて正午過きて折柄埴科村の京昌(コズコト)言と云者が来て
石笛を吹きて一夫が天に達し其ちうち無類の訣を今も行ひて去る六月の夜遊に来訪の
そて 天覧を仕へたる古き物の間に天此石笛と試しる物なりと得て来りて所持あるゆゑ
是は成る嘉代ある物なりやと仰せ付けて倍の所方に持ちて来り之を呼ひよ
叶合せず否付けて其手を休せ寄せて上杉の名と藩の石笛を持て申す
此越に入来ての吹声をその人よ発ち遂けて其音を見て又書きとし

かくて昌泰八幡の年宮主の御恩を蒙りしとて感涙せきあへて拗ねりして
たゝ此の磐笛を得たる由来を記して終れり
弘化丁未春我信震災ノ為ニ山崩レ水湧キ災ノ及ブ所六郡ニテ國史ヲ案スルニ
光孝天皇仁和丁未信州六郡此災アリ然シテ丁未三月廿四日ソノ支干ト月日
ヲ同フスコト二九百六十一年トス然ル國史其六郡ノ地名ヲ載スルナシ予因テ
其災ノ及ブ所自ラ山川ヲ跋渉シ戸隠山ニ詣テ途中偶然土中ヨリ笛ヲ拾ヒ
得タリ亦後西京ニ上リ千種三位有功卿ニ詣リ古ヘ天ノ磐笛アルコトヲ承リ
再ヒ携テ上京シ呈覧ス時又樂家東儀多氏ニ質スニ律呂越ニ協フ而メ
天盤石笛ノ事ハ御室御所ニテ本朝事始ニ見ユ其書少納言通憲ノ所撰ト云
形胡笳ニ似タリ云々予カ所蔵長ク手来ニ過ズ又胡笳ニ似タリ其声清亮ニメ

氣息ノ緩急ニ依テ律呂甲乙ノ音アリソノ甲ノ音ニ至テハ石ヲ裂ガ如ク安寛ニ
梁塵ヲ飛舞ストモ云ベキ可ニ　高光ク戸隠に詣る道にて拾ひ得る天の（正三位有功）
磐笛を見て　神さびし山の岩ほやときふるものちりとまつからふらん
九月手作為守比にて悉やとみり　世になき物を世に流しまして代々めでたきと申し伝へ
是ハ若光寺にて山道説に見えしと承りき　若光寺ハ隠倉時代ハ佛寺と
なりしか其ハ神社にして今ハ諏訪神社の末社にて武内の神社なりし所の
時代より併せて斎しの神の此若光寺にて同郡の寺を推し移して神社と
いふく佛寺を合併しける若なりし八幡を祀りしも今も猶天皇の御代よ
り波堀にて拾ひ来りしも今ハ新設の如く其の昔より云ひ伝へたる
若光寺と云ふは其の比の風土に依りて世の人ハ悩みて神社となしまつる

震

たまでゞ今より八月に善光寺まで云ふよ逸る役の影ハ然も花やかにて詳し云ふ所
其創立に遡り過 西ハ城山公園へ隣寺の処二百年より前新へ山保運寺行せられる
如来ハ今より移兄を上げ居まて善光寺ハ長野の所せ出と去方村その先と此畜
如く何と知る天子様が此処をもと去る先したるし人民の生殺の先を奉る拝處を限るべき
手垢しなりし先人をも奉施お揭げく 天皇の御なかんと縣廳し非之其子史ハ像
今迄の中に付き進御く寺務所が此節係よかりしり御是でも云ふに宮かへりらを
たるべし此の年数を数え光ハ長ぞ人多数やく安置上ものなる物故ハ煙火の其を様と
死し向ひその善光寺の花火ハ東京に近ごろ又よ生事する処之 新潟縣と永く
盛輝寿ハ時ハ今夕 天津何にて長野縣から出張ありし 今朝九日出発せ
うり出しハ寛間寛川にて此行て様々と寛川佐が来ぐ狭隘の山林にて

信濃の人で此方をこひし二年程の子まへつの到着に 信濃の人でさけハ
浴ひつとと治むし開く 今日公園より善光寺内を此通りへ
行らせしも煙に此馬車にて云ふに桜井社寺ある長横縣令の社寺
ふく其頃よ大本願の副住職并大勧進住持波女東京公家内なく佛像を
此頃行せぬに善光寺副住職と申しハ大僧正の此願をく佛前の営よ
なりわ山善光寺の住職せしまでるが世の影の情さ更今に也て此處しまでし 信濃の
営たし善光寺と一同見たるで其の神を以今ひつからる方と名なる善光寺
まかむじやさ今へりとり 善光寺の別當の浄土宗と天台宗となり浄土の
方を大本願と云ひ天台の方を大勧進と云ふ元ハ天台宗にて後又決りて
郡く虚くうくが手永に入りて両宗の間和合せずて争論を記し次よ大意にて

持ち出さんとする者らしき聞けり

今新潟県上野村長野縣の東京北陸線を元町とふ所を南へ大川町を東へ渡る

人に沢山人の出て世の中の物持の借家の内で一人の男が立出て家事を出し何か業をまとめ

居る所へ東京から来りて店の塗装をなして人用を帰る処なるが其座の中に聞き出して并

否さわり出来る所ではない東京より新町と云ふ所に学校の読本流しく立ちて

住く者は家又は洋服の人も女は業の出来ぬ思ひしく又稼ぐらふ生徒が数百人並

列して往けり夫より道は平坦なりて小さき坂をのぼりつつ大橋を渡り田舎と

云ふ家の前なる家の所より夫々文坂道を上りのぼり涼しく樹陰が高く立つ東京の

草より上りて路を行けば業なる東西を見渡して高台にし夫々坂を下りて西に

出る所に云ふ里を通り過ぎて世は左や所々住宅なれば目の前は多くは緑出る

なく道は坂路なる大に多くなりて道あるかきさき衣さる者に行て娘等には上田藩又は出

ちりめんなどをまとひ多く髪かざりし東京を学びたるが角々しく近江京大坂の

女どもが髪を東京の吉原をまねたるは坂ではなきかとみゆ今日と云ふ人々を見かけて或は人の流

らわしは手拭の中結びて結ひし昔からの老婆などよき者まで十七八の娘が姉と云ふ

の女に乳呑子を抱きかかえ若き女房よりも近所なる髪を結ひて衣裳で見えし

髪の結び方は化粧の事を田舎人又は洋服にて思ふ者も代にて此十歳の娘まで

など衣の半割に出来る年頃の洋装を出せしは食を取りて見れば洋服は平生持ちて着る

もみえるが今では目出度十五六ともなれば年々に沢の辺なる坂を越えて夫から七八丁

行て出坂より下りて平坦は下町の家々を通りて越えたる地方なれど少々なりて

往の出る大通りを御しくは風景のよろしき所に出て坂上より群馬縣の道路は清からく

峠よりは長野驛に至りて山坂多き道なれど行程さのみ遠からず誠に止事なく有
馬も其牽綱を斷て上山坂を上り切りたる処の山間に出し處やりなき処にて世にまれて
此辺より行人は落飯を召しぬ右左ろと云村を北國道驛なる處にして便宜よく往来多
道傍に相続せり世に至て坂道の二多く此傍の東…今日の道は大に開けしもへり峠を
擔ぎ車を挽きなどして登る共に至りく若もり一時半後に柏原の驛に着き給ふ
家あり小休して此所は信濃の山中に尤も…もはや越後の境に近かれば行くは少し
路中の蔦葛は此辺に多くして畑は皆牛馬の飼料にして此道行きて又一里程の間は
路も少しへだり処多し野尻の宿の驛まで等の便宜あまた諸と云ふ列にて北國道筋と云
此里に野尻は寂寞たる山狭なれども芙蓉湖の深く其奥は妙高山高く聳へ雨
少しは近く飯綱山黒姫山並び越後の妙高山を望み空青清翠なる計顕はれ仏坑の

此わたりは小休所にて御膳所なる人家の前に少し許りの庭ありて遥に立ち給ひし山路の跡見えて
山の形を少しく見あげ給ひ坂を登らせ給へば只今小休所あり右は却て此先の方北山
此處より先ず此坂を又少し下らせ給ひて二本木の間は路もうねりたる坂の九十九折（ツヅラヲリ）腸なる坂を下り
着かせ給へば赤川とて小さき川あり是を渡りて程なく又柏原の休憩所に着かせ給ひてなし
是より関川の橋を渡らせ給へば越後の國頸城郡にて今宵の行在所は関川の相在郷右衛門
なる家なり今日の行程十里余なり双頭亀を一尾奉る是は安藤何某の内郎南部
此も其右衛門と云ふ者の家に此双頭亀は安政七年の十月朔日に此右衛門が家
柿の…を取りしと伝ひ…を穫たり…て…
ころ…太名など…式は二文書の士を詩文歌…
天覧に供へ奉らんとて父…の顔見をとけ…なり

てお事に出せしに聖上と共為の程を盛せ給ふも且は助くる地にとや思えん親しく
見たまひて御感せられし 昨日長野にて至る程大様ノ上キ人の頭よけかざしにる出
けらし金を得らるとし花火は安曇之手よりし隨ひ出しけると 安曇里村ち
出しるがなし守かりしよし
今朝七時〈手来〉実門を出発相石郡方を出発轄つかせる其辺は信濃と武蔵の堺よ
ありて此高山の東麓なれは此峯ぞ高きと見て右の方見る所の森林山解定隊と
して西条のかく路よ至るは深山遠谷の間よ立ちは各列は此行兵を出でて行せ玉ふ程
なくも此坂を下りして小の方より世わるに至るは大田切小田〈切〉坂とて此道の所なく名たる
難所なり此花〈ノ〉暗運せ玉ふは当田切なる方西路く三四町計りの急坂をおりて文句なる山の
急坂をおりくる其坂と坂の間よ谷川ありて水の辺共し東白之庭の小石なとし皆白し其
此小川の見よ行し硫黄物の形よ溶解して流れ出るなるへし硫磺なとにやと思へとこそ
前もて見るに当田切を立ちすぎて大田切より此の所をも是さる坂一ツ行りてとまるとまるて
頻くありて大田切之行り九郡をして飯りて京九郡曲るやを川行り見て共しく
白濁なるを見ゆ龍路の此年勝の坂を上りなりしまつと見るより珍強相見ゆる
佩む様くとして儀来雲のめくなる此は絹山勝しも光幻を扱へてく立の赤き嶽の岩が
ねよ勝ちち掛け風樺を極しなり二俣村にては畑山之辛芥かけて此小休行り昊忠誠
ふくは村紙伴頭方ふく此小休行り共録も深川あふしく節乞出方よ速なり儀よ言葉
計りの山寐なれとしお見よ出る男女は験しく輝集し当様の其他も日本の校をを
祝しさ讃を足て献の如く拜礼せり此業を遊させ玉ひしは北く〈とも〉くとかり技の〈と〉めて福佐
宮見松術なりし云為へ此にてや宮并右花しく同益とし見事ニ云本と云みゆく

桜峠は砂方へ時々下り坂なり 椋橋と云所の先には松本椋橋 湯川など云山里の村より
出たる老若男女あまた群集して道路に跪き畏り或は三積を地に突く様を為ち出
多く中には裸足なるも見へたるが平計りの婦人が浅黄の衣物に市松の帯を前結びにして
髪は四ツ谷と云髷に結ひ鼈甲の櫛の広くて巾六寸斗なるを挿しつ前差の如くなるも同じ
色の長き鼈甲の簪を左右の髷に二本つゝさして日傘を手に持ち立ち居たるは如何にと
尋ね行けば雅なる姿と見られたる骨董集などの古画に出る様子未家之世の女房にもや
行かん程なれ不剣ち彼祖母の祖母が高田の御殿に仕へしたる時男子が偶り与ひ
出て伴も打ち供へく我家の宝とし為に世々の伝へ来りて夫に千載の一時なれイザ今
の情態にて古風を昇さん右様を取り出して新く旅に出る事にやあらん世々の
町所を見て其の枝に体は雅なく小出雲村にて此辺より世ゑの山をも遠くに京近し

大に宿館して人家は稀にして茶店の人々は待つ々て休みゆ十所なりと新井に向ひ行て
高田藩の別荘にて昼食を為したりし左は朝日夏峰の間は名せと依りて九時頃
より日和よく成りたりしに午後は又雨となりて信濃の人々も困しもへり一時ごろ新井
を出立り是が関山と云も所へ立寄り越後に乗行き妙高をもたし上に板橋信が居
ら妙高山を見ゆれ道は稍く出来なりて平坦なる田圃より関川の渡すれ世かね
高田は中之郷へ入る今は仲秋なれども日暮れば雨も降る様を旅で何の所や見え
知ると信に入り月も宿も知れぬと云うせくて旅の物語り此絶えた都の思出かなよ
しと行くぞなぐさみの其たるべし此往来にも幽の儀伏兵を発視の諸士も
酒肴杯を賜りけるを肴にも病にも従者汝も皆一同に酒肴杯を賜りしとも
到して儀伏兵勢が勤労に因りて恩賞に預り思賜ありしと　戊辰の役に戦死

しろ丸の墳墓ハ百斗卅五間乃池半にあり是を花群といひて今人
二手古塚にて偶侍臣として其墳墓を弔ひ給ひしとかや
十一月朔日亭る高田郷在所の発輦行せらる翔の役ハ昨日の如く帰らざ
てありし時ぞありしと十一月ごろより漸く富となり是ハ世俗の人民ハ多く住居なしたり
も群集しる信仰男女ハ都ての雁木の間に集り風俗の源進とちると見え別而て録
奉る雁木とハ都ての店先に凡そ人家の前に枉と云て母屋より庇を葺卸し
簷下の外ハ三尺程板羽目にして下を去間にして是ハ雪年に於ると町と併せ
左右ともに成りぬ切人兼て町との交渉に冊りのを作りある也都て用を達ことを東京
又てちさバ張庭造り使化右造りの乾の国の内に在と同じ体裁の事ならんも然
其の様なる地と此程立ち何かと他所の様ふれ之と同氏の外行事ハ郷しく云

さし学校の生徒ハ陀羅尼所にて寄付所まで多く並列して拍接せり昨日
荒川ハ板橋まで人民とに比べ是ハ稍や停留等しく見止まる六七人ハ
本縣勝なるか旨し是ト併せ此也に達する英のせお四福水停等方にて
浴法伏行り世数ハ今町として新潟縣下にて第三等の繁盛の地となりたり
荒ハ北海に瀕して京都と並しく船舶の出入しけり漢堤の利に挙る也なれバ
遊女もしく為し見えて旅の人ら御供の人とし信濃路の山中りよりとせし絶き
且ツ其物から所ハ方也ア環の港湾て旅の労を慰むべく加えて旅客ら多と
折之せんとて一船来の紀州の名より流を発して荒川の水ハ世界の北の
出る此東ハ海に入り昨日の如く水ぎさ境りてぞ剣井橋を渡りて海辺
の帆影を望み遊ばせ玉ふ又経なく忠井とて一の寺あり人家も十六戸

薪を取るべく此の出雲村などよりハ労して之を担ひ出る人あれバ是を
都なるが多し　其藻をとる漁せる所にて松海ゟ子浴びて少し逆まゝせるハ荒浜
夷浜　両の庭ゆきの浜などハ古来何にても多くハ沙地にて能く稍ゝ能く斉フ
ぞ　山風烈しく以て其外の本ゝハ皆東南の方へ傾きたり是ハ後ニハ浜風の
の風俗従ひ東京（こやこ）を忘れし一枝の者なども古名なりけんハ知るべきなど
此辺りの浜なり　山田助太郎と云ふの家の如く此体なりまた同じく海岸を
少し行きて出来を近よりて漁村舟津古庭　四谷となる辺せまく沼町の
田中浅太郎方にて漁業合を営みたる事ハ一夜泊り宿して上浜より浜
などるもの多く出でたる者ハ此ぞ其ゝり此村の辺なりとて祥りて之系
又腰を掛る石成るハ其を安きなどして異なる目にて傘をさす男と女と

赤脚（スア）をむき出して箕踞（ナゲアシ）し又ハ踏居て心ぞ物しろしあり形よ赤衣を着る
袒裼（カタヌギ）になりて児を乳を哺（ハマ）せるもあり中にハ袴羽織など着たる男も見え紅襟
しる女の紺を縫ひたるなどいかにも狩人ハ之を見てぞしる其ハ送迎嬉遊して
赤裸服なるが多く女などの髪ハ銀杏返しにて信州など又一風（ヒトフウ）ありてこれらの
若者ハもやもやし赤き帯を用ひて獨拌の手襟に袖付し常にしたごとさし頭掛（アタマカケ）
と褌（ヘコ）して着し緋のメリンスを付けたるハ実に田舎の土俗見るべし　総体
又新都なる方にて貧しげなる人民多きハ何ゝ他より来りたることなりん（富田ハ
東ハ皆膏肥の地にて勤倹なる人ぞ　まハ写を殺ぞ見る思ふ気候の気多く
して山民悪弱なるの様なり）　又ハ三津（ミツヤ）をそるゝも其海と相まじへハ米山川
の南北に多くの旅人ハ集り居る所なりかくし落ちたる供ぞ此

なるべけれ又指さしかへりみれバ見わたされぬる車や人力車の多く
引続きて来るを通りゆく人に珍らしき形なるべし此辺よりは学校の
生徒あまた並列して風琴の音につれて一斉に相和せる手拍子耐まじる
押流(?)教会浄瑠璃等に奏せる　昨年大阪興行ハ風琴の発明にて
野川(?)を出でたりしが瓜生たりの道なれバ思ひの外近くて土佐どるよ
高田(?)に寄せる道ありて僧侶上殺(?)僧侶が堀(?)越ゆる春日山ハ既に遠くなりぬ
かくして家族三四人を伴ひて見物に行きたりしが如何にも名勝なりて
庭園の後をみるに建築の広壮を越へて但し若草山の上にありしものにて
ヤソウ
埴輪(?)の如く年古りの石前ハ柳葉の方と見えて前ハ南方が山の麓にそひて抱きいたる
如く其の麓に川流を帯びて庭園ハ美しく其家屋の古代なるものにてありし

十八景
よるる

こゝよりハ見えざりしが山頂に上りし
今よりも年前七年に字ふ柳沢紀念碑(?)建築けられてありしを示す鍛冶の
有名なる一飛(?)ハ見るに出る男女の人物に続きかうぬる多く町の
家作りに於て遠くよりハ見えて数を出して東京近くせまりて一線の道
長く海瀬に沿ひて細流深く東堀を後にし湖畔に数株の柳を植ゑたる
羅漢の一寺と僧侶の住まひて霊場に心を慰めむかなるべし併せて祢宜
寺(?)としたる中山崖(?)際の方向にして北陸(?)に世に儀式(?)の年の山頂にて米山
の山脈を中にありとて葉多なるが文字ハ陀羅尼を掛けたるに古人ハハスサキ(?)と云
かと　すき
　　　ヨコサ
柳に似たる蓋し紫陽花の如く花を似て楊柳(?)の出紫陽(?)と云ひ名たる山の
形をなし世にまのとおいろり　世俗の此の名と俗に米山稲と云う次第に知れり

来山之里とて此辺第一の村にて出迎し農家も多く開け居るが海際
雁沼に臨める難所也、此所は大きなる坂一つ越して海の際に下り出るなり
にて大きからず、後にて道の傍に立り、此家は上輪とて、谷川の海に流るる處
外は漢人の家の如きあり、其の後面の山に羊腸たる急坂あり、是を無割坂と
云、是より御領分にて、当時此に至り、東山を長持ちて登るの人夫多く此に集りて
囲ひ居る。依て無割坂を登り切れば、更に廿ノ余丁許に下りて、其南北の方に来
山の山麓が如く、小高き一嶺有り。是を籏持山と云。昔し上杉謙信の将
某が軍勢を集め、陣を張りて、貝を吹の勝を祈りしと云。又其坂の上に
義家の弓を掛けし力石と云ものを置く。其の茶屋の前の田地に兜清水と
云井有り。昔し源の義家朝臣とか云〇〇の掻きし〇〇は、東北の猛や自殺に命婦
かなる者ども行ても、其を出たるものと云ひ、夫より此の積書は

どの女を見ならぬど）本実積の名をさして云、此辺絶えて此人の服を着しとるも
進み行くに、此処を過て此所の仕様を付けて、男女が見が如きエッちら
越後の来山村に辨らる村ろ佛の衣が濡りづら道より此山の中にてオギヤ
くしとせ過ぎる者を付ける倍をして居る弁慶が此家の清水を汲んでなる
者の者を供し挙げ是と此間也、いつくしく餅を搗きて喰ふことが有と云、今の
住僧ハ夜より居てぎ山から義経主「難割山まで此光の主」なりと云ふ僧が有し
極めて曾の光は生年で八拾年に紀るなし）、云は上輪新田とて廿人家有る村
又此所を越えて、谷川を渡り、山の中腹を上り下りして、海辺まで行に付る処
を墓所と云也、此所より一寸と呼ばれたり、是を廻り二四丁ほどげハ又例
の羊腸たる険しき坂路にて、馬も人も息を喘きて登るなり
切りて廿ノ丁計なる処にて田畑人家もあり、宗山寺前村へ出る。此所より此家ハ

山海に臨とふ滝崖の上に在りて景色もいと面白し言ハく桃ゐ仕を多く
植へさせて従年の御旁こと人を始全島一の奉美新聞たるよ多く此楼と称し
てまたらずとて古年一付にも共家とさせて此道丈に坂を東の方へ下り
降ひて岩門を廻らせまれハ又途但なる坂行りてもたるなもと曲りて
越え降ひて叉に坂く海岸の道をとるにさせもゆく一里とも云ふ変の小坂
一ツ越えかふみまふに下りる所ニ難儀して町ほど過りかる村付り山形の小原
僅し助方所て休所り難所くも二行りて二三町程進ませて戊辰の
昌月ホせる大軍し楽名の待とて始めて戦諍を果たし亦ノ此迫を行し
好て坂を乗りて掛り坡と論して此寺にさ茂りて晴しよきに悩めを
揮へて此海道の処となし言亦く花塚の父亡とも云ひ此戊辰の役の戦争
の哀憐なりし関し立進し戦死し兵の墳墓ハ何所(イヅク)ともなく済ひさせかふ

情ある哉思ひたるん此所ハ西ハ渺々たる山海に臨みて一望万頃波に接るの
外く佐渡の島ハ髣髴として其間に隠見し實に快活なる眺望なるを
所と称く山勝殊あり折柄漁夫の漁へ出しが下なる海に潤ひて天使に
使へなりけるに小鵜こくらげ鮮なるを浜山にて見たり此ハ一入旅心を慰め
まりし故ここに米山三里の間ハ眺見へん多く続いてここは松の翁や
漢(アマ)市の風(コ)などから五六人つつ例の赤脚ともさ並べへならびたり立もどり
へかし有りしが二見橋と云ふ橋ハ深青に鮮黒しき中にも難儀なりせし
南の柏崎ありくてゆくに婦人にて髪形なり衣装に至るまで
京人(ミヤコ)にし初め思ふに若し八何処かの所縁をとて示揚せし人の奥方にしや娘と
見ゆるが二人来り見るに容貌(ミメカタチ)うるはしく優しかりとぞ見へける見と始めて
旅の帰りに柏崎に到る道の驛舞集の中にハ男も女も続くらるに在ん中が多く

十九後
十三

学校の生徒ハ凡そ三千人斗にて柏崎侯の南に並列して龍駕を奉迎して出る
對ニ廿日ハ天寧寺に御滞在あらせらるハ近在村々の諸人民ニ出て万歳一方ならず是より
御しけ午後御府柏崎より御発輦行せられ給ふ某日ハ出雲崎なり
十六日午前七時半柏崎行在所御発輦行せらる時に花火を揚て奉送す其の
其様ハ新潟ニついての繁昌の地なれ共ハ未だ御ハ気を紅絹を張て幕を張
を揭ケ其花火の如し際ハひつ方にも今日の殊ニ女し加あつて御発輦ニ先き
立て出る町々の家々にて家並に大きく高張提灯を掲て
出雲崎人民も是迄の遊覧の一度出る来候の年を待ち得て
商情とおのの賑を隆昌ならぬ如くして有志の者共揃て其列に港を築き
くの事を経験し御出し一ろの儀行りて親しくバ大にも地の風
ひに成るべし所の者則ニ居並びて諸見人にし此等の志をこゆるハ

衣服を更ふて伶俐(リコウ)らしさ静なるが多く妓楼にし大きさなるりこけ
出て御旅の御兵を洪山佐るとし或ハ〇〇の出御ハ近くし家ハ寧ニ
して見えしきり但しこ出に抱りて婦女ハ美なるが多き方と思ひける
投其寝を展心の方ニ出ありて至ハ恩田の者とし四方附くし沙濱之妓楼
と云橋辺こ川ニ学校の生徒が二行或ハ三行ニ並列して風輦を今やく
と待ちおりうる更ニ荒濱に凡五丁町斗の間の沙原ニ宛も山の如く群集
しうる諸見人ハ皆疵を反近在の僧侶男女なく其足らしさ様の男ども
の女こゆまでも衣裳らう鮮かなる近いと好筆を垂して彼ハ豪農の息子
なりんと見ハ其宗寺の娘なりんと思りしに紅顔(ガ)有し下(ゲ)しらハ希り
ぬが多くて深町ニて出てる思石衣や松山ハうる此方の者ニ輌上バ一二輩ッ
進めうる荒濱ハ家数百行程の瀲戸(カウニ)御行(ミテ)り柏崎ニ所し玄君の両て

御休らせらるべき、中にも庭の塵を払ひ幕打ち廻しなど、お設けせり。こゝ
よりまた海に添ひて東北に進む。田畑はなくして此辺は砂原にて、猟人の
集り居るは遥かの里に出づるなるべし。前川とぞ聞く川の辺より見し浦辺に見ゆるが如し
此辺の人は他所に出さりし故か、人に見えて浜辺の者まで甚だ少なかりき
梅屋迄出でるかなるべし、其の間もなく旅籠屋に至り、此所は奥田某とて浦川
大名の旅宿する宿屋にて、之れより海に添ふ小路を辿りて羽田弁天前にて
御小休ありしとて支度せられけるが、大師河原御参詣ありしより大師の出会迄
程なく東へ進みける山の鼻を越えて行く人ある事を知らずして長く辿りて
山の上より海に添ひて行きける方は行きて右地とも云ふ所に至り、此所は御昼飯を召し給ふ
所にて肉を食ふえものを持ちて行くやうにせられ、猟人は鴨のとるを見てまで集め分けや
是より一里程にして出雲屋に至り御昼餉ありけり、此所の名物は旦利

なり。此所は一等の山麓にて海の方に臨む、一番町にして入口に出でしは凡そ一里十八
町ばかりも歩きて此所は丘上にして、小湾を一目に見渡し、佐原の島を顧眄の間に収む
実に絶景の勝地にして、奥に入りて此地の漢名を云ひ、又異人の海上に横たふ艦を遠望して
佩ありて漢句などして小舟を浮べなど、戯れなどして旅の中の心を慰めなどするは殊勝
なる者ならん。 今日は陸軍にて供奉せし歩兵の一隊が陣営を切り出して、儀仗兵が先人
騎馬にて馬を引きて供奉の人々は此中へ進み出て、まつすぐに大隊ぎのことく進みなん
是は見る事でなかりし。風邪のまゝ出雲屋へ向へど途中は猟人の群集しる中に
兵隊の服を着たる者あり、頭は新聞紙の巡査が捕へて、陣に集めよと兵の取り合ひ
村の者にも性平に港軍の艦隊を見て来たる兵の使なりとして、松林より何事
し、やや甚だ長時間を経て帰途に就きたりし
十二日午後七時半より出雲屋を出て新橋へ御帰輦あらせらるゝ、夜大方は途中暗き

爰に右道は近比造りたる由なり海岸の山麓より今日の如く深澤長靴ヲ
淡し半晴に粘気して旅人を悩ましたりしに依て路傍にありける浪打際の道を
なりき砂磯を歩行ことなりしかとも此附近は山田村の里民理左衛門なる者
設けし山崎の間にて此道を開き往来に便せりとぞ古人は此を小止（ヲヤミ）として甚だの
道侍は境小橋と云ふ所あまさへ又境標小屋とて今は大なる檜見人にて
是を茶屋十人程づつ集り居て甚しき人気も共に大なる行人全く金銭を
なべ太和田と云ふ所に戊辰の年此銭場所を設けし御車を御覧ぜさせし事く
士庶ひとつ寺泊より御輦行く小憩所にて昼食をとりまいり土府なりと云ふ
此後此所に七八年も覚えしこれより東に折まで日影と云ふ堀を隔てて
弥彦山の西南の方より東に向ひて長く道続きて海部より半井方より御休所を
行けり此所に新潟知事あり御休所に先年此所に堀割をなし信濃川の

水を寺泊へ切り落して年々の水害を防がんと企て既に半なりしを依て遂に経られ
ざる所にして茶を喜びたりしが此は県令岩村大臣某の挙にて甚しきを奏上げたりとか
風景も美しくて家を並ぶ山にて竹野村の近くに至りて御車を進め玉ふに
行きつつ又ありや集りたる拝観人は雨をも厭はで深澤まで扈従して敬まひけると
極り終を竹の葉を包と男も女も深く心に感じ或は美きは又雪鞋をかけしく道の支
例よ見惚して教皇の間は三蓮の地にまたる種々其間に騎兵は又は礼服にて
容儀正しく天皇の輝を仰ぎしにぞ是より大方地形を以て中島の石にたるの
人々も少なくなりし惜しき事なりし雨天にして女は何も靚粧を凝らしたる姿を見に絶え
無衣雁足の繁華にて蓑毛の美なる結びけるにぞ夫々弥彦山の東北なる葉村の
なる宇都の如く御小休所に於て此間を送り玉ひて是刻より
雨は共に小止（ヲヤミ）してより又も少し晴れて人々も周く会してより十五分許りして

廿一坂とゆふをたどりて此の方よりゆくハ皮侍ハ杉の老木生ひ茂りて小暗き
むら〳〵神さびたる所なり 是より今宵の宿所にかゝる 弥彦の神社ハ
弥彦の神社ハ式内なる名神大社にして万葉集に 伊夜比古(イヤヒコ)のおのれ神
さびて青雲のたなびく日すら小雨(コサメ)そぼふると云詠ありまして今日ハ曇き
の空のたなびく日なりけれバ 風景を眺めハあまりにも ゆく人力車ハ動かで靴ハなど
まろ異物ハ隠(カレ)れて實に周り切りて進バ腰之まゝきかな　吟香
弥彦(イヤヒコ)のおのれ神さびてからうかなぜに又この行幸(イデマシ)に小雨そぼふる
北海濤声秋正清 弥城遠迢百余程 迦頭六識思帰句 今夜 行営黄門明
この詩ハ中秋の夜杉ハ宿に泊りて作られたり

廿一段 十二

十六年秋七月行幸の節御立寄りにて 弥彦神社に御参拝あらせらる 風雅に富ませ給ひ
くにせのみ神殿に 御拝の間 伶人楽を奏して 史官御幣帛を捧げ奉る

御玉串を捧げさせ給ふ其式をべて先に記したる氷川神社の例のごとくなりき幣帛
料金三円神饌料四円をそなふ 此神社ハ国幣中社なり 越後国一ノ宮と称し
祭神ハ天香人の命 信ずる事深くして 今の高柳(カシハテ)のおこり常に祀りつとなし
此神ハ天香語山命(アメノカゴヤマノミコト)にて 上古に出て神武天皇を助奉り天下を平定せしめの功
甚のちに又天皇の勅命を受奉りて越の国に下り 農桑の道を教へ人民に漁猟の利
を教へ国民大に治まりしかバ七世の間ご此地に住居しめ給ひしに 其子孫ハ雁
の連(ムラジ)として 尾張国にあり 此の徳化を後に万葉集の歌にもあるにて 伊夜比古神社ハ延喜神名帳(カミケヒ)
にある神社なりと山の西南の方に古代の神名の住居しあと云 石宮などもある
らし 神殿を拝みて 行在所に帰りしたまて の従ふまゝに 又ハ用
ありにバ 此さ 西ハ余程年て 此神社を御発輦あらせ給ふ 其地社
東の方を御通輦ありて 小泉の方より向ひく長き坂路を下らせ給ふ途の

其例の樹木乃間に緑か伏屋(フセヤ)のあるに木槿(モクゲ)あさかほなと這かゝり
時得顔に咲乱れたるを此程迄ハ[illegible]さきせぬ花[illegible]と云ふ
に平地にて東南の方ハ田畑沃野の里の人ちらし[illegible]蒲原郡に古志(コシ)
郡三島(ミシマ)の諸郡と二十里にも及ぶ[illegible]を眺望して昨日の如く道乃
悪しきハ古今の難儀にて此辺[illegible]ハ此地[illegible]にて[illegible]の[illegible]上面に
東方を数ふる[illegible]の西大に端[illegible](アニ子ヤ)して土ハ牡丹畑の上を[illegible]くかぬくて
かけまくと思しこころ風雅の嵐を[illegible]其の人々[illegible]を粘(子バ)りて
二里で[illegible]かきてあし東西の花しを一方ならずと[illegible]てより[illegible]
さんと知りませハ[illegible]山なと玉浦[illegible]と[illegible]の人[illegible]世(ヨセ)[illegible]
なるまでも粘(子バッチ)土ハ牡丹[illegible]ハ[illegible]粒やさ[illegible]人[illegible]
岩室(イハムロ)[illegible]まで[illegible]白山[illegible]木なと[illegible]村[illegible]の

山脈ハ[illegible]角田山の東南にあたり風雅ハ東北の間に向ひて近
[illegible]村[illegible]ハ[illegible]に出る人[illegible]道の[illegible]の田畑ハ草[illegible]
[illegible]に[illegible]して外に[illegible]学[illegible]の[illegible]外に[illegible]
[illegible]の[illegible]山後[illegible]方[illegible]出[illegible]仁[illegible]村
布[illegible]の[illegible]云辺[illegible]に[illegible]人[illegible]
外にて[illegible]せり[illegible]村女の中[illegible]白くして[illegible]
くしき[illegible]の[illegible]人[illegible]十[illegible]の
中[illegible]方[illegible]て[illegible]の
[illegible]ハ角田の山脈の[illegible]て[illegible]田野の[illegible]
[illegible]田[illegible]山岳[illegible]但し角田乃[illegible]
[illegible]一帯[illegible]山[illegible]て海[illegible]の[illegible]土[illegible]

渉ゝ行りて東小の方へ進ませ給ふ木山新田中山新田なとゝ云邑の傍ハ煙家
なく彼方此方に道ある傍の畑ハ多く甘蔗園なり又右傍の方にて煙草の葉を
作りて乾し陳列るが見え雪をと定めく振ひて思へなりへ
本宿村と云所を行るに鎮守ハ竹の茂さ処なりて此所の此ハ新しく頃来事なりハ
始めて此森より過り遥に見しハ花せしつる丈ハ日野の渡船場方へ行く此体あり
又小針村の渡しを過ぎ方へ行く此体あり此所より進みハ遥セしく此車の跡とし
凍りし所ハ手稲寺社し前方ニ新河岸御要害に有名なる豪商
良き成堤の邑し山形屋等ハ富家と呼ぶ大様何にて今又多ハ出頭
せし遥なり知る説く此地の旅人ハ新河岸の所乃入る事ハ皆我か
丈不入舟運舞の所なるハ遠く見しなく篠屋と東へ出る見え文学様の生き
業のハ一際めぐりて云儀なとも楽しく流儀し調べりと云ふ女かつ絹の安流

当人ハ年信濃川の流れより出る道へ来りて旅ゆく人多く往くハ所々ハ一寺ある
を読みて市津の旅ハ大方かくれ云流来澤山形屋の人家を数百余ハ又毎日に
善事と陳せし据ゑて今日の御筆を論する人を此新河岸に来る且ハ此辺
の寺院ハ渡り新河岸へ入りせしと云ふ其ハ凡そ七十人余りなりしの評判なりハ新河岸
の大旅籠に古今来る客と泊しハ此人多しとなり又此方ハ安からず
と旅人ハ是をとこへ風に涼し

本夜なり

今年十七ハ来る所と云ふ安からく新ての図絵を見るの傍流かなるを選ひ給ひ
又集りたる人民の往くハ此辺の[illegible]に流れて所ハ群集して待ちたる
よりにて遠く土蔵并に屋敷の所へ行くせしを並木町ト位置所として御筆を進ぜ
ありて新河岸の舩に居て行せし多き足りて使船を発せしは是より目屋の出
あらせしは進む紫舟乗して船路をなす紫流の表を奏上り舟にて庭田

諸学校を巡覧ありせられ府県庁を御行在所とせられ女紅場にて叡覧ありせ
らるべき地なりしが叡覧ありせられ病院にては岩倉右大臣を御代理として
患者を遣り見られ医学校へ入らせられては教師より授業を上覧にて生徒
より人身の理并に病因等の講義を聞召され解剖諸器械を
器の製を[illegible]天覧に供し奉る又新潟学校新潟
裁判所師範学校をも順次に叡覧ありせられ行在所に還幸ありたり

大辰十六

新潟御滞輦中見聞雑録

山形県令三島通庸氏は一昨日より大雨[illegible]新潟へ出張せられ通行筆
[illegible]山形県へ[illegible]一昨年と奥羽御巡幸と
御出之[illegible]羽前[illegible]の地をも踏せられし世人の[illegible]鳳輦を促し
玉へと人民に伏しつゝ希望せられけれども行かれしも[illegible]にて其御布令も

乃は新たなる地なりし今修は未だ人民の心を慰め[illegible]として一年[illegible]
西郷従道を北越戦争に派遣し又佐渡の金山なる順徳天皇の茶毘
所の跡を弔らはせ玉ひしが爲に[illegible]侍従を遣はし其の跡を[illegible]
ありしなり○新潟の繁栄は新発田の[illegible]成[illegible]漸く
[illegible]の出来より[illegible]の新築なるが東京[illegible]にて[illegible]
[illegible]なれば[illegible]年[illegible]
[illegible]岩倉右大臣の[illegible]荒川大二の
[illegible]新潟は[illegible]富裕なる人民
多く[illegible]の地にして運送の[illegible]の[illegible]大二
[illegible]東京へ[illegible]船川新潟[illegible]木下の[illegible]
[illegible]高千穂丸と[illegible]伏木新潟[illegible]東京[illegible]

極めて運び候へども其に近き百花を付百余の外を八十家とかけるつとに成し候が
大なる便利なりしものまくて当所まだ新潟竜信前を完業となりぬる商人
の為めには益て便利なるところの風俗〇越後の山より入りて来りし米は人民の
新に用ゐ提灯に一ツと日の丸を付けたるもの多し一般に皆赤き桜の花を
画きたり是は越後の国の紋なりと人民に問ひしに是はイヤ是は天朝様の
紋だなどけエ外の方には絶えてなし成らんども其外の御社の祭りにやアヘエ
是の立邑の紋を付けるだア隣村の諏訪大明神の祭礼には鹿の角の抱
若葉の紋を付るでござりますと赤の桜は大網様の御紋よりの外に燈して
は成りましねエとの咄なり〇新潟は繁華にて芸子と娼妓とは名を
とれたつき其女く味しく善く座にて安さが如くしが游冶輩に取りて
僕に一日の間に座敷へは一度の間に上げられ芸人は一ツの舞を見ての勘定なり

一種の先生には成りたる所は滑と是を商人の接待を盤かざる故に所を見るを
商人へかけは難題に難き当今なく游駐輦中は時に来申の市をと云
てまた是止めまでにて所るべき供奉諸侯方の小宿くなく繁華で蕾面を
らひてこれは平日に百倍なる故に従つて世話役は大方りくとして必ず御門を
難ぎの御泊宿は宿をあらくてさってなく仮令ど菓物などは古いのもあろうで
且つ売るくとし又商人が困らしし是は二て百の間なれば決して損ものと言べれた
八百石の市などはなく御駐輦中は市街を游りては名札ならべき事なる
屋も但し芸娼妓は甚だ限になるが〇新潟は文雅の士で多く遊で裏店
の小民とも書画を好む風俗なるは二日間の游冶輩にもって詩歌を
名高くる大仰に揮毫を乞んとし新潟の唐紙画箋光卿経冊数多の
數は出来く墨黙なりし故に〇世話役より其は議異をいたしく庭は安

冷泉は時従なりしは御供の間にと渡冷泉なとしるしおや下例して関と
申されしへて其に坂峯の坂路なとまて岩間の清水なと飲こそ宜し
かるべしとの帰れり又東京に附けて来りし人力車夫は大に歸りける
京迄行り○明治写真館後に佐渡へ渡りしてハ前に立つ近藤
芳樹先生の送別の歌を詠まれけり
行へをまる残さで一見えれ路なき流れ絶たゞ見て
そこで又吟者を下りなり出けり
大きみの命かしこみ来しと立ど行りヨうこ何佐渡へ行く君
○去ん吉日の夜漁夫の浪如く文雄田舞妻を行去出く左き迄今日は
豆の間陰を在して迄方寺泊の行去所は菊屋と云家に泊き旅の
四郎なりが其家の庭に用て着し順徳院天皇此島に流の跡へ今は

御仮屋を構失しく迄と形計りの遺りとをせし所なりて哀し
当時の事なと思ひ泣けりしへ御膝し去限りなく哀にまさ
海は見ひとくるびと立並へりて彼の佐渡が島迄をも眺りて草無して作
出る路なりで海岸に見りて宮なてる相とく寺泊り静さりてこらし似て
写り来りて来りしこ其て聞くる○新潟を始め其外神社に美目
よき女ハ多き迄舞でも出古帰りまさなり方なく都ひてる婦人のさま
此も又去にけかりて高等なり氣ハ出りハ又出中にて家の方ハ
廿くハ何ぞや京都の如く何く是なく不くなりなど或る此方なく
多くの出物作りありしとう」 初是 明十八年新潟に於て鉄伴の版本を出
今ハ 京より来り下り眼病への多さを飲み伴りて特首を此中の係合
の新潟病院へ下傷せる所の病院を建造せるが如く 是は伊東

傳說にて宗閑寺といふより傳説ぐたの原因を奏上せしものと称せらる
第一古地図第二御地にして目黒の反射炉とも風神寒の侵入第三雷
中目黒反射炉第四番荒畑とも良寛円不成第五眼病待集堂と有名寺の
霧ならん又三島（山形）郡今の龍村に関係ある佐渡木一ノ寺侍仲西四辻傳説を
古都縁也へ巡礼して戒名けるまで佐渡へは　北陸第一の古跡を詣で
として田中藤侍従と申人に逢ひしと承る

文四年
十九日

九月十九日午前七時二十分新潟の旅社よりは信濃川の河岸より出帆せ
らる丈は船よりうち乞ふて能生のかに移らせたまへは佐渡の地方にと始めて望む
の景色なりし御陵説御遺跡にて回く涛ちかき両津の見物さる事なし
あまくに櫂（カイ）をとりて揚げてヤサホーエイヤと声立てながら潜出でてまたより
大川にて旦那衆の画にもあ漕ぎ遂げし御船に乗りて沢崎の浜につきて

着くすると文士などの東京よりて招くにも依りて見にける馬車にも乗りて沢根
八幡の御寺を拝みあらせられし沢崎の石動町と申す処にお通り申しつつ進せ給ふ
先の人民と諸方より集り来て群集なりしに御通輦を拝し奉りし学校の
生徒も多く出でて迎へせられ駅を出で給へば東南の方に金北山を遠く奥羽の彼方
方まで山にて最も高く八百米にしゆきさ積り　麓より八幡のここら一面東の方は
稲田方頃にて一望限りなく外の村落も田疇の風に翻へりとりんぼおお
のづから京観（ミヤコ）がこのと近きさま絶えず京より九時半頃海老が瀬と云
村を過ぎて佐和田にて更に田畑の佳なりし拝見へども多く押し合ふ
計りの群集とぞ見ゆる夜小学校生徒数多並居たりが御通して御りゆえ
機なりが多く小木村と云るやすく先へ長持を棹并りかつぎ連れて
行くを踊りもちて来りし人力車が人車にかけく廾くたり寄（ヨ）りて

呉を煎むよたりへアイタイたりひたアリと云ひしを道の友僧よ云ば
日相見人も八下アかしくや軍書之へらん一度よすツトし田畑の畔くく
岳をめくりて足を労し武蔵の峰の昔大名どもの通路も先陣ひ
の名残りよ杉をもちて東よ居るくしてむびつく人を割る歟剣の風にも
深く思ひ深く出る外より新くも紀く大徳代々と言卑屈ん
のふと芽し出でゝ花あるべしさして登る程に高くして只をかし
かりし或人の申さき是も加賀の川の幅百四十七間ありしとぞ岩代の田舎
隅田の南は江方を流し荒川と落く流れ出る大川なくも急流之
是は八九寸も渡の川舟を列ねて其上に舟橋を造りて渡る其舟橋
を八河崎の御本まで渡しせる其舟橋の中より見渡せば松へ嶋八小の方
の山高き岳ありて遠んと仙境のごとくなり寒き嵐なき八相見人共
其舟橋の上にて見る渡の山水を渡して御通輦を拝み奉りし川の東八新宿村
山也十町ばかり逃れて左近辺の御本陣に入給て御昼食を召しまふ其宿八寮舎
葡萄の様く出て東の田の中なる八村の北宿有りし也是より又御本陣まで
十二町ばかり至り笠柳村を過ぎさせ給ふ北の方にさき十間をへ行きし
鴻巣熊谷を通り宿よくして東より又新町と行くに近き中山道
むかふは浅間山二王子の山など云ふ山々しく有りし御本陣を通り奉るぐるにかしくして
行く人見へ渡りて南へ東の宿に通りて其の方の北の端の辺は方八川と云方八
当帰らく相見人の出る地なりしは田の中の桃畑を隠し入りて其上に
村人多く出でる男女老若多く御通輦を拝し奉りて更に藤岡村
越村などを過ぎて午後二時ばかり新町へ入らせ給ふ其夜の御宿は諏訪
に近へ至りて並列式を行ひ御宿の様子をして新館の文に其宿へ

せられ給ふ御休息ありて営門外まで御巡覧ありて後て御鉄炮武器人
銀器を叡覧ありせらるゝ手て後府役御菓子拝せずして供奉の人々有り自脇
成賢の本城へ　今日の御道筋は見つらさし候は海道の新村の邑
より因幡見えての間は茅の此由を前として表がれて此邑より男が
機の上棚をさり立て人々持ち去所並つく間をおきて道の左側にて立
居たる是も巡査の数寄や因幡見えず先は其奥にて人々を作る木村三越村の
邑の下井藤田村は道の北側に羽織着たる男が合市の小旗を小刀の穴
甲の何處を挿し南側から八乙の表を挿して手を持て見し十間計づゝ
隔てゝ山陰を庇ひて立ち居たり或人が寒さに思ひまく其旗は何の用でと
尋ねしに東関に出ると云其男の人々若宮の事やと云へ知らだと云ふ
其間に其旗持てる男が一所に集りありて私せん其内途中に出でにけり

廿五日
晴

其旗は新天子様の御旗也と仰てはやらん抔云ひて立去りけるとぞ
九月廿日今朝宿を発す昨日より大雨降り御発輦あらせらるゝ東宗法花を営
兵隊伍を調へて次に松の並木の外を送り奉る岸公卿と云処より鳳輦
を南の方へ進め参らする此の所より世の見物人は宝庭のやうにて群り
て旅よりも田畑にて充満して実に立錐の地もなき程大丈夫の群集へ
直ちに東の方に向て進まれて東は五頭山又は出湯山及び東山を右
にして平野に直りて高山の麓に法海村と云邑は北の方は小松など
生ひ茂りて山ありて常に此の如く東にかけて其山及東山の麓までの
眺望は殊に前程の間にて人家は佛林の間に数ありて外は田畑にて
水清く山影の外の風景は恰も南山の景として出る処の景色に似たる
世の見物人が集りて見物人も甚多し九州から□川村の出家

徳島方ゟに出張行りし来る折柄村女木村中山村などを過ぎさせ玉ふ
〻は拝見人ども甚だ多く学校生徒も列をなし並列して拝礼せり西の方なる
小山は無数近くに見え只東の方に高山あるのみ右方は松原海浜の景色
なり上一分村の辺りに至りては早稲を刈りて稲城（イナギ）に掛けたるも見えて田家の様
を空めし面白く御覧ありさせ玉ひしならんと思ひまつるしかして更に
堤村などいう山かけの村々を経て笹見村より入らせ玉ふ此処は山膚と云
処を流るる所なく緩ひ入る一小坂を十有余山膚学校より巡幸行在所へ
ゆきにくく川さかきとう上山道などいふ道をばいと御難儀せさせ玉ふ東水村
次瀬村などいう村の田の此道を左右に分けて並ぶに御覧ありて此の後の石頭山
の正面にて車を止めて陛下にご休み拝見人は深くして人数の幾何を知らず十二時
少し前に御着輦ありて御休憩所伊集院方に御着遊ばせ給ひて御昼餉は此処にて遊ばし

大きくして美しく豪商と見ゆる家々多く沿道に出迎へ人もあり学校生徒
なども列をなし並ぶに女生徒も交りしが衣服も髪かたちも奇麗なる事
此辺見ざる数ならば此処を一時半頃に立たせ出させ行りて中島百済宮の村
を過ぎさせ玉ひて浜表角田の山を越えて中面の方に寺町そこの奥村の石井
浦方面より浜出張行り御案内して見物人は遠方よりもなく立ち並ぶが
余は又ハ沸川ある此辺村に出でさせ見ゆる去行りて様子なるが如しさながら
此村の東の方に近く小山の様なるありて見ゆるは又坂の辺りの山やとも見え
眺めやりし所ありて出立行りて保田と云村を過ぎさせ玉ひて行須の川にある
玉ふ船にて渡して船橋なる木は川端に近く山野立行り先を中板辺りに渡らせ玉ふ船
橋は長さ百間ばかり船の数は大小の船なりとも渡り兼ねさせ玉ひて又風雨強く
寄り移らせ行に船間の中なる堤の下に行くさに出でさせ玉ふ拝見人は実に数しき

車のみ幾万人なるを知らねど人物も美にして遊びに出る子女なんども見ゆるを
廿分ばかり走りて金丸村と云ふに出れば田や畑の間に学校も在りて諸人の小屋なれ
ぬく霞に似たり秋の処にて見渡せば少しの坂を越して田無村と云ふ所
臭水池の出る処なり道は室町と論する小山の間なれど信者の多くし
立ち寄りてこそ人の見よ夫より飯柳新田を過ぎて柄目木と云村の奈良丈七と
云ふ者の園の裏の畑に一大きな煤気の吹出る有りて夫れに火を點じて
有りしを御道輦が此に御覧じてあまりを見しところ手代府所金子佐村田
を過ぎ越えて新潟町に御発輦ありせしに御在所は桂新岡家
十七段 かう
千米七時半新潟を御発輦あらせられ千米の間に家を過ぎて田家村
猿ヶ島中村木島村など云ふ所は東に西に接きたる一帯の山脈の猿ケ谷く
道も平坦なれども十里も行く間にまた峰坂も小坂行り且に雄なる景色の色を

見ゆる所に馬を車に引き従へて見る人々なんぞ出る村々の信
徒男女は例の如く家々の軒下や田畑の畦道に集まりて大御通輦を拝し
奉る朝日村と云ふを過ぎて對村の東北山に石油池の出る処あり又其
隣村の塩谷村と近辺続く湧出る処の出る古津村と云ふは其の
見ゆる所は見え絶えし人家も寛かに流渠院舎など有りて梢より茅屋
の半ば許り見ゆるに何の花やあらん赤く白く咲き揃ひて標なる
放翁が田園雑興などの心地して満目ところどころ気楽曳し新る処
山や何をいふなく廻りに出る松と雲との青み行くに東に山乃披露すれど
西は蒲原郡の平遠無辺を一望に見渡すなど一路の海辺のと西丈に
流るるしてまた保田周辺する弥彦山は何地くいよいよ就いて見えにし
道傍に面白き松ある所にて廿歳ばかりと云村翁と聞きて二十歳許りの男が

と古だみたる声にてがワくとよぶ猫をさして此名やつくべき
と思ひし文弥の男に語りしは是も亦がワくと云物を怪しかる此名なる
と思ふ形物しるべからしき男の隠れたる事をもちたる事にて近ふ世
村は何村ぞと問へば蒲が沢と云へり爰を去る事西に矢代田村の南にあり
丹呂方にて沸水体有り 其所に臨んで見る人は多く醉楽し 丈余も皆く見る年
湧しを天が沢と云所より南東の方に出て山の麓をめぐる坂を登り
其所に至る処此の方に進む処に神明の社あり 其前に池有 二十間程 見る 昨日
見えし沸坪のごとく同じ様に底より湧く見え 沸き 昨日のは
沸き立つものは尾頭ありのごとく たくたくと吹き出る 此水は出ざるなり
見えて何か気にて水の流れ速く処は見へたりしが此池の水を清濁なく
底より沸騰り尾頭無き泡をも出し水は常に池と共に出門より流れ出て流るゝ

語ることなりしとぞ 是も慶長十五年が廃せしよりと云伝へ
たる坂を登りて右の方に曲り大楢坂と云ふ 是を登りて右に向くれば
ある処を道金新田と云 又ある処には田中村の内にて正明寺坂と云長さ
坂有り是を登りて坂の上は平坦なる処にて旅人数多集まる茶屋もあり
護摩堂山と云あり古城跡なり池坂を登る下には延福寺と云寺有
寺の前に石地蔵有て此池しるしなる所にて盛んなる地にて見ゆる
坂を下り切れば町つくりて人家多く茶屋も有り 夜の谷川を渡り
て又一つの坂を登る処にて沸水体有り(是は田中村の者次兵衛が宅
にて其をとさる事にて親鸞上人の繋榧と云物ありとて人々見に行く)
十時頃出立して行く程に其坂を越えて行く羽生田村と云ふも京坂
あり川に沿ひ村坂田村などと云処には彩色絵の人々有りし 丈余田間の道に

東幸より還幸ましましにし御紋門を渡らせ玉ふ折柄橋の上より叡覧有り
せらるゝに水清く洲崎より出して自から尽くす東京のおもかげ有りて河原に
並ふ多く晒したる布の絹に似つかはしや思ひ出させ玉ひけん十二日には
加茂川に光臨せさせ玉ひて市川倉澄方にて御昼食を召させらるゝ折柄染物師
孫兵衛に職人八時の間に多く営業の法を始め御物の浄衣かりさぬの袖を加へさ
今世僧侶は般若法衣を身に纏ひ並び参らせ並ひく御通輦を
奉る一時頃御立輿にて下鴨村を過させ玉ふ折しも供奉の儀衛兵
の内に山縣の御弟より三百余名にて戊辰の役に出兵せしが、そて衛兵を
棲戯し方附の東坊を弾ちて進より中に立ちまし丈ヶ保内村の府義走一
くらみく路に体行ひ府中に参りくれ従を東山の方に遊ばせ玉ふに
御供のあらせられて小北辺てさる是の学校の生徒を見てそ三三武

て自私をらかむ名へ寄る也き西大原村の西村清三郎方にて小
休ひ府出し前に世界を出し出す人が御車を進し進め御歌を存ぜ玉ふに飛
の祥殿人にて丈ヶ杯風の堤を再近に近せさせ玉ふに抱きえへ八坂堤の東方
に蝶附して稲荷より丈ヶ園尾村一の本かど云所にて御昼を召させ玉ひ
て府出をまし六條の旅に入らせ玉ふ八世驛の縁の際に宮に文覧ありて
無き難皆にく巡査が棒を打ち振りて制しつゝ漸く御車を通し奉ん
頃の人形を随に世界の御影は月に到りかりに今月は可の悲さにて
聖上にて御車の内にく従えるも御高覧を採らせ玉ひしよし　供奉此
人々を始め馬も車山をかりく嘆き付けるに底もく流れらで微や
東京をかたえて成りてよく世々く今日を第一の悲さとらくなど云人も
ありしとらしと旅の行当祢八東本願寺の別院なり

本二百年余七村ニ瘡と申病流行して此村の海辺集りし疫風の所に埋せ
東へ附せしに由断と云処ハ戊辰の年の戦争有りし地なり此を誹しる
之札あるを風雅中より小袋せしる諏訪と云処より西南に折出て
月見と云事を思ひさせれ家も農家のさ[illegible]のつゝく口ふくて住居
さりし見ゆなり東の山陰に妙法寺と云村有り小なれともさの坂のゆれ
今より三郎と云農家の脇なる田の畦に塩泉有り丈は二三間斗りの
坂を上りて西南の方に行く処の高橋寺と云者の家の前に火井
有り是ハ天然の瓦斯にて道傍に彩なる仮屋をこしらへ其処に其瓦斯を
引き青竹の筒のごとく火を點して其をもて細工などをして人々に見せ
又其外にも金子安三郎と云者の家の前に大きなる仮屋を
作りて御小休の処と為し其家に瓦斯を設けて吹き出るを見るに

火を點じ或ハ中にて種々の道具を作りて花尾新の如く火を點じて
天狗に似たり其所を見ればた大晦に儀ふるが如く別に高橋方の[illegible]は佐
奉の方に見せた[illegible]ね見んと出て人々に見せんとて新しく掛へ[illegible]の
らし泣くの様にて感心なり文化細竹の道を未申の方に附むかひて
ねえ人ハ甚だ小高く出て見え此処の畑の中に見て多くの立[illegible]居
さりし吉田村を過ぎ長岸村に至る途に妙法寺に行り此寺は弟子[illegible]
長嶺のあやしく様にて人よ[illegible]をすゝめる霊像の佗し丈は南の方に
出る石ハ吉野屋と云村に行きて不動明王とて行り此ハ東の山際にて
小坂を下り矢田山峠と過ぎてさかしく十日市大面の長命寺にて御小休より
十日市村にて高安寺村小瀧村をも過ぎ小栗山村に至り此ハ南に坂
なり此辺にも見えて多く群集せり其処ハ明治元年五月に戦争と

結城公の地にして其時の概略を記したるなり 賀来に御軍の
由より北荘の険道を厳防ありて通せし其時の事など聞しと見へたりとし
其軍の時に北村にて夜く無火に罹り 早にて六郎も焼けたるが今は漸く
元の様になりたりとぞ 北荘にて東の山際に在る処之土井(付)利氏旧跡の
営様にて御旅宿なりと見えてる北荘は初見人は村を知らず 土井利氏
御三ふなく 渡り町 なさの町 勢田 新町(アラ) 清水なとと云 村々を過ぎ
御車を通し申すに 漸く東の山際を離れ 平坦なる田間に出るに 鹿(カタ)
百足(ヒヤクリウ) 福井 左新町に御通輦ありて 簡陽氏 安家 妹尾 方にて御休なり
北荘にして戊辰の年に会戦のありし地なれば 古地の然を以て 其時の
有様を説き申せしとぞ 今日は熱き日なれども 涼白ありて
昨日より少しは涼しく 丈下にて下條 東山に回り

又福田村の堤を東に進ませ玉ふに 西方に一帯の山ありて見ゆる是は此方の
輦路は山を北方へ行く 左は長尾の御足輦ありせらるるに
東本願寺別院を行在所と為し玉ふ 此寺に入り玉ひて市中の繁昌は実に北荘
始まりて来たらざる所なり

本九渡
ホテ

本日午前六時 長岡を御発輦ありせらる 北荘の行在所に着輿の途中
並びに古物を陳列して天覧に供へたるものを取りて御覧の後にて放し
一覧を遂げたり 行在所は元長邸宅様にて 其庭の庭前に高塊を作り
山を作りたり 其高さ丈余に見え人に 大海石の如く安置して宮を穿
ちたる見事巧なり 丈下一面に 日本第一室は有名なる越後縮 紬(ツムギ)
を始めとして 石臘池などの名義 其外蚕糸 蚕繭 五穀
いろいろの農具 漁具 又は宮中に用ゐる器械等をも並べて並べたるなり

他縣ニ勝ることなくして凡て六百円程の品を昨夜出すまでに有りしと
第一の丹二室は書画古玩の類にて和漢古今ともに大名名家の筆跡墨妙
数十幅を並列し又文房の諸具を飾りて名筆名硯の佳なるを並べたり
第三室には古物奇品を多く出せり其中にて面白きは楠正成の常
安寺に出品せる上杉謙信が自画像にて謙信の姿は弘法大師の像の如く
僧法衣に金襴七條の袈裟を掛て椅子に腰し前に机を置て三鈷
並に香炉香合花瓶燭台等を並べたり其下に近臣式人を下に
置て相向ひ座し一人は右の手に瓶子を持ち左に酒盃を捧げ持てり
一人は刀を持て畏り居る様なり其画法は巧なれども能く仏画の筆
意ありて頗る模様なきにあらず其邑の城主藤原の先祖が徳川家
より拝領したる虎の皮にて見事なれどもデカンタツ隣の者に珍しき物なし

垣衣の長田寺に出品せる西洋古代の椅子は甚だ奇物なり何時のころ
渡りし物にや其製式精妙なるを見るも僅か六七百年前の物と思はる
英国の欽中山の隠に庵を設けたる建武の大目茶碗も亦殊勝之古画
の庭野徳松が古縁起と根津右衛門が天衣名代烏帽子等も皆珍しき
にて形も面白き能装の外には三右衛門の方に遊ばせまほしき他なれど
残り多くも暇を告げて車を急がせ跡を追ひけれども道は過
村々に集りし見物人は長岡の街の衛に充満して行違ひ難き迄
巡査の警棒にて道を開かれて其中を押し分けて車は通行甚だ難く
漸く八時頃に至て信濃川の畔に出で長生橋を渡り先づ道を本の
方に取り大島村より石内に至りて蔵王村寶地村上除村と急ぐまゝに
見物人は路の数々に出たり多く出てし人々道の両方の田畑は草も

手房を至て高麦もさんげくに踏に蹄(ニテ)ける跡あり又而くに何様せ流年返
許とら来様せ流ね叙嬉とら沱しける立札のとゑく御預ける撥卅上陰村
よりハ山道小く上りて此坂多く実原町白鳥新町なとハ人家も様比し
これより坂の途中にて平坦なるに至れ(ず)と立る山驛に御昼食をとる
よりて漸く卅次山て御車を返し付きに其よりて来るか御待ち遊ハ其りて
西南の方に望めハ遥ハ山間に窪(ウチ)曲(クチ)りてれくに田細なり人家あり
多くして山を切りわけ新道を造り出しける処の多さなり卅丘の風雄
を通りて峯くんと人民の費わしるの甲斐なる今日(ケフ)とりしとて立るへ入れ
十所手段の相生橋と号ける新らさ小橋を渡りて田代村の坂此之
なる鬼山無用渋滞方小く此山体より漸く小りて此道に丈なる坂をわりて谷
川の橋を渡り五十鈴村の坂を上りて又向ふへ下りて去るる處ハ刈羽郡の

小栗須村と今りハ胡ちはきりなるが十日町に停泊せる又往ちハ時の
外の大勢となり将は卅道ハ山深く岩高くして白雲ハ絲を検ひ
家と見ては玄此る人々の例に入りて立花を卅村の為にちまりとて七
八所計峯り高坂行り卅長道を出てして新道なれハ人を不法寺村と云へ
おくるを卅越えなりあり山頂を除して風雄を通して峯るとなく
しくあよし）卅比の為天險に臨み物やし馬の足かし車も蔦にも粘(ネバ)り
付さ上近の九さん囚難之なれバとて手坂一時ごろ卅坂の下なる野中
ふく御車を止め玉ひ御板輿に召し替へ玉ふ供奉の御方しおりたちて
卅坂を越へらせ玉ふ所ハ谷く険しく坂ハ急く流ハ深し卅義の御従業
兎角に程ひ勝なれと今日程の困苦ハかるさき程切りて西に又
西の方首新と云ふよりると十陰町之卅坂の此れ石脇池を塘通りて

三十枚なり

高さ尾根を境ひする池井の数凡五年許りと見えたり何と云ふぞと
里人に問ふに赤田村くと云ふ是は所謂三年の後に鳥羽の兵を出して終とし
たる池なりとて夢寶物をとりしは今も昔が如くなれども兼ねて能く知りつ
たる事なり府江南稲村の某並玄蕃方にて山崎休息して御車を
又云今村の龍田健次方にて山休行りなどを相かへて山もある山崎村を
過ぎ途中より吉田橋を渡せる所は家もある風共に吹出でたり
此村を過ぎて柏原驛にて昼餐行ひ須賀の所は此の辺なり
二十四日午前柏原驛出立敦賀野にて休憩し進軍を命ぜし
出しなりて此日御返事の礼を持ち慶應戊辰の役にも出て北越に星野某と
云者ありて勤王の志厚く大総督仁和寺の宮高田へ御駐営の砌り兵糧
方掛の事に身命を拗て盡力しける事を思ひ出されし時なりの御役職せん

金十円を賜はりし岩倉右大臣より仰下されけるは此度進軍に際して御備作して
深く君恩の難有さを相謝し且は父兄代々深きを感じ能々に感涙に
咽び居りしが今般は御発輦行はせられ在御守女の御所遣に富蔵
の外にて拝謁して作井と申す者は進み出るの御所に返されけり此進軍に
志すことし故に承の兵糧料として御渡しの金十七両を賜
りし之を恥しめ柏原は元と東京府の所轄にて嘉永は鎮軍の相談
なりしは藤井某之が兵を立しけるは深く感激ありて命を受けて御役を
承りし人相助として此度御発輦あらせられ見送人は先遣し進み此役を御通輦此
増より是れしく見えたり此街道行路は甚だ遠く此朱山城の難道なれども
最早天皇の御休息所は宮に入らせられしと申しし此の所の兵乃出しつ
高拝著行ひ其後の居下の御輦の数々の晴れ行ひして南に至り見出でて在

の方に指出したる蹟ともに及べて松浦の海岸を抱きたるが如き形状
なり其湾内ハ干潮の時にも深さ一丈も有る人の膝にも及ぶ大石を夜海中に
多く有るべし幸に此浦を碇泊場として碼頭を築かば松浦ハ新湊と為らぬ
事もなし此所に釣舟商の漁船の出入を盛にして文政頃
の物産を輸入して人民の便利を為さば此地方の繁昌を増ゆべしとの見込ハ
百年前に鳴りしけれども今此辺を伝へて前に有益の功業ハ悉く此説
紀ありしがいまだ其実地に有志者が前後に新湊築港へ新た出でたち
しけれども今此説をして話さしたりしが今日迄にかけて大略なき儀ハ此浦の
儀ども此波を埠頭と築かんとする情態の為に此地に出でたる丈け
直に大なる懸崖を踏みつけて東松浦の沿岸に出で今日も存せる此窟
手をなし浜の端を通じて嬉野などをも有して窟状の此山体に風景に富みたる

まで云ひたりとぞ今日は年松浦に於て松浦の海岸に出でて紀要前には浮橋等を
有する海岸に於て松浦の紀要として浜浦の海岸に出て漁業を行なせしかれ東海浜ハ三ツ屋浜と
西に浜を経て此所より浮嶋を見るに似けざりや此港を望み見て浮嶋の
家もなかりしが之ハ行くと云う所なりし里人の浜に注ぎたる男が去小
跡をして越の有明此浜より見ると云ふ今日は朝から岩を以て行に居り
是より東に行くと山の麓を見ハ安かりしとぞ浜の方を見て行かば塩浜今とどと
なり漁師の家あまた潤ひを極めたる丈にも上有浜は雁子浜九戸浜と
云ふを其方と深町の潟の山体に丈に又四ツ屋浜と鳥居浜は上小松浦下
小松浦深掘などと云浜名も西の方には多く其馬の方ハ茶屋海浜と
として佐渡の島影見えて山並有りて見えくる此浦の荒磯をも打つ数の
高く岸の方ハ一帯の丘陵に続きたる松と並ぶ東の方に伸び跡

さらハ嵐の烈しきを知るへし 新堀川の橋を渡りて御車の方行(ギヤウ)の浜
両が淀夷浜松ヶ浜荒浜の名有 是ハ海浜にある故 水ハ古賀し
回りし海風をも掃ひあそひて見けるて茅の中に続く前ら田畑の作物も痩し
又伊勢の方より野洲を経く新川并に関川の橋を渡りせもへハ剣道深
やく荒蕪の高田の城下方直江の津を見て是ハ佐渡へ渡る
往来行し寛永の年頃一時直江津と唱へ行し是より又海岸に添ふ
険しき山坂にて夏天なりとも少年ハもつらしき迄なり夏也
並て渡りまする此ハ坂路にて西南の方へ出る十町余りにて五智
と云大きなる寺有り林の中に古寺の跡見へたり九輪のあるハ五重
塔の積と芳く林と云小さやかなる堂ハ安国山と云額を掲けり
里人に問ふに聖徳太子の作りて像て大きなる立像にして仏て見ゆる

今ハ此村にも寺として五智と云如来を建てて元ハ国分寺なりし
なるへし 今ハ国分寺ハ名のみ残り今も昔奈良の朝に勅使
天平勝宝の頃諸国に東大寺と此建立ありて又諸国へ国分寺を置せ
給ひ何れも寺号を金光明護国寺と号せしむ仏法盛隆の
基ひを定め給ひしハ載て典籍にあり其後足利尊氏が安国寺を建
立し従来の国分寺を安国寺として有るもあり今此寺の名
を安国寺村と云ひ天平年中の建立と云ふに近く其境内に安国山
と云し額有り其寺の見えたり然るに今ハ五智とのみ呼ひ是等ハ何のなる
五智如来の立像何れの年なるか知かた是より居多(コタ)と云社を経て
名越坂先せなし上り坂を六町斗り過きて海岸に有り
差せ鬼伏郷(コヽ)の長浜と云名前有間川

浜風しきに顔を吹う時ならぬ事と此ハ中〻往くべき迄も欲し思ふ
出立けるに又〻又坂を登り坂越して有馬門と云山路に出り如是より
五丁ハ平坦なり往く所ハ荒海にて東南ハ連山起伏して淋しき
山道を丹第(クニハラ)川を渡りて庭坂と云う後坂行り坂の上ハ猶ぐ景を池
人家あちこちに行り其所を小様と称すなり右の方ハ吉浦と云其須く
青木坂とぞ長く甚く険しき坂行り前付る此坂の上の青木浦と云
箱の前の如く此体行り岩石地体ハ恐しからぬ様よりハ第一の依地
を飴成しより此て又坂を越の方よりし越ければ萬石が原と
云ゆ又露坂とぞ此轟坂と云ふぞ坂の脇に剣(ラガガタケ)嶽の北にて行り名所
にハ加奥如是知命して青く往き去人ハ第一が所代不動様とて名瀧を
背負きりし其の下り坂を毒清にと云ふ又其後よき名ぞ急なる坂行り

上より流出る谷門とハ道の下なる岩を切り通したるが下北方にて
瀑布と成りき連流滑き事ハ漸く其頭の形と共しるるのを又去より
一ツの急坂を登り出ハ滝頂お共しの原行り此海原と云所のり前より西方を
又見るに西北の東道漸く行る吉海原にて多色で一路の浜辺米山花
山脈ハ奥羽越に連なり海湾を隔てく遠く東北に深淵あり此南の一方
ハ樹木蒼くとして田畑其間に散布されるを見る坂を西南に下るハ六千
余りして海辺に出る浜辺伝を西南の方に進めハおよその方ハ断崖千尺
如く削り立ち如き懸崖にて下より怒濤の打ち寄る荒磯如く物凄き
き處に一ツの山角を出でハ忽ちその上なる断崖より白練の如き瀧(タキ)
が落下して激つと流る名高き布引の瀧にて水と勝りて西の
く見ゆ 聖上ハ如く此處に御通輦行りせられ此ハ定めて

献饌あらせ玉ひし由申伝へし旧事あり　是より又海上を望みて山の麓
を三里越へて南の方ニ四五十丁程行けバ名立の驛にて今宵此所ニ在宿ハ
名立寺(ナタチテラ)といふ佛寺ニて宿りける
十六日　昨日より風雨強く暴雨なれバ朝七時ニ立出て坂道にて
名立の浜より漁業を行ひける道程ハ浜辺ニ至りて筒石村　筒石極めて
山中に入り是より神明坂よりハ町許りの坂なる道を過ぎ浄く鬼伏村の
漁業ニ至る部方ニて山中ニ至る甚の村落ハ多く漢を行く生活とし
其辺筒石村と鬼伏村と村民の間ニ於ても漁業の事ニ付きて争論を
生じ一時ハ休業せし程の事ハ如何之しや余ニ於ても聞く所ニ因て
鬼伏村ハ筒石村より土地の漁場を借り受けニ於て捕獲を
禁せしが近日其漁場の借請を為め更ニ自村ニ於て漁場を造らん事を
謀りたりし筒石村ニてハ其漁場を争ひ却て該村なる事を主張し
遂ニ双方の争論をせしが頻りの事を仰ぎとて公ニ訴へ出て裁判を
受け今ハ漁人の争ひハ止みたれど其情實ハ果して何ニかあるや其詳細を
知るを得ず　此處を過ぎて能生村大字藤崎部方ニて此處の人々
ニ語る漁村を出で能生川を越ゆれバ世話の風景
ニて山流ニ臨し東ハ海ニ面し黒き雲て此の辺ハ桂川源
ニ盛なる所ニて梶屋敷くニ於て橋を架け渡し大なる舟の通路
を設けり鬼伏村ハ岩滝ニ於て十部方梶屋敷村ハ梶屋敷ニ於て山中ニ入り
て梶屋村へ通ひ先づ其川の東ニ於て池なる十部方へ山崎村ニなりて鰤の
漁業の筒石村の漁業ニて甚だ之を許可せられ居れりと云ふ
二十七日朝早く出立　今日ハ浦本ニ至る漁業ハ一昨日来の風雨ニて二日ニ

却りて危険難にして人馬共に殆と苦しきさかゆゑ当日ハ大臣以下
新潟縣令ハ鷲尾令を従へ相川縣令ハ出迎へ出張に相成り
天機伺として此地へ出て迎ふ然れハ御通ハ鷲尾令を従へて糸魚川
驛ハ此筆者の本陣に罷り出で宇戸ハ失せしに付今日も糸魚川より
旅宿として一戸に付二十五銭を賜り又旅宿の者へハ別に二拾五
銭を賜りけり

糸魚川ハ二日此行輦にてなりしに付今般の御駐輦を減（日）じ御滞留
一日此行輦行せしに付大凡の此行輦ハ一日一日減じ又漂の港
行輦事を廃せしに付此地へ着所の前日ハ一日四の寺院へ御一泊なり
其外の行輦ハ日帰り此処ハ宿泊する所此地ハ宿泊にて宿泊なり
宿泊なり

二十八日晴七時糸魚川御発輦行せらる道ハ御所の前より海辺に至りて
此川の水ハ大に減じ橋を架して渡るへからず海辺に至り青海驛
御昼餐あらせらる此処より道険しくなりて来りたる新道を切開ける大道
青海驛より歌に至るの間ハ駒返しと称する難所にて其路ハ巖石の
下を海岸に沿ひて行く故に波涛岩を打つ（アラ）（ウ）所ありて岩を傳ひ
るにハ岩石の間に在る波濤の引き際を窺ひ其の間に走りて
湖頭を過ぐ之に加ふるに石灰石の岸上に至る此時ハ危険
実に云ふべからず今回新たに完成となりたる山路ハ青海驛を南に距れ
二千四百メートルにして青海川の一橋を渡り此より険坂を登りて黒姫山
を踰し其尾麓に出で夫の背を廻り夫より石灰を焼く小屋へ出で険路
を越へ歌の仮居所と称し近辺ハ僅かに蕨卯の道の通ずる小径と云ふ

新くまる之を開きて大道となせしに至り一里二丁拾七間一丈の甘
除り二千町四方の其地険なる所凡去所行り旋回して山脊を攀ち更
渡る十ケ村に除る其頂は絶壁有て迷ふ此ゆ小鳩蘭行り余は車を捨て
至り空車を挽くに陸奥人を伴ふ此くと共に迷ふ事こは皆困難して
強んして止つて後かさるかゆへ御前に首を擡げて其頂上を望むも処
に自家の堆きより漸く近づいて之を見れば蕎麦の花く其傍らは
芋畦行り臣圓行り出く其の葉れ村民の集りて蕪を前に備る山村の
農民が辛苦実に想ふべし　是より將軍假屋に休憩して清れ
絶頂なる城山上に小休憩なり是より降らんと到る其麓なる新潟経
七級郎方に小休みなる世にて越後の営屋を前にて又海を
海そ続きの岬角を望む山水の風景奇を極む新潟は山舞海

岸の一寒村にして人口稀少漁業を専ら石灰を焼くを以て業とし此処
此るの石灰石を焼くには殊に深くべき秘く上る是を妃姫山の如き
巌石は米く白色を帯び一山全く石灰石を以て成るが如し其近傍れ
海を山間私の所として石灰石なく是の如し新潟にて製出する石
一ケ年凡そ一百石余捨万俵に上る（一俵は五升入り）其産の價額は大約十二萬
前後に及ふ此地の人民は多く此にて遠計をなし能はさる土地は
製せる石灰を目的に越中の商估に売るなり大阪其價額の半額
六百俵の佳物に値する迄を常として之まつ祈るに近来の新潟の價大に騰貴
しぬ是は村民は十分の利益を得る能はさるとぞ云　主上大郷波瀾の侍従
百次郎方にて小休ありて後に該駅を出つる十町余りて新宮に
此所行り此道は駒進にして関村の河にて其先便は此に至る山上に

迂回して新潟を見く之を採りて親の細坂と云ふ其り十町四十八間之人
峰り高十八間坂路甚だ険しく頂の径合に於て休憩所あり又市振驛
の高地也二方山くして山休みたり浅路を出て雪道の所まてして堺川に
至る此川は越後越中の堺界にて新潟縣の管轄を経り橋を石川
縣の管下越中國新川郡と云ふ橋を渡れば石川縣の巡査数名整列し
存すへく本札を掲け当縣下にては禅称常餅の役にて通行者相ぎる
旨を去せり然るに全その挙降にて長持を為ふ者と見舞くへし開けり
此路の高知間より七名五羅を迄り男女は皆衣飾りて旅舎に群集して
其風俗は大に美なり幼弱ことも女児の如きは皆緋縮緬の切しを前髪に
結ひ其化粧頭を高くたり言語は全く都と同様の人にし見を装ひされ
と其儀は一帯形を隔て全く其風俗の雅なり珍しくの如きは珍さ

より青海村なる東大寺方に小休みして境寄る泊旅人伴来旅行の者
御目録になりけり
親不知は有名なる故く新潟縣下越後の境界に入り高田を新潟に験ら
ら道又糸魚川に至りて一日能生の宿駿驛に行りて木ハ白越中國泊驛に入り
始めて新潟縣下を離る余は雨簿の到るに隠し越後に在るこの十五間
そ見へり其領土らの外は高田に接続を経て新潟に到り夫ゟ又新発田に
到りし後を経く長岡に到り北越の東北を経る海に沿て出
果を除くをり足跡殆んと越後全国に遍く著名なる市街郡村の外大
概保之巡回せしと雖も行旅匆々之か裏面の情實に至ては詳かに
視察を為さす道行くに其記載せるかは直ちに誤謬なきを保つへ
からさるも今日まて巡りし所の状況によりて余の観察せし概要をここに掲け

てしばく事を塞んとせは江湖の為に無辜に罪を悪し候へ
土地の風俗を云はゞ信州境は新井高田等は自ら一種の習俗をなし
米山嶺を踰へて柏崎出雲崎新潟の近傍に至りては嶺以南とは稍や其
風を異にし信濃川阿賀川を限り新発田水原辺に至りては其風俗益々相
異なり言語は漸く其土音を異にし東京人の如きは其下級の婦
女子とは互に語言甚く相通せす或は路傍に於て道程の遠近を問ひ
或は茶店に憩ひ食物を命するに当り其始めは皆惘然として唖者の如
くなるし言ひ返すと数回に及び僅かに其意味を解すと雖も亜程にして
笑ひ去りてこれが答語を為せさるに至る然して余の如き者は殆んど
津々頓に瑣く堪へさる事何ぞ他事にて其言語の相異大なるに於て甚く
を異にするの傍には又自ら一種にして新発田辺とは全く其

説を知らせり是れ海濵に出で越後海浜は信濃を分け其風俗自ら別
にして今く其他の諸郡とは異ならる也し
道路は甚だ悪しくこれが為め便を欠くとする所に其一は世人は人に乏く牛馬
及び車を用ふる事甚だ少く荷物は概ね之を負擔して運ぶ以て路上
高低平坦ならさる所其一は土質大概泥濘なる是れは今回の如き路
の修繕に非常に力を加へ其経費は大凡そ数万円に上りしを知るさきとて
輙く完全の功を奏するにあらず且つ土民平常車の用を解せさるに
因り竜馬の通行に先づ手段として堅固なる路上へ敷きしに許多
の細砂を布き之を車夫の困難と為し足る者大なりざりし又其一
世夢の世中は世事の人民は気力弱く其の生活を為し利害相共にする吏
係の道路に十分の整頓せさるに因るが如し是らに付きて一言せんと欲す

車夫馬丁の如きハ毎ニ其籏亭ニ英ならや　乞が暑路傍の雑踏を為す
を常とし去歳ハ西をこ往き葺ありて是等ハ平坦にして共しく雑踏なき
を欲するを得ざれバ其害ハ今く實と相反せり是決して故(ワザト)に人を
欺くにあらざれど蓋し彼等ハ形勢を知らざるに因り自ら其の雑踏を甘じて
意し是を悟らざるも亦多く道路と東京とハ互ニ密接の関係を有して
相離るべからざるものなりと知るべし
去歳の生活を論ぜんニ市街の商人の如きハ自ら其撰択ニ多くあらバ猶
く之れを撰ミ村落の京坂を視るニ貧民ハ多く富豪の為ニ征服され
富豪ハ貧民ニ向て大権力を有するが如し
抑爲ハ文明米を欲し廿一代の目的とせしが余が業ニ於て之を要せし
ものにして良好の未質其極端(状)なりし蠶糸ハ概して下等ニ帰し余ハ甚

良者ならんを保存せんど將来の需要を慮るべきハ石油ニ石油ハ古来ニ因り
油質の良否池坑開發の難易ニ在り一両年前ニして石油を湧出せ
ざる所(地)或ハ地を堀り七八尺ニして出づるあり或ハ一井にて日ニ三四石を
汲むを得るあり實ニ稀有の天然と云べし蓋し此石油にして其製造の
方法宜しけ其運輸の便利を得るニ至らば越後一国の富盛ハ期して待つ
べきなり
花街柳巷ハ共しく著名の市街ニハ必ず之れあり新潟の
古町高田の稲田新田幸崎の如き其繁昌ハ娼妓
相ともに絃歌の声常ニ絶へざる巡らば浮薄の風俗を
醸し甚だ花柳社会ハ自ら裏面ニ赴くべきの傾きあり
能く今日の形勢を察せバ未だ衰へざるが如し高田のイタコ節
幸崎のヤラシヤレ節柏崎のオケサ節新潟の追分節長岡のオンゲ節

のゆきハ剣が峯地の傾斜にあたりて渦和する水の源頭を成し始て潤ふ東
京に近くして一種の気候の異なる一房あるを見り
信州松本より越後高田へ掛り中山道新潟へ抽て至る全く只一回頭残
に二度の洞穴を見るごとく其後ハ天保頃より越後の国に頻り入る
又茶もあり　新潟辺まで頗る旅人の用に適す先ハ外を乃屋頭より四十物
（あいもの）営業と称せる木材を揚げる者之其所々を認めて北海道越後
出でさる者難皆昆布数の子四十種ほどの品を営業くさるものなど
二十九年前七時泊町鉛の荒川発韓山門の紙績を流せしもの入船の米沢鉄山
方ゆく山体信濃より入る三前林の外に仮会を役す其内にて古地の名
数なり其源織物の製造の実況をも示せり絢小標（ヨリコモミ）名称し棒郷等の旅籍
を經く仕上り迄の手段（口ロ）を十二度として末に器具をも排列し工女をして
其業を授けしむべきものなり米の作に亜ぐ名の物他なし日本海沿此
織物のゆきハ多く信濃より出来しを總て越後を経し本源を経して大坂等の
本源を用ひ去人もこれを見るに足りて織物の名人の職業を能熟
男子の叉分ニハ他の本業なきより其業ハ織物を従事とする以で座る
なきハ其製造ハ頗る盛んに是非川原の河岸に於ては多くの船積
を為さしめるの世を知れり越中第一の大河にして信濃二藩の急流を
あつめるのくなれども其河原の幅ハ非常に広潤にして東西四百七十間に及び
越中路ハ川流多く何れも上流山門にて河原の幅は非常に広く海に
沿ひ来る其石塊を取除き其高堤を築り車馬の通りに宜しく陸路
こまかき足ハ実に莫大の工事なりと云ふべし石門縣下に入り此らり概
して道路甚だ平坦にして頗る佳なりき陸路の法極めて其宜しきを得て

杉ハ借家此諸村ニハ旬徐ニ敷ありて近所の者共を招てり沼掛村
の本陣ちよし小休ニたり方市此島迄平方まて此気候を急ぎ持まち
村乃大渡りよ小休イり然ころの道傍ニて役従方の農業物ニ亦有りて
米をハタキ籾を擂り精米を俵ニ包め出ス光をみせり但二府奥津寺
誘然ニ前ニ方ニ内奥村輩ニ大ありしてり奥津ハ越中の一大海濱ニて漁業の
利ち之道人ん幽侍ノ村の者入来りて日用百般の貨物を売ニ利なり
戸数凡て三千人口壱万ニ越え一大盛盛の地く越後の境ニ然ニ在り間
家屋の建方揃ひて繁陋ニ富ミして海岸を除き其他の空村のくハ
尾道の地ニて床を張り薦ニを敷き方を覆ニて見掛ける無事風貌
も甚だ鄙醜なりしが奥津ニ至りてハ大ニ其面貌を改め尾道
稍やニ繁華ニて風俗も亦優美を彩へり殊て然ころの人ハ殊の他佳ニ

何貫何文を用ひて一貫ハ百銭ニ当る金縁みて其周囲を開くと四度の
時紙幣を専用し候も其去夜大ニ散して壹貫の銭れハ百銭の貨幣を
有ちるよ発足ての申ると云隆とし富山の市街ニ至てハ全く其の如き回
様伴を用る去所蓋し他方人とも交際の機会ニ困り時勢の浸潤ニ至る
故も大ニ其数を異ニする然る所ならん
九月六日一時ヲ何ヲ晴れて晴天なりし昨日ハ胡ちる景ニて然く高橋に至
大島ニ至る事七時前ニ出発所ニ至り此間ニ輩ニなり早木川の仮橋を渡り
笠木村ニてハ村藤文ニ郎方ニ暫時休息し竹中複ニ郎方にて小休なり
此橋の渡船ニ流ニて此気候を立てる当船寄りニ架せるニ舟橋ハ
長さ百三十ニ間の舟橋なり然るに先年ニ渡しとし十年頃ニ近年複雑なる両橋
の古田家在及び三辻ケ堂村の藤森ち二氏の尽力ニて架橋の今とそた

木材其外泥砂流れより給与せられ其建築の費用ハ常願寺川上流の
市街より出して普請を造営せりと云ともまた道路ハ其の便宜
をはかりて其後ハ普請をなさずして其後今暦にいたり
此道ニて在ハ到富山道ハ此道ハ沙地にして行歩よし車にも便なれ
ど一里の迂回なれば之を厭ふて富山道を通行し今も此道を用ふるもの多し
堤上を沿ふて御通輦ありし町袋町字上ノ赤の岩城隆ハ常方にて此出住居り
御陵前ハ堤上の仮舎へ供奉の人々ハ東ま三山を眺め従来の地なれども右ハ仮屋
常を避け眺望に便ならざりしハ実に遺憾とす其仮舎の前に一標札を
掲ぐ常願寺川水災の事を記して曰く
安政五年二月廿五日地震新川郡常願寺川上流崩壊し常願寺川ハ塞となれ
同月廿六日其決壊となりや沿川の村落ハ海の如く人死する者百余四人家屋
流失ハ弐千九百余戸流失田高ハ二千五百石余ニ及ぶ水害を築きて堤防を
築きて今に至るといふ

吏ハ町新庄村の草野耕文なる者に就て此地に住居りし老人ニ右の事情を尋ぬ
其時十八の男なりし為筆記の概要を左に出し金棒を突き次の如く回想して
曰く同日ハ朝より晴天なりしが一層同じ方にてよく揺り傾き常ハ見る
高山より流る川ハ甚しく泥濁にて細く其頭人の飛びし崩れ殺し止して其音響
駭せり於一時半ハ富山城外東常清寺方より大殿楼坂屋並せる大の
多く城ハ潰れ見えして其所々よりは大寺院の如き高屋に至る傍に列を
若き富山藩の石川縫之助二郎花と家臣同心二郎花と共に巡視せるに見た
十月一日午前七時富山に在る者は寄せて駆中にハ神通川の
水源ハ飛騨の国より流れ出るもの川幅ハ頗る広く今日ハ

水失し舟橋を架して甚く崩れ御旗竿を立継ぎて渡せしむ也此所より人
八町の支流にて形下ハ庄川の辺 十里二十里ハ屋並ぶ川中ハ八百家を
家数もなく戦を並べて其中に男女をもたせて毎に棒を持たせ
雲に出で五福新町と云ふより西南に向ひ松並木ある道を五六丁行きて
呉服山より元の道ハ是より南の方に行きて険しき坂なれハ御通輦に
便なしとて新町の通りより左に出て田の中を通して呉服山の麓を
五六丈も切りおげ十二三町計りの新道を作りて此山ハさして高き山にハ
非ざれども富山駅より今石動に至る二十里ばかり平原の中央に横たハりて
諸の峯に接へたる山なり頂よりの眺めハ東南ハ美濃飛騨の諸山相連て波濤の
如く立山の一峯ハ天末に聳えて雲に相接するが如く西ハ能州の半島
を浅波の間に望み 砺波山倶利伽羅峠北に其南に在りて安く全黒

の眼に極むべき勝地なり而して呉服山新庄数万の人家ハ左に顧眄の
間にありて恰も地図を按ずるが如し 此處にて少時御休憩ありて 是より
進みて峯尾を通る坂道を西の方に下る 呉服山の山脈ハ長く
東南の方に延びて其所々に数多の古墳の築かれたる塚堤ハ
安保城跡 或ハ大閣山なりし 備へありて古塁の痕をとどむると見ゆる
茶畑の中篠郷と云ふにて [illegible] 御小休ありて [illegible]
にて四方を眺め [illegible] 御車ハ [illegible] 又平地に [illegible]
漸く田間の道を迂曲して [illegible] 社 [illegible] 中老田村
も西方に行きて [illegible] 花車を池せて [illegible]
村に到りて [illegible] 御小休ありて [illegible]
御車を進め [illegible] 先へ駆け抜けて [illegible] 古城の [illegible]

とは云へど名だかきなれバ見ずして行くに二俣をも過ぎて高(テカキ)戸破(へかり)などにて
くゝ夜閑に商家立ち並びて小杉驛と云一簇の町なり此驛にハ寺林清水あり
まで此小休所とて本陣せり此清水ハ今も名ありて今も人の知る所なり
此所ハ旅人の多く通ふ道にて海より切出せる石の往来も多く人馬を
通し田畑を隔て海と小見ゆるを保ちて過ぎ二里計り行て大川と云町なり
此驛にて小笠原某方にて此小休所し此町の西にある流れを放生津川と云ひ
大川と云ふ放生津の大橋を渡り此辺の射水郡を流れて二十八里にて伏木
港に至り海に流れ入るとぞ此川ハ永く良田を灌ぐ(余)と云ふ且伏木港へ
の道にて昔ハ舟を通ぜしと云昔し大伴家持卿の越中守にありし時国府ハ今の
国府の地にて此所に館を設け射水郡ハ是なり今日大なる景ハ此
流より放生津の大川を越して伏木港に通ず
是ハ港地の良港にして築港の事など此地方の為なりとて土地の人皆
云ふ商業の盛なる地にて此港の大なる事ハ立並びたる人家と
共に大なるが為に此港を設けんとし町の人々男女を集めて
も賑なりし此地の育英学校にて此土地の人を奉り中々宿の長(ツドヒ)
なる所にて集り(リコ)其處に帰り(カキヨ)帯を巻(?)て此地を過ぎ驛に
着て(コ)後ち云國分の地なり寺の跡もなし其外の七尾に往く
ありて驛を西南の方に行く道の右側ハ松の並木にて其間に人家
多し二上山ハ一里計り此所より見ゆ家持卿の歌にも見えたり
云ふ所の景色ハ此所にて今此所より南の方に見えて胡々の
舟など(ヨコ)吟(イヅ)出て行くなれバ布施の湖と此所にて見るべし
なごりなく布施の湖きえて今ハ昔しの儘にあらざりけり

是ハ近藤芳樹先生の筆の写之此書の作者かく沼湖のことを深く
心を寄して思ひ付きてかくかん絶けれど今も形見と云傳へけるとて其邊に
十町浮とて周圍一里半計りの沼あり又其ゟ東の方へ離ると云村もあり
なりしハ丸で形(カタ)のなくいでたるなれど其沼は離れゆきて砺波郡に入けぬ佐野
六家梱様なとて能き處なる此野の長さハ今も見て此處に休みつゝくしとて其の
名を知りし夫ゟ又三里余行て四十万(シヅマ)村の名島七卯を過方ゟ此休の用意あり
雷雨を見て後ハ砺波の山麻東南より追りて堀越として長く西北へ延して
続きたる此山に赴くり（此山ハ倶利加羅の山なる也）得るに蓮沼越え弥八百なと
云村々を過ぎて小矢部川を渡りて午後四時斗りに今石動(イマイスルギ)駅に着きぬ
云ふ倶利加羅山の東北の麓にて山ならねど人家も立並びて多く戸数
千五百余斗りにて繁昌なる所也右の方に前田利家の築いた古城址あり

前田氏の頃ハ此に先祖が拠りて後に此所は遺跡寺ありて此寺は古物なども保存
したらしく見まほしく思へど春日五月に迷ひ倶利加羅山合戦の
時に太夫房覚明が認めたる埴生村の八幡宮へありける願文もありとそ聞く故
之を見て流るゝ様に行くも文字ならねど其所に添て細く上ぼるの
築地に文庫門に到りて華付(アシツリ)と云物あり水芸の見物ハ極て珍しく跡体俯なと
めて除物のみと万葉集の歌にも旋(ヲガミ)と同じ乙女(オトナラ)等が華付
とりと称してすゝし世に云ふ苦しき赤い切れを身に付て
ことハ余年前よりの時なるまで緋(ヒゴ)羅紗メリンスの流の横濱
港に来る事なかるべし
十月二日午前七時石動駅を出発して旧道ハ世に名立たる倶利伽
羅越にて通過するに六里計の沢の山路を上り登りて

新道を御幸行はせける此日は快晴にて見物人いと多く皆夜の出店し道
のほとり並列して此道禁ずと称するより出て山崎は並円に添ふて彼
坂路を直進し此所に至り渥美にて樹木繁茂する處と山腹の田畑を行
て茅葺の家三四軒ある丸路し自ら画家の如し此處は安樂寺村と云ふなり
爰より下て後は坂路を行く事七八丁計にて此處円に架したる大清水の橋を渡り
尚大なる山の中腹に在る坂あり是此處有志の者数人が其方円余の金を費して
開きたる天国縄の新道なる坂の北側の所に假屋を設け[illegible]
是より此坂を下り此所に下り[illegible]此處より此新道を開きたる
顛末を奏上せられ是より出る新道を作りたる所に此所に此道の
終りて其より此處は此坂より東にも差る所に坂は新く其處にして此の所は
紀一大国縄の際なり山を鑿りたるの十余丈にて両側は断崖は大塊を
疊んで累ね如くせり此處は挿木し加賀の出良は如く両側に岡見を望むに其
は倶利伽羅の山腹の如く山に合沢城の方に趣ける此處を西南より八幡の字形の
如くに正字又字形の如くに曲りて下り行ける道を九折村と云ふ谷間を根
に人家五六軒ある處を過ぎ假屋なる所に國旗を揭ぐ七五三など張りて
其の老松や山崖なども有りて道傍に延しきて行く事一里許り此処
より又此所より又西の方に近く坂尾村と云ふ高山嶺の
川にて田畑も少々見ゆる此處より道の南方に此處を渡りて橋
其處の大きなる所の總路を行く道を此處より日の丸を画きたる所に
日の丸を立ち其所の稲束を二つ画きたるもあり是は合沢上の道傍に
新しく如くにて賣下者の有様は如く日の丸には稲束を書きたるもありて又
奉祝など記したるもありて其の横の左側には維道君王御臨幸六統四年

新民鋭と申して方を行り堯天舜日。天傑地霊と米唐風の千みて
素月さるは有り也く相感なるの加州は学兵の多くは出来さんくて掛川岸の
村民がなる業さへしほとらく檜りて松と植つく行く天下泰平一區内
安全又六区運長久商法繁昌など祀しるもたり行るしてゝは東京なる
稲荷なる社と云依哉なりくは紀念の段一段の由緒ここを長く遺すへく
者なりべし九段坂竹橋よ御成御幸行りて細川侯方より出火依て焼失せ
寛永二年よ本名残伴が幸家の兵と残る時よ極月改郎の御光り竹橋の
辺よ出するらと云へかるへし松葉は焼失に御幸よ見て出られ賽銭坂
両越へて松崎村をも過ぎ十時頃より洋溝まて出る家の弘教寺にて堂の
住居とあるとて此辺の人々し集る国道の支度して来りて其用意せり
第四区三位阪は松原舎借よなりしゆゑて世話と可成ける事とせるま一巻倉

右大臣殿して同事を取仰付るよし世間ハ又一同首のかたに向く保村なる山か
川端さる下山脈の裾より谷ふく上さ松並木行り道を行くは横浜の小港。
南中条。吉田。下中。今町などの村々を過ぎ吉下町の安田氏の全段所方まで
出休行るべしとて其より寄せる支々徒歩御覧す。百坂山を過ぎるとや
金沢よ着く人家は添て繁く立連り物見人は法光寺行くなりて
御通輦を拝せんとや男女入乱れてさ霜の如く押寄り見る者なきよ
行くの兵隊は学校の生徒は皆群れして生徒を揃へ法通りして
柳橋の辺より道を通て御通辺押し掛り残るなくなり宮へ行ると
鳳輦は府中よ着く金沢へ御巡幸行せる終日中尾御宿方へ
十月二日午前七時鳳輦を泊て御通輦を発し沢を出て野島村より
鳳輦よ向て南より向く道を同様より世間へと保村泥山の途を越へ

古跡を探らんとして此所より加部岩と云ふ所の出口を経て

安楽寺残伴の東光坊覚明の願主を語りて其後久しく寂絶したる垣中村の

満家は垣中村の辺りにありしは薬師山の上にありしを残伴平取を経て

勝利を得しより今の所に社殿を造営せしとて現今の社は昔より

当時の物ならし 間口八間奥行三間程の中に社殿の廻廊作り

是を拝殿とし材木は皆欅にて作りたるものは雅を用ひ古雅なる物也 正殿は

三間四方位にて廻廊作り拝殿あり 宮本尾張廻廊も皆欅にて廻廊

の欄干なども共に精巧しきものなり 實に数百年の物なるに決して銘文を

容るべからずと祠官は上田某と云ふ 海棒を奉りて出るに宝蔵の抱此村を

過ぎて俱利加羅の山に入る所に此を過ぎて二千町程に是を山路をよる

来十町ばかりにて坂村より此村の方に安楽寺領ありしと見えたり

二里余にて入り村より北の方に参り巳坂に至りて其の古松ある矢三郎の古塚

ことを見てより山嶺に清水ありて彼の山は葉なると云ふ礪波の奥なる卯の花山なりと

古人の詠へども知らず 坂村を過ぎて長坂を上る事又十八町にして二大塚と云

猿ヶ馬場にや此の力條と云ふ処を過ぎて夜より又十町許り山にて山嶺は猿が馬場に

平氏残伴の平軍を拒みたる所と云ひ伝ふ 其より二千町程の平垣ありて人馬を

池在る事に依りて残伴の陣営の跡は此辺りにありと云ふ 左の方に猿ヶ馬場山あり

當山の年焼失しぬ 是より又上る事一町余にして俱利加羅山の絶頂に

近く越中の国々山河を望み各国の海岸を眸に見て実に空濶なり

絶景なり 旧は相田氏は此處にありて而して入るべき高道を模して

猿ヶ馬場山の東南の方に動堂あり 此所は此處に俱利加羅明王の像を安置

しるべし 是も燈火の絶へぬと人多く見えしといふ 是は此所の

神社と改名し寺号の坊ではなく拝殿宮とて改名したるも世に寺の名にて其名
高名になりし是は竹の橋と一里ばかり続きたる坂をくだり梅の花見が撥
多く年々其花時を待ちて世に遊山なるべし坂を下りて竹橋の中央に出づ
左は倶利加羅峠の大眺望也
十日午前七時金沢出発して今石動にて大宮の城下を経て
湯涌大きなる町と町との其外古びて様々大きなる方にて自から上方めきさ
たる家造りにて女の風俗は京大坂の風と云ふ事にて髪の結ひ方も皆此
辺の様にて上方風なるが多し男も気なくしき事見えたる人々も旅出に至るまで流行
し祝儀にもやるなり町々の家毎に三味線屏風絵は鄙俗(?)の如く
文人画は少くて米庵の書此所は稽古家の画又は土佐絵など多くこの人の作
少しは茶器ありしが町を出でて松並木行きて友遠と西方に遊び(?)て山脈

相違て高く見る寺あり大きく見えたる在家人は村
の人家は茶又は田畑の畔に集りて此辺の聚落たる其人が喜悦
にて九谷焼の窯(?)にて帝様(?)に至りて茶村(?)の平方にて此辺休みて往来の道あり
田尻村(?)北枕村(?)にて立ちて又松任駅に至りて此宿の
町の市中にて人家に立ちて寺の中にて大きなる処にて人家に立流の寺
寺の門の下女に千代と云ふ者ありしが或る朝起きて水汲みに井戸
側に到りしに釣瓶の蔓に朝顔纏ひ付きて花咲きけるを
被るを惜しく思ひ隣家の井戸の水を貰ひて汲みけるより其時
に「朝顔に釣瓶とられてもらひ水」と吟じしを人々は是は妙なりとて
此人は奇人なりとて其名をもてはやし元より発句の道に女ながら名を
始めて是が為に世に流行り出せる俳諧の名人と云はるるに至る

登へてなほ上にあるなり今をも能化坊とも云ハ加賀の手代にて知らるゝ
候へとし出雲の兵庫に寺を建て云ハ十四年寺號を出立行て一里餘に
して相模殿の菩提九年方ありて此所に休息り又一里斗ありて手取川を渡
り能美郡に入る候ハく粟津驛へ出候くし川を渡り辰巳方にて小松に休り
又二十町斗ありて寺井殿の旅宿清七方に一宿休息り此所ハ沼て道にて年垣
にて正保法師の建立し之地と見えしや学校寺院ハ何処も同じ秋の
冬分年々に加賀小松城主にも参勤行り約三年ハ在り近年又出勤ハ六教
四書も行りて先年ハ加賀藩にて寺を建てし其外の鍛冶の細工の類を造る
機巧家も又所近在にて製造す蘭癖し酒も盛んなる地のよし其外町なし
製造所よりも先年より絶えて入る者も多く商業を営む者も有り
ところなり

十月六日午前七時小松驛を発程す行くこと見へ人ハ町ところ見送して
出る驛を出て東方に沿を出て高き岸に進ませらる小学校の生徒ハ驛外の松
並木迄出て送りて並列して相催せしものなり道すがらの景色ハ晴朗にして
右に相馬る處にて山脈ハ東南に相連りて沿海のかくなるが中にも高き
又遠く海へ向ひて見ゆる名高き白山なれへし須天村今は江沼と云ふ六郎の
カタホトリ 片野町などの陶器にて竹細工等を出して自ら出行りて然く行なりしこうと
又作ハ右折し北へ向く江沼の道ありて東南の方に木場潟とて周圍凡ソ
一里二十町斗の沼あり又東北の方にして今江潟とて周圍凡二里餘の
沼あり南の方に柴山潟とて周圍凡そ四里程の大沼あり此三つの潟と潟
の間には細き溝川ありて脈絡相通じたり古人ハ是をコトノウミと
呼ぶ字ハ琴の海とぞいへ書にや柴山潟と云ふより八雅称なるとも是ハ俗名

とり見えて粧居の道へハ帰るハ路程なき近道となるべし前ニ上の臺
と云眺望よき処行りて拂ふの沢を一目に臨し夫ハ芦森森
る首臼云登リ白鏡岩を深めて計らをしうる福山藤原村の
古銭塚を除きて東ハ甲山に隠さる葉の樹々りて中にハ西岩なる
なるよし夫々半第尾村の根小木なる化方小く此体行り此道を過れハ
人家も多く有見ゆ此出し後よりも此処之迄を過て跡く行ある道
の右の山に小高き岩此上に隠さる山村に入りぬけしまの松並木の石に登
げなる處りに甲ある行りの見て集りて此道裏を耕しなる旅人赤脚(アカハダシ)とも
き出し或類かふりたかとしるもしみえ人く把をて気分るといと寒気げなる
自ら人往拘などの表からやし思ひの此道大平山の道郡なるらし平坦なる
山細行りて此方などして往来せり此處を過り残して川浦驛に至る流ハ

きへとも芦尾の里をむかしにもかハ宝盛寺と云がる所町の此寺の奥宗寺
て小出体行り此寺の前なる大きなる池有り坂なる水ハ平坦なる廣さ
万余也此寺にハ又此道にもありて田野の道をあまた有行さる捨り
在て此をし方をとられを八分と此道の路ハ彼の路ら此湖(ウミ)に治さる一帯の岩
の上に有く在りし之夫々夫国村なる此村なとの出る此道とるさき行くよ
並木ハ多く榛(ハシ)の木を用ひてり是ハ稲をかけて干時の用意なるべし此道々
次第に近く如りて海に此方まし低き山も多く立隠さ行く先をして山行り
有村の勤榛など数なる榛ハ石橋にて八重の東なる大日山の麓より流出る
川に架けたり蕎の隠なる橋此助平部方りて此体行る也さる其用意をせり
夫々又国川の道をあまる道ハ右の方る見え此ハ山ハまたく色し向寺の傍村に
春廣寒霊所景への道行り此隠村よりハ武田の神社行り見をまして此しる家の曲

此ハ継立所なり此を出れハ先に西の方に見へける一帯の平山ハ則ち其山なと
雪南の方に遠る高山畳々として東西に続き其麓に連りし数十村
の麦田渺々として湖水を望むが如く風景殊に宜し此邊ハ小曽汲大麦汲
などと云所にハ商人家多く出張りて更に新町村を為したる学校の生徒数多集
ふる所の桔梗ヶ原にて無量の広さにて先の辺ハ関にて寂しくみへし中々生徒の数
しく於此にてあまく無邊に広かりし是ハ大和年歟ヶ洗馬近風景を東に見て出
ちかりし山北の尾の子に菅生（スガフ）の神社あり石壇高く東南に石の鳥居に行け
神社の前此橋を東に渡れハ大和年驛の如く宿更に行く洗馬驛に行く人々
驛吏ハ酒店にて買物を町とし家並宜しく東側に塩無く見人々を山家
より出で来て見ゆり無量年なりし東より出て此処に来なんとする処ハ己眠し
る事ハ領物と兼ねる処さ姫へ人やらし思ふし廿八日次十二所まで

又洗馬驛に行きけれバ洗馬宿の様なく山道を合て
六日本山驛にて洗馬驛を見つつて大和年間を出ち今出町を東に出去て
道の左側に低き山有り旧道ハ此西の山を登りて桔梗ヶ原をさ坂を越へ
越来の雪丈ら細道を長崎の地を経て桜井を達して此所迄来る道
比再さへる鉄坂越と云新道ハ坂も少なく里程も余程近く今日此道
西驛を出て新道にて鉄坂村を過て道急しく緑く東方の山ハ深く
近く道ハ進むにて狭くなりける松し轄くハ本地にて近けよかりしが土所まで
若宮坂の下より先ハ坂道なく漸く急な坂の長さ二十丁余を越えて
冷よ到り先に桜沢と称する所来る家で東を見て其ハ若宮の
矢のぬし風の耳辺りを過ぎてひうひうとして考へ行く処より十字川で平出に
到り戸数五十軒の立村なるにして学校の生徒しし道傍に並列して贄川驛

を待ち居て詠め人々にも倍して多し　其辺の茶店にて暫く休息し夫より
又小松川の茶店より世良田深山の中にて田畑を分けて[illegible]堤を越年に
却りて又半道ばかり男女を問はず頻りに[illegible]寺町にて八九人
但し寺内は殊さらに[illegible]食物の茶店なども多く（賑へり）一の桜を植え
トロ〳〵と南より北へは往返村（其外の里々なし）多く老若男女を携へて橋をとく
出来る学校をも岸の小村々は色々の茶店生花し賑ふ人々も多く群集せり
夫より茶門より往きて堤路を東より下りて東山の麓にて一二町ほど顧みて其路
[illegible]見えし先の往返村は深山の方に[illegible]して[illegible]村の[illegible]二三
[illegible]の山村にて賑ふ人も多く往来[illegible]十余町にて中川村より[illegible]一
[illegible]の山[illegible]地に[illegible]て南へ先園[illegible]へ[illegible]の辺に[illegible]
[illegible]の[illegible]の川より村々[illegible]人多く群り集ひ

今やし[illegible]休み[illegible]
世[illegible]道て[illegible]東の山[illegible]
[illegible]の道を東[illegible]
氏の[illegible]て[illegible]市[illegible]商[illegible]
[illegible]
[illegible]地の[illegible]
学校なり
七日午前七時[illegible]北国[illegible]の道を[illegible]
[illegible]横地村[illegible]旧[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]時[illegible]新田義貞の墓[illegible]とて見[illegible]
[illegible]て[illegible]墓[illegible]市[illegible]

左近衛中将新田大守義貞覚右衛門佐に仰し彫り付けらるよし按吏ト吉田吉市と
巡りせ玉ひし其時石稲田村の坂口牟田方ならん此体何某人ハ仲こ々～
吏ト九頭竜川の橋を渡らせ給ひ其外久しく此体何の家の名ハ名を写さ
浅水の吏ト大谷村福井より出た舞手行ゑ長崎ハ東西に在り其館ハ元松平氏
入国後いかゞ人家も広がり一般の地也人家多く立並び人物も往来し此
名付くる城下ゑ舞行に至て敦賀之勝より市街一般ゑ町名
を改められて古代の表名を始め新町々名を用ひ此地の
借奉代此方々の此旨制を新名を用ひ其並に市人ハ一般より旧名を唱へて
不当の事ハ大抵皆新名を知らざる者多く用ひざるもあるべく往を遂ぬにし小僧ハ
村なれ新にて左様の町ハ皆福井より出来たせんと云傳又広利如来の気こと
出京で浪人屋敷の日吉町であろう出家の路名をも其の流行くに廃が移りて

其のよく見えける
十月八日晴手前吉村福井の出立宮奉寺にいはせる前見へて町中に
足羽川あり是を渡りて東ゑ行くこと十余町にして福井の町を離れ江端村ゑ
至る其の橋を渡りて東ゑ行く方ハ西方の山に向ふ左ハ遠く左の手ゑ南山出る
る中ゑ宇を金剛寺右ゑ其の山ゑ添ふて南ゑ行くに道ハよし荒井村今市なと
村方ゑよ行りて村見へハ多く男ハ山稼ぎなどと云ゑ文新村ゑ女
ハよく女と云へるらしく但し着物ハ衣服の方が勝りて居り浅水村ハ芳尾
なれども多く立連りて町並行り家居のさまも見へしらず此浅水世尾ハ多り
出でり家ゑて池田郷方にて此体何某ハ西山の方ゑ見へて作程近し
見ゆる也て平ハ往村浅尾村長羽村足羽村と通ひさゑ行くにまさ
や広くなりて四方を見渡すに東ゑ山を包まるる一区なり地帯としまさ広と

見えて猶ともよく重り合ての化粧は菓子も皆く出来たる丈へ國府村より
至る迄此辺は木立も繁りたる樹林に添ふて行くに東方は広き田畝に越前の大
の例に出たる我見えたる人の極を見るに佐見し老人や幕をも引連れ参詣を
指へたり二三里此山奥へ出たる者有るへしと思ひつゝ行く程に
中より八国を傳ふるかあるらしと思ふ英雄さゝる姫をかしく新たなる城に
の頭城郡の舟なる鯖江此泊駅なる上の人あり町は米穀を売たりと見ゆ
前書に近き所に水落村に着き村にて西洋作りの学校作り通学校
と云ひ此鯖江へ着き其前の室列して通輦を指せ丈長泉寺村を
過ぎて坂を上り大鯖江の城に此処は間部氏の城下にて人家は尺をみる
計あり又屋並は低く立派なる人物も綾しからぬ勝信学校ありて小休
行けば此辺は少しも小高き所もなく此の入る方は右に山ありて其此山に大なる山

行けば坂を下りて西へ出れは西の方に又山へ向ひて一里行きて東へ折れ帰路を
の間稲田広くありて上鯖江村へ日野川にて南より流れ来る一急流なり大きなる
吊橋を架し是を渡れば南條郡之日野山其南に峙ちて尖る山の
形ち似たり之を向ふ東北に走れは其山又北方に遠ざかりて大盛岡より小山の如し
或は新開社の棧橋あり人は家に村々に家の前の足人を見せて程なく武生駅に
至る迄は昔此越前の國府の跡にて此府中と唱へ往古は繁昌なりし古
地なりし近代は本多氏の居城にて戸数は三千餘もありて家並立派なる
駅にて市街の中央に堤ありて一條の清流行き流れ渠の側を通輦
の路とし側を指観の場とかなる古府此辺は此村にて少しく休憩行きせし
橋を渡り小さく市を出て素麻村白崎村南は西山又近く四五丁
離れて七八十軒の小家ありて此に道は平垣にて山の裾に沿て行く

今在大道寺など云村を過ぎて穢多(エタリ)村を過て道の右の山に
熊野社あり其所は燧ヶ城の跡と云ふ其中の山村に今庄吉郎方にて
御休所とて其用意せり相見へ人々是迄出迎へて宿を過て又此所を
くま出て一山宿の処を過りて三尾右の山を行くに両山の間僅かに
路なり漸々く湯尾(ユノヲ)峠にかゝる是を峠の宿と云ふ家数漸く二三戸
斗あり大概皆茶屋なり其家の上に茶屋あり是も御休所有ゆへ此坂を
湯尾峠と越えさせ給ふ此峠は霧深くして白く見えて暫く其上にて
今庄村吉兵衛方にて御休所とし此時坂を下り今庄宿に前田亭の山
其腰に斜めに下り山道を是迄越の高峰雲跡が眼前にて浅水の城なる
愧帽子など越え山を遠く過ぎ其先に木の間遠かなる是より四五丁
山にて今庄宿の左に四方村の山路とて年経て古き川の水の山家あり

是まで方々を越前の国府とて今は猶越前の国府の跡を過ぎて
越前の国府に至り
十月十四日今庄村今在越前を出発して朝の程は山家を
過ぎ是は山中の日野麓(ヒヨリノセ)なりと左は用ひせぬ人もありと是を越(カヘル)村
をも過て今は湯尾村に泊りて山東を過て今日は山の上の木の芽
峠を越え渡り、湯尾は山東を通り今日は木の芽峠を越へ山の上にて
板取宿を過ぎて江州柳ヶ瀬に至りて夫より坂を越え今日は
新道村の古城寺にて御休所是より道中は甚だ岩が根こゞしく峠
て小半里ばかり大雪ありて下りて峠を越えて十時過ぎに二度(フタツヤ)
云山宿に出て其所より方向に中河内を越え六七里の道程を
中河内にて夫より国は峠が仏庵なれば三人ごとくならさる方へ也

腰を调ふべき便もなくして今ハ無益を物語り郷して急ぎ立帰りて參
せしまでハ沙汰も止ミ更に涯の高山に攀登る道ハ岩間に流れて左ニ物道もなき
此より宇四千余の間ひしの平地もなき險坂にして人力ハ定車で通ひ出来すり
蕃ノ役のつとめなれハ右大臣度ニ而も有り之を寄せて通等靴にさがて所検出るへき
此坂を登り切りて外に高原村と數賀郡の境界に至りて奥ハ滋賀郡の
管内に属し是に山家二三軒あり東側の前門峰方向に此峠を通行せしめる
支ハ南方の方へ下り坂ハ急にけハしく道も亦益々狭くして左右ハ滑り石なる
處ハ瀬ありて益々強く吹き風ハ帽を吹き飛ばし高嶺より吹き下す嵐に
蜘蛛傘を押して涕ぎて残して居るに此處ハ道ス周つく天字デスの所
に懸坂ありとかし漸く平野に下り付きたる家に新保村と云ふ道傍の
人家に立ち寄りて休らひ右大臣度にて或る農家に入りて暫く此休息をなす

主の蒹之をもてなしでかる菓子を進ぜて其まにけて食しけるにつて農業の話し
なども聞せ而に年毎にて作物が穰果の大さにて此は滋賀より遥かに深く偲を
偲びて立去らんとしや慶長元年の頃此の辺の新宮村が流處の無事積善
の中に窘めりれハ此村の吏下南の方へ下りて茅家より向はかく平地なる
此辺の法令左に近の方向へ此峠を通行せり是より坂道をして此に山峠を下り行きて
平坦を越へ勝坂と云ふ小坂を下りて是ハ權曲村へ通ふ此峠を通行して
其用ニせり道を通れハ道ヲらし平地之益々村に出る所ニ向て左方に
到り小の山を両側に中を交ハ敦賀町の入口より港の東に氣比の神社ニ参詣
中社なり其の岸に立派なる人家立並ぶ其の所に此を参詣せしめる中なる神社
文政年中ニ建立して白砂敷なり居を致して社を掃き清め祭る
敦賀の紛失ハ弁財の寺院に年々奉納此を祭行せしめる當時の人ハ

多かりしと夜に入て雨もふり出ぬ遅延蘭径の亭をさく
十月十五日午前十時頃発す紛然事あり あわせつゝ此道の傍に松原を出一
覧行せしが遊女は設置十勝のうちにて其内金谷に名所山岸の古跡をたすね
栄螺山 立石村の寺を行て其川に園臺十ケ所の海浜を抱き膝浪に
して千頃の眺望のよく商船漁舟其間に往来して眺望尤宜しこれも
暫く此板橋をわたらせ須磨浦の景色を此邊見行かせし迄依て此
深く渓と川を越えて帆船出入せる佐賀浦より来るを閲し来る又此辺の景
流泉の結合なるを設事見かけたる此海藻の北国海岸を渡く此辺の港なる迄
小海運輸の便利を得たるの織物等多く其所をして繁昌あるせ給ひ
此後風流く御休息行せ給ふ七時頃此所を立行て此所又水戸の浪士
武田耕雲斎を始め其徒三百九十余人の墓しあり此なりしが是をハ

見ざりしは此海邊の見行りしや後は知られん境界隔屋の辨もそしらぬ百余を帰りしとか
聞けり此地に其人魂し掛る有り疑さき大山勇を敬して始めて其人の死をはし
其首を晒せし如くなり丈余に鱗を重ね持し津田村長崎村を過ぎ道の辺村
至らせ給へば西山御陣近く鳩原にいらせ給へば谷と山ありて又ん繁茂して道ハ平
垣ありく西大井は行り東の向より迷りし市の橋村あゆハ古市方の山脚大井
左行んで武田川其所を流れ落ちて流れ之を遊つて庭掛けし板橋を渡りつと
しての田地にて丹寄を出て猪方の御陣あり猪尾の小狭なる谷を行き
又前より出て見えし此辺二十余ケ所山中人なりんでたとて此る姿の旅人の
見ゆ中川安寺村前を通り此辺休行り見より山坂行く三里計の所へ日
給路にある道なり行くの道は越前より又只今連よ出でて出る所也中山と山比
間を行く次第に三百年の古を年恒に紀行て見る道を渡しき坂もなかりしが

此道ハ麻生（アソ）と云村より西南に出て江州塩津に通る本道
の由いふ此外深坂越のあり此道ハ此道筋を通るよしとなん敦賀より
其の標柱と見しき物有り此村より東南の方に出て様き谷を
屋（ウタ）宿（ヤド）ありて行くに漸く山近くありて道もあり車も行き
悩み難くして刀根に到り山間の一之村にて谷川の流に沿ひて
なり刀根二三千石余ありて京より此方へ此山体有也
高開き所より東へ行く深山を分て行く事十四五丁許り出て其の
行止りに又倶利伽羅の峠を東南へ越て谷へ下りて途徊て
南を越ゆる行く此辺の道は皆小石多くして車の通ひ難し
とて行く長坂に道あり車も通ひ滑（スベ）りて人あり上下
合せて余呉への道に若狭と云ふ所あり又右へ行けば漸く
峠より行き右へ大谷の比叡の峯にて織田信長の兵と戦ひ
し事ありし其の後に長く此道筋一ツの隠れ坑
ありと見て程て知行の江州に移りたることを語り

其辺深く上より見れば山ひらけて坂を東より西へきくるなり茲に
あり新道なる事ハ柳瀬の粘土の谷間に向ふの山の背（ツヅラ折）通り
の羊腸なる坂を下りて小川一つ渡る是ハ余呉の谷の池の出る所ならん
道を今一二三丁行て柳瀬に至る重尾の方へ行く道あり
山の内道深く入りて行く事よく通る賤ヶ嶽へ
多く東の方へ向かひて車にて通る中にて山麓の
用意せし丈ハ此家を宿として大谷小谷池の今市の方へ
ふり行くに東方の山に向て京色白く茲に止まる
東の山を行て西の山を眺めつつ行く中之村の明三寺
寺の体のよく殺せし此下西の方へ賤ヶ嶽に大谷の年の四月
此辺の勝家に大谷へ賤ヶ嶽に戦ひ加藤福島等が高名にて佐久間盛政
を生捕り其の勢を破り今ハ此賤ヶ嶽の其山の前に大岩山
出て低き松山有り是ハ清水の地にて三ヶ所の旧跡有りとぞ
行下山ハ佐久間が陣取りし所にて賤ヶ嶽の東にあり柳瀬（さかひ）より四丁にて

過し雲雀は柳瀬を陸堂を振りなし秀吉公の本陣は余呉丈が南にて田上山
のあるにしと云村の老父が緯のまゝを語りて余呉村と茂が嶽の間に
小さき湖あり是をそ余呉の湖と名付たりとし丈が川並村坂口村など
なりまた新在に路狭しと夷る提灯を掲けつゝ大音村をうるまなれ
岩鼻の錦絵市ありし大音親家が事を思ひ出し其村の名も出やしと村人に
問ひし程に亡と云ふ丈が又黒田村をうるさて木之本に着しうりし風雅は
手にとる所に山美行り行古来は浄信寺と云ふ寺あり白鳳年中の開基にて
本の地蔵と云ふ名佛(ソイブツ)なり
十一日午前七時木之本を出て坂本にて巳年の間に左手を見れば天守
らけ越して山脈の後をはなく西は績が嶽(越前の)
山も高く見ゆ　右手にしては山行りて平坦にて中谷に係しとや
余近江の中にて是ほど広く激しき土地とてまり倒の如く田畑也を
うねり行きが広瀬村にて八百姓町広く子国村は百数軒丈が田畑を
るかさて高月村二百余軒なり此の本地近辺の家々は広田にてたり八
東畑計りなりしが今日は南方稲田広く木之本から人家多くなり
古孔も早く人物も大くつくらくなりと見えたりは多く喜多きさ
ゆへなりし是の余村よ至りは雲雀背巻とよぶ山行りあまちろつと
富士形の青山あり西の方朝日山近くそのよそに山本藩定をを云志の
極へいう城趾あり東の方は滝井長政が父子三代の居住せし小谷(オダニ)山
なり其小谷山の又南は虎御前(トラゴゼ)山あり是は信長公の城り信長が
城を築いて秀吉の本陣を置きせられし要害なり八田方近ふて田畑学校
あり山体行り丈が馬渡りて川を渡りて唐国村あり八十軒の村々
田川を渡れば古谷の城や坂風七北にて皆田の畑あり此の姉川の川中
広く一面の田畑にて水は少なし三条村の大橋を渡れば山体低く
たよりは東方に膽吹山の高く見え歩きに人物も上等くし渡り女も
十人並べたりがら多く中にある老人は一行の衣装を着る半紬衣を広く見え
(キタナ)汚織らしき紙の襤褸(ボロ)を纏ひたる者は一人も見ず須一時を過さ長浜に
出で米原の大阪屋にて昼食をとりて山にまつりし港は二千余戸の人家

にて綿屋と多く織出して人家も大きにて町と廣く人物も優し
く見ゆ町なれど皆人の出て居る中に小児は洋服を着たるもの多くあるらしが見ゆ
飛脚屋の体も見ゆれど女と眉目よきが多く見ゆる長濱を出で
平方村下坂村辺は湖水の東畔にて京より来る舟も見ゆ外に多く行く路は小田の
方に近く見ゆ比叡山は雲に聳へ沖の島と国賜の島に行く一瞬万頃
瞰として小船舶の往来する間に布帆の影を風と共に走る絵画の
如しと言ふべし右に大東村高橋田村と十町か二十町づつ間を隔てて小村
なり此辺は湖辺なれども稲田有りて湖水見えざれど長浜より彦根まで間
の左右山辺は山近く平地の田畑の続く高宮より一里余行きて鳥居村より
百姓屋の村なり天野川とて川有り膽吹山の下より流れ出て西の方朝妻村より
湖に入る坂より朝妻川とて朝妻村と此所の末にて満ちぬ所を築ゐ
舟車賑ふらし 朝妻は昔繁昌の地なりしがいつの頃よりか
佛波の如く方なくなりて今は西に此辺盛んに出て居る
有りと昔しは繁昌地なりしとぞ夫より暫くして米原より出る

二百新田の小沢なれども元は湖水の入江にて内湖と云ふささ波にて小流
舟を入れ大津屋に休まりの便利よし（朝妻筑摩は米原より入江を隔てて西
に有り）為に此の辺の村々を矢倉と云所にて中山道と合す摺針峠は此処の
東の山の上にあり矢倉より十丁計も右へ上る右に社有りて高宮社家の宮寺
学業人の有りし事高宮の方に小川休業と云ふは高宮村と云ふ此処に出る行者
人は男も女も垢ぬけてさればいかほど多しとも見ぬほど山の中でもなし
身代よろしき者多き体にて人柄も伶利らしき方なり様式行きてシャップ
を好む男も女もめきたる女の如く見ゆ又同じ彦根藩の士族なる人も洗を
出して又見るべく小野村より人家七八十軒行き元より右を人物よし
有る人の中に勝れて美しき女も二三人有りしが見るにつけて器量まで
良は小野小町が旧跡とて其の墓有り路傍で信仰の人も彼女を元の如く
扱ひ続く見えたる此辺は小野氏の出る地にて筥を出せ此家の人々や此辺
然るには云伝ふ原村と云ふ出して此辺は太と云郷と此辺は古地にて地蔵村
百軒計り此処が西にて彦根に行く道行きて大堀村より大堀川を行き二百軒計の

村々多く過ぎて高宮駅へいたるまでに新家の町々其道の縁
西ハ南湖の浦々遠く見え南北ハ野田八丁郷なり〇多賀神社ハ高宮より
東の方山ぎハ凡一里行て多賀郷なり鳥居より入る多賀神社ハ
縣社なりといふ武内の社ありて従前ハ朝廷にも崇敬厚く毎年御使を
立させし由也いにしへハ西都諸社にも劣らぬ神社にて御幣帛使を
なりさりしを彼沙汰に付てハ此の地の住所けるにそれにて世に知られける社格
社格帛料を合して金千五百両を拝領ありて其後ハ年々帛網ありける
十月十三日晴午前七時高宮駅在家を出発雄軍ありて扇を持て荒神山
前ハ稲ハ実りて黄色一面に犬上川ハ橋長し橋の下ハ巾二町程の
川にて川ハ水なく河原なり見え人ハ此川原より川中を通り行て又高宮
より此道の左右の田畑中にハ稲の上に棒を立てかけ又ハ刈田の中に
柱を並べさを立てしき薦をしき棒して乾し人々多く出て居たり
犬上川の中此河原にハ此所に多勢の村人々集り居て柳が瀬より来る
ものの野立人々にて此川原の上堤の所にて中郷に行けり越中加賀越前へ行くの

越前の地よりハ此所に男女多く上等の人物なり又多くの物なり此中にも本宮の村々
も多く出ありて又何万にも植出まや蔵掛やく近江の家に見え人もさき其外にも多く王にて
風景を見物するなり思ひたりしが江州ハ上国にて其次ハ大抵ハ稀にて此の
村々の本の郷にハ長濱近の人家多く中宮の下位なる所にし其余は荘園を見るに
農家ハ家の風景をも見ることなくして思ふは此の郷にて村々より其の村の風土の地に見えたる
の類にて多くは共に其郷の風景なるも郷々の條し柳ヶ瀬も長浜の間に一人
此所のものに皆能く拵へてチヤなりと云ふて往来の醜いとや
往ふ口にて此からは長濱ハ此所にあつて遠くもなく又近くも見え平安
らしき天も少く荷物を〇犬上川より下ハ東北の山を見て山岳峻岳尾
山なども大原ヶ嶺に連なり其山嶽ハ伊吹山にて江州と美濃の境にそびえ是ハ殊更
人に聞けバ其中にあり又此高宮の村々も半兵衛の村々も又高宮の家々は
至る百姓の村々にて高宮の村々まで家々ともいふ其出町にあたり村ハ田畑
村八月村なども村々ハ道の左右に人家立並て構へり柳々に門に近き町々
高宮の村ハ此所と郡なれども先に言ふ其の村々に続きて一町々を過ぎの村々ハ

廿日市村とハ人家も立派にてなか〳〵豪農なるべく巨商なるべしと見へゆかし
行かふ者も遠くより来る者も随分大坂風の人物ハ中等のものより上等の下位と
見ゆるが多し　女の姿ハ西京風にて小女ハ縞縮緬、紬、友仙染などの衣服
又緋縮緬の前垂を後に下げ中〳〵奇麗に優しく美しきが多し　男ハ商人風の
出立にて或ハ出るも西照も京坂風に画既せし羽織を着ふく〳〵しく坊ねけ
なる姿ハ男女が多く　小学蔵ハ附老位の女郎様（しやう）として出立に
信州ハ越後辺の如く赤郷ともいさゝか其事を愛さ存す腰かけく大きな桂ら
頭をかぶり脂あるハ是へしりへと只に宗とく彼木綿袴などの京むきなる毛氈
を敷て前後の年寄に執筆ありこころ流るゝを弱ひ出て見物する
花見の伝を以持し見物する也　天下の橋を相見に見物を流るゝを例て悪い
ことハ此ありまいが候也　夫より澤村ハ佐剣町にて十軒計見る候いて
下枚村より亦西新井の村にて中くるき町く上荘村市十二軒斗計差
着見へ家多く守宮川にて川あり例に通り此ハ廿し横砂石にて続り
橋を渡り此ハ石橋村にて人家四五十二軒也ト当村中野芸門屋さ町也

入て経りて吏ハ神蔵郡にして郷ハ甚だして町ハ一作さあみて右之剣門解
みえて九府東比較ふ〳〵高村平八にて出家供行る慕殿九府守護之地也
川を通し仰なく四軒の行かく一むくゝ人くかゝ築りて姥見に出門を渡
りて中村小幡村高花村位田村三沢村など此辺例に人家立並び一渡
この町なく道ハあとり此し年の方に振向て平畑へ流て一の都中
の衛中を行く加し四千村小町西村の前田寺常流からず宗体行り　世家長家
あたく往昔の古き蓄画の売買を陳列し　天後者傍らよし　此を通り儀り一里
斗の間にて尽見て越業に侍りし書を多く続ける其の里ハ二十七万余と
町西野ハ嫁村山本村あり　是ハ廿く町が切れて田畝に
学校并に心し皆之所に住へらし是が三並んで石を清水奥村の西の方に
観音寺山有り　世日村ハ東の麓を切りあり　山の小き坊舎に石馬寺有り右の大仏殿
の高まで行り山の西面北は方に観音堂有り西に十丈の礼所に佐々木六代
の居城にて則ち又極の東の方に箕作山ありて其下に瓦屋寺有り夫より
廿一田畝の方と東に行方ハ奥石の神社あり　世君とと老蘇の森といふ今ハ北奥

老蘇社と唱ふれども奥石と書てオイソと唱ふへし　夫より三年の事を行くこと
十余町にして武佐より広済寺山へ登る　石寺ハ足利の比佐々木承禎
の守護所なりとせしをよし　又石寺ハ武佐寺とて是より伽藍
立派なり　土府河原より東の方に光明寺山より出る佐々木の城跡なり　又三富村
上田村　千僧供　馬淵　横関なとて法ならさき村あれとも武佐より出て近江の
西の方も廿町高き山より長命寺山に続き山ハ安土なり　安土ハ足利の末に
湖水の東畔なりが旦ハ人物よく行きて人かしく多く集りて武佐より出て此寺を開
く其中に立派なる城ありて信長の墓ありとぞ　総見寺ハ焼けて川を隔て
渡りてそ遠の所ハらくに残りて此寺の辻総見寺方なる山中休所より又安土
の澤山侍と云者の家に浜御殿が奥所へ下りけり又安土山に見腹をして石寺の
鎧の底と云物あり鳥帽子形の面部の事が今ハ今ハ残てなし　安土盤の底ハ其外
小石垣なりたくて悪くてわからぬど劔者年と云其の事なる池又あり　持ち人ハ文吉
なる百姓の家にて此の坂あり是ハ猿楽山の山脚に続きて安土ありさ共の山にて
赤く此ハ廿なし立ちより見て行き玉かんやとし前樹林より四へ人が弁徳なる寺ハ見次

とへ行かふんと折節ていくさでゝ見せ置きゐが野洲郡へ出で小村より大篠原
へ出て来の宿より歓喜寺に泊り合せて其の所に浜本陣が切腹を祝し此の
事ありて自殺せしと伝て京都へ送り夜を途中にて殺しける又盗賊と見る
此處の山原の墓あり又石塔の所有る池ハ出町の此のほとりへ出て過町の森あり
あつく此山休所より出て東の前此山ハ向き碑古ゐく山の形此所のさま家藪
にて剃刻して揺くるのみ其間の木の葉の方より行て見て由ぬ景色くもあり
小篠原も長き村なり　百年前より家所在を出て行く今村の野洲なる西
小川の所の内の湖水の流に比叡比良の山ハ山の峙ち面白き所にて鏡の
中に小野なりし川の中に集りて人物の出来る人なる世をとどめ出て天の安川がある
八百年前より社寺を集めて鳥居社領ありて都を見ら思はれ小夫より
吉見寺山をもちて宿も都へ入まで行き過町ハ山の形より一ツ竹鎗等の今宿燈龍堂
と呼一ツの形ハ燈籠堂の名山にて小野郷の他の燈籠の石像ありてこれありて出る死
の前にまで残るなり此像ハ焔魔なり頭に唐冠を唐服をかけて唐靴とせしと云は是
ハ地を踏む欄を施して右の手に笏を取り左の手に物を書く形の像は顔ハ青く鬼の如く

目ハ免くして共し〻人ハ此姥竈の傍にて思ふ事ハ小野篁之像なり
他ハ衍人の知る所也此所の民ハ毎の出る人ハ出て繁昌けり故に像をもつて立し
なるべし今も共しよき〻堂に入置く保護しくさき物く古き物ハ慎造なり夫
古廟（?）狭村笠川大路井（ヨシイ）と小さき村ぐを過てさて草津川の堤を越えり川を
渡りて南より行ハ草津駅之北より此所を過て東海の南の方ハ高公
より矢倉への人家よりハ共し〻万る何方より出る所ハ松とて矢倉まで下るとかいてを
新作と云所より伊勢への道を越して人病と共し〻ハ方あるかと思ふに
ハ纔に残る其跡も仏かきて絶て手に伝ハる草津北よりも大津へ行ける也ハ
草津森と御寺也其より八東海道ゆく道にして人家ハ松し〻狭き縄なりて
其藤田よりハ可守も出るに続き東海道の絶へ〇と細く矢倉の奥大庄の池大守
相国の頃伊勢備中守護大書記官の市と表作にて近りまかりし京の奥本陣
を此所なるべし
青く晴れ年歳寺杉草ハ此矢橋ハあらせて法を見南より向く縦より
除く旅の所を先づ川を行き橋を渡りてハ矢倉と云所の町くらむが傍ハ矢倉れ

西の方ゆく瀬田の所より矢走せといへる道にて此所通り来るも近し往来の人ハ遠り
より来る其ハ少く且つ其の者が今ハ旅人立寄る所く草津七ヶ所より
して野路の野路の玉川ハ此所の名なりし今ハ玉川もなし唯少き物なり流れ
ゆく楊柳による棒道野路をハ野路と南笠の間を玉川流るるとて池
ども小川と云市へ下る所の津川と十禅寺川と云川の二あり又其棒道
野路の縁ぞハ玉川をとり取りて経川と云を載せたる所の所にて定めて付るか
へれども玉地にハ狼川と云者なりし但し此狼川ハ十禅寺川の末にて十禅寺
川が野路の玉川は跡とて思ひしハ主己臨て行しが南笠村月輪村
の東西の方ハ年来定たる郡里ハ少く長き事もかしく今見せ候ハ
広き所え地質ハ白くし軽（ホツテ）去ゆく段々る石の出る所の也其地之此東の
向ふに東より家東連りたる一番の山脈ありて南ハげ大る大原ある太き所の金勝山
から田上山くずれさる所も南笠より内輪村大江村の高き所より西の方
をすまへ歌ひを過て大津辞寺を見え西瀬田の橋まで人家八間に續く
二三町此所をも過て瀬田へ入る之百足の家の小休よかなる人きれいの家もなき村く

山々人民ハ安穏又三日なる頑民共く遠方ゟ有見ニ出たる者でなく世事
の者が三人ゟ来る人住居ゟより見て見ても御覧の人御巡幸されバ此別段光ものと
き見へる様子もなく御ろきとのまゝ親ニ手ぬくひ見へ中ゟがほん中ゟ出来たる
東海道ニ入りてより大にく数風景を見る人物しる所る中より不案内
ならんかし橋本ニ至るバ文中に立派之勝田の橋を御通輦の頃ハ湖上など
暗き所にて漢文風俗と言ふて御覧し此頃比叡の山ともかすみ水に映して殊に
景色よりたり八瀬の方流し湖水に続て紫色般若の如く見る所ぞ山など
勝田の唐橋を御渡り成る瀬田川の川村漁夫ら方ゟ御休あり是が板葺ニ
京へ見の山八景などせ事南ニ見る所山々へ見つせつ札ちる岩の此たるさく外の勝崖の
上より行く観月台あり御休行り此處ハ余色ぐまうく西国にハ八景を見渡し
湖水の一望ゟ所ハ水網の如く漁船網を引て附尾し帆風を受てもそをで小
八廉にハ枝ある景く八篠が嶽勝院の山と天神の峰の東ハ三上山が金勝ゟ山
長命寺山ハ一望ゟハ遠景くし外の山々見へ渡りて景色よし勝間村
勝ちと茶屋ニ漁村を出る所の人々山を暢る景色へ〜が水辺の景ハ比叡なと

の風色ニ似かよって此処行ってハ山をめくらせまた大雲寺ニ休ニり左光和に書
影を御覧ありて更に武ゟ僧院より立寄らせ玉ひ御休所にて人々ニ酒菓
等を賜りく観月台の如く此處寺の仰ニ石山国寺まハ山陰の奥かハ寺に
世尊院御寺の内ニ京さと見ゆし寺手前に是ハ東京へ帰り来て見るべし
御徒ニ入ゆ其かゆくくし寺門へ登り山を御見下りて勝田の寺の蔵宝寺なり又川村
清水寺ゟ方へゆく勝手御休憩ありもとは山寺より〜まだ少く命て御休輦行り
栗津の生家は京色よく栗津村ハ元の膳所の城下と会候し〜近ハ五郎
の町ゟ〜中く立派な者し八膳所の城下の御通りて経なく画きゟる籠の人々の
拝さ物を見りしが今ハ外ニて石垣ゟく御する斗ゟく何となく御心持に
人ハ見らく見え名所の膳所が如何ゟくらく〜シヤレなど言ひつ見る
銀村とて世尊寺と信さる町中の小波九右衛門にて御休ありて東京へ大津分
営の兵二大隊も勝着ゟく道の傍列又並列し大津の兵の丁の方より立
並び居ゟ四年十三時大津へ着ありて御覧の御覧ありくゆく立派之
本営是ニ八時三十分御出ゟと御着輦ゟく滋賀県庁へ御着になりける歴覧

の[illegible]に從事する　玉階に[illegible]せられて[illegible]く[illegible]當日[illegible]に近づんで
祝辭を奏し[illegible]の[illegible]を[illegible]し[illegible]を上り[illegible]大[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]して[illegible]の[illegible]を[illegible]して大坂[illegible]大[illegible]
[illegible]に[illegible]の[illegible]を[illegible]して[illegible]の山[illegible]
[illegible]文[illegible]の[illegible]を[illegible]せし[illegible]元の[illegible]を[illegible]
[illegible]の[illegible]町[illegible]町に[illegible]して山を[illegible]上[illegible]田町の[illegible]
を[illegible]せ[illegible]く[illegible]大[illegible]に[illegible]例のかく
民刑二課の[illegible]して[illegible]同十[illegible]卜[illegible]せ
[illegible]に入[illegible]し[illegible]に[illegible]く[illegible]して[illegible]べき
[illegible]流[illegible]の[illegible]同[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]を[illegible]一[illegible]
流[illegible]を[illegible]して[illegible]の[illegible]に[illegible]を
[illegible]て[illegible]を[illegible]せ[illegible]に[illegible]せ
[illegible]の[illegible]に[illegible]

[illegible]の[illegible]に[illegible]の[illegible]の[illegible]かく[illegible]
[illegible]又[illegible]して[illegible]大[illegible]
[illegible]を[illegible]して[illegible]の[illegible]に[illegible]げ
[illegible]航[illegible]して[illegible]せされ
[illegible]の[illegible]の[illegible]○大[illegible]の町は
[illegible]の[illegible]の[illegible]の二[illegible]
[illegible]などして[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]を[illegible]し[illegible]の[illegible]
[illegible]一[illegible]を[illegible]して[illegible]
[illegible]二万[illegible]して[illegible]
者の多く人の出でしこと　○當日[illegible]の奏上せし祝詞を[illegible]
恭シク惟ルニ曩ニ東巡ノ典アリ今復北陸東海ノ行幸アリ蓋シ山河ヲ跋
渉シテ風土ノ文寧ヲ観遐陬ヲ巡覧シテ稼穡ノ艱難ヲ問ヒ大ニ治安ヲ
計畫スル所アランガ為メ柳儀衛ノ過ル所蒼生天日ノ輝ヲ仰キ旌旆

ノ靡ク所父老感泣ノ情ヲ発ス實ニ千歳ノ一時ニシテ万世不朽
ノ盛典ハ之今茲明治十一年十月十四日　車駕縣廳ニ御ス恭ク
天顔ヲ拜シ感激ニ堪ヘス臣安定誠恐誠惶謹テ僚属ヲ率テ祝
辞ヲ奉ツル

十月十五日一時[illegible]大津行在所を御発輦あらせられ[illegible]
[illegible]八千家大津[illegible]情[illegible]て[illegible]
[illegible]遠[illegible]老若男女[illegible]
[illegible]建築せ[illegible]遥[illegible]
[illegible]馬の[illegible]
[illegible]行[illegible]て[illegible]
[illegible]大[illegible]奴[illegible]
[illegible]の[illegible]旅の[illegible]桂村知事を始
[illegible]摂所を[illegible]入り[illegible]南[illegible]
大[illegible]の[illegible]事[illegible]思[illegible]

大円保町の御[illegible]出御ありて桂村知事の[illegible]花の[illegible]初て着
しませりて[illegible]植え並べたる樹々の間を出り水[illegible]流出て芝生のあなた
に入り[illegible]の[illegible]山[illegible]続り出[illegible]風致の[illegible]
大方人々[illegible]○[illegible]大[illegible]
大津書[illegible]表[illegible]○[illegible]
従[illegible]の[illegible]盛大なりし○[illegible]十[illegible]
玉体[illegible]風[illegible]の[illegible]
のち此世の君の[illegible]
[illegible]
十[illegible]山[illegible]
[illegible]山の[illegible]の[illegible]
十二月[illegible]
[illegible]公園
此の影迹を画[illegible]せ[illegible]の

桜うら並びて花の比は眺め深くしと思ひける夫より南へわたりて三条坊
池に架けたる高倉橋の跡なり東へ少し築きを巡らせる跡なり堀なく
九條家の邸内にしが少し跡をとげたる跡ありて今は空地に園となりて芳し
高倉大臣の邸跡なりしが家もなく池も其形も埋もれせるまではとのみなく今は
元ありし跡なる其年月も水の流れにたえしかりし橋の跡を見るより
往にし時ならずや堀所は仲條の跡橋を渡りせしも纔に残りしを南へ達に
寺前を南へ伏見街道を行く泉涌寺の総門へ参りたる南より往来
檜井数心法伯旭雅依佛を率ゐて総門の前へ迎へ奉る聖上へ入来して大
方丈へ入御暫くして御膳へ出御ありて御膳をすゝめせる御膳代の法
霊牌を拝し玉ひ大方丈にて御休にて同十時より御膳後を大内へ還幸
ありせられ候〇時十七日京総を出て華の内京総御中の臣良なる方へ御案内
分きへ擡眼禮帽なく堀町通より華頂を廻せり是より内通を御出て歩へ上りお
ひて京へ達りしかまゞ初さき当座の出仕ありしが是は何より大人
ざらひまで跡を残りしかりし〇岩倉右大臣并ニ参議岩倉等之家

八時頃東山を越えて坂の上を観る本居宣長の墓を見て夫より大孫墓に詣て
古きを偲びけり
十一月八日ほど迄に御華族行列せる折から備中の錦葉殿へは大臣参議の方と
なく御供の行列ものを見て古場を陳列せる物京中なく謂は勝ち負ひ
大内へ御所あたりて御覧ありて後又盲唖院へは岩倉公が参向せられ
盲生唖生の作文書又算術等の科業を一覧ありて何れも近き
の末たるを感心ましませると〇此度の巡幸の御儀なく高倉一嵐正敬
年樹の法せさせが知らるゝ中をせけて所京の雅へなる詩従者て古の翁
が京なる尚歌会なく昨十六日歌のを会を催し風流の極まりて一日此余間
を楽しみしが残月越安と云題なく人ことにまでに御吟せしてきたるよ
其歌の大略
有明の月は影を名所くまなき愛宕の峯を越やえつらん
逢坂や安の松にかくろひくいさくの山峯に有明の月
いさひさしあはれ跡をのこして残れる月に越や行らん
村山素根
清水公正
淡路忠秋

宝暦三年ニ小出流
十一年迄吾七十
二年ニ

有明の月ハ杉むら越に入かゝり山へ遠くなりし其の杉村
多く杉の木の間に月かけと共にそいく時の袖にふれにける
石清水もとう立るゝ兵車への奥の方より月の影を見る
玉くしけ箱根の嶺をあけて紅葉ハ杉の梢に月かゝりけり

高橋正風
近藤芳樹
岸田吟香

今井手京ハ肘京都を蔵築行せしも山階村に天智天皇の山陵
并黒谷行て又三井寺の能舞の楽を興行せしも延年十二月大法会ハ比叡山
紅葉ふく比叡大倉をすゝめられしもの杉の繁ぎ其奥の谷村に稲井家の助と
云者より菓子（アケビ）を持参りて天覧に備へ奉りしハ宝暦中の年に朝廷へ
奉りし物なるが明和七年に至て勅命の趣を命せられ山女（アケビ）と
勅名を給りしよし彼家の助兵衛ハ其者なり後思ひ出けるにや紫野代御巡幸
を奉仕て天覧に備へなりしかは○徳大寺家内なる伊勢なる菴へ御代参
として比叡山谷北ハ築よ行て出立せしもしかは水口筋に出ての
里程を急がせしも尾張や近江築中に駆せ参りて紀参すならさるの事とも
年経つ所々迄大津をいて出立し流つゝ宿る休所に紀る路次にて御休息行せ

られし丈ハ勢田の唐橋を渡らせ玉ひ橋本神領大江大蓋月輪南笠醍醐
矢倉の松村をご通行ありて年頃に御付の荒藤家中より石段に参りて勢田ハ
同じくハ御用掛行て御道中の助にとて人馬ハ総る備への外に二百余の男丁
大江村ハ中分山の麓が家ハ廿一人にて僅にありのまにて踊ハ多かりし
山家を年く細見に出て男女の姿を醜く整ひ上に居り行を儲かれ
行ついでや近江ハ京都に接近しける上なるにて古来より人民競ふて商業
を営み豪農多く有りて人々衆を異にける風俗ハ東海道に連り
ける地理の一統ハ甚も寄せく京化に近しへき絵数か都く多く
のごときハ六角（イブカシキ）を紛れん○道路の風俗みくぼらかにハ十二月年頃所々に
西京北辺から鞍築行せしも是其夜ハ大津に御泊りなく更ハ伊勢なる菴へ御参詣行せ
治らせ玉ひしハ三井寺代人民ハ御道築を拝し見せ其目をなましく楽しき
御行列御着ありて人々ハ方々京都の蔵築行せし所を玉へ居よく暗誦
居に紅葉行せしも丈ハ東海道を御通参行れしかたりしが色々
男女の其路を拝さるいとなかりしとぞ世に知りし御ハ三条絵会に

米國よりチプス熱疫が盛んにて傳染流行するより一般を恐れしめるの年末十二月廿よ
西京の市内を襲来せしめしより同月年末府の山縣有朋と係る御見舞に
参り候して御絛約行つて帰京なし十二月廿九日濃路を山道より荘内へ
しばし越りて宮縣令が新しく任ぜらるゝ其年の冬を帰せしめ延ゐの
事を行ふる模様にして矢張去歳より山道を行く人と同じく帰路を遠ゝ
振り出で来りの年は大阪の宮中の元来より居れる人々の事を行つて右を通り山道
節の頃より鉄道を敷設しる大いに騒がしき世の中電信を敷き該縣へ数へ置かれ
各々其の縣官を諸くの電信を通し法方人々と出でて其都への郵便局を置き
官を希望して之を遠方長官を始め諸々の約定の書面に書きと申し付けとの事なり
の其頃は文字宮様はどなたか任ぜらるゝ今は大字に庭前にと据えさせる所
出の帰り往けば病院盛んにその御物の往来なきし魂胆を存すると思ふ
水の泡と成り終りて見せざる日の九北様等を衛りて見る会ふさ草巾の上衣
とそして入用物を成りましてするに後の勝負は無事年を終ゐて去りと日々に往き
急がせ帰るを以て歟らば多くの百姓を使役して今日を以て古来を運せ

岩倉を始めとして民方の事件なれば又を天南山へ入りて天子の様に御渡海
ありせらるゝ後は人民の仰ぐ所と云ふ出でし頭を登らせて新たに来るの節
六長も宮城より振舞ひ諸々の隣村一戸毎の寄附等を入れての山道を御海の
に至る処の務めと云ふ以て吹田に一郡の元年の建築を始め道々衛く出兵
に至りし所の法式や軍隊として其宗流の信徒をも伴ひと寄り集りて世の道路の
の約定したる所の其の頃名古屋へ至り其所を以て村々を備ふるものとして其年盛
奉ひて御へ至り其所を以て十四年の年頃を迎へ其より山道の中は
を縣官に其世して道々を以て傳へ往く所は其他の信徒の傳より至りて上衛ふ
出席して或は多くの或は出でて浸て寄りの先頭として宮への御渡りと云ふ所へ
方様ぞ入りてとり
十一月二十日清年末十二月弟津始め出京し山岳等へ行けし上り即ち東山道を大阪
并ニ渭川の笠川傳村とし又山海其を成りし山道等を選び年々行せ給ふ
又二階の人の此の月ふして兵を楽しみに居る東海道を伊勢の家と笛が取り
方々出でし文は宋の世に於て都村を之れ行きとなり長崎や其縣の人是等は出て

数見舎也明かりハ道が悪いせ嵌し偶さかりし注ふ親さ之物のなハ苦よ
聞ゆると思ひ成しきやありん外との御休を去ん十日の夜 ○勘作人ハ
矢張房湯守ハく御医合たり 茶漬が出来たと聞ハ有り人と走て解
なし是ハまた朝のさ旅から久しと見え さうして字山ハく人の行
金を持けバ今日又丹波とを御延擇行りハ下とハ差不ししてつぎりしよ
明後まで道を掃除せよ旅を出せ御鳥の紅洗水を用意せよなど落ち
出しうわく始めて知 ○又飯の事など人ハまぐく十分ハ紛化りされども
賢くも先りの思をハまぐ 其任に仕直云しせるまに座ぐりけりなどと云り
驛との共ふくまうてふり所ハ東方村との方ハ今日又御通驛行りなを
知りぬとも文をも少く心よ前方へ出る共代共ふさ尽くし年始研ぐ当る茶
よ御選擇行りし給せ茶ハ矢張房湯守ぐく ○今日しも行の風やかして
蔵上笹津が茶ハ不能 水谷 熊野 玉山 役寮あらうるで作は御待済の冰さて
皆出来たる箇りとる御文ハ御医合御休の為かなどハ中よ宮大臣を召
船に供奉代皮欠の為を付して行ゆくし出来て有る 以松ともく

妙らざる内彩して其用意とやら 或ひハ之へやまるハが宗大臣へ営ある
御く跡の残りげ茶漬出来て やと矢にやハざりしと銀ハ御待申くハ御膳へ奉
ふらせもありとの評判を出来に依を 切ハ天帝ふりまさりとなてとふハ
なまいり来て宿等の御有よ候ふし皆るとれまいはしまれよお遊びない
とまぐてビックリ作天し 膳ハ何ぞぐへ何ともして仕直ろ 晩がぬけて立て
ざりしとある縁取行りしとぞ

十月廿二日 晴 午前七時 高宗紀出来和 御通輦行りせられ 鳥居松叛の有門
前を出て行方小くて御休行り 出来たハ少松澤にて休し 終えて矢倉と云処に
御徒歩の趣ある 御座よ 御輦 右との揖飯を取て会せまにと並べて東山右に有名
かの摩耶と云の上かり 国中京方(隆盛)にて御休行り 丹波々銀坐部よとの
風景を御眺望行りせられて 胡書 銃撃 佛山の名迹ハ幽く御まるんで
て尋をを 比後の山脈ハ黒く 或は起伏して自ら高低の屏風を作る
が如く 湖上風光 波穏かにして 万頃の碧波玻璃よ 漁舟 烟を帯て江北
漢文と余る 記述ハ其実を此 使飽ハ一斑を見る 奥州は巡幸の為よ

寂寞せしまゝ雲雀の高音も哀を催ふ風景也とて此處に休らひ詠歌を
吟詠せしと也　誓ひし心を慰めしに九州手洗場に至りて極楽を祈らせ
御帰りに番場に至りし道は山の中を行て番場の間と云所の近辺
高僧の旅館にて其さま道なる方へ十町ばかりも番場の小村なる寺
此辺に世に名高き八葉山蓮華寺とて時宗の寺なり　是は元弘年中の事
後醍醐天皇元弘の年鎌倉の六波羅北方探題越後守
と共に利を得ず都より落され五月九日に北條仲時を始め其党宗徒人
にて此寺に逃げ来りしが敵に囲まれて遂に討ち死にけるとて
番場の辻堂に入りて主人と共に切腹しけるよし太平記にある所なるよし
此寺には古記一帖あり　陸波羅南北過去帳と云ふを見せたり　糟谷十郎と云
其の古記ある過去帳に其文に元弘三年五月七日陸波羅南北越後守
下向す　九日於近江国番馬宿米山麓一向堂前合戦討死自害交名を
記すと云ふ　北條仲時を始め百余人の姓名を記して其後に於諸寺
討死自害人数四百三十余人姓名略之　実名宗和等也と云ふ　又三月

本堂の後に仲時が墓あり　其外人々の姓名を碑に辞世の歌を載せたり　其中にて
番入道が歌　都にて嵐の花をあだになし今年は散らで果てぞかなしき
又隆玄佐助入道の歌　散る花の名残を惜しむ人もなし今はと思ふ跡ぞはかなき
と有り　太平記には辻堂とありしに其寺は辻堂にはあらで
切腹と云ふは千人の事なりと思へり　此所は番場と云ふ所の一向堂の事
にて有之　但し今の蓮華寺は其一向堂と云ふ也　又一向堂の事
などしく構へて道ての所は又番場より西の事にてその方の前にて
爪先より下る道の両側は町家あり　中く長き山並の麓に在り
の方へ行く道を出て行けば沢山に在る
右左に山ありて出ると侘しき宿七八町程あり　又醒井村へ出るに
山より行く川根村清水村枝折村牛ノ村枚岡村へ至りて右方の山は米山
広く道は平坦にて爪先上りに至り　又道傍には畑作る所見えたり
又中には男女の旅人と馬もありて此辺中の山門を通りて橋の辺に暫く休息すを
停めて又此辺の方は山深くして杉林ありて其梢あまた繁る所なりと吟味す

胡風に嘶なく越鳥の巣南のつらし人の衣襟を憩ふ人ありて
仙からしらんとその流せり是を曰て聞もなく碓井の驛より
付きぬ玄なく又は続貝玄方より小休所より世張ハ東の山下に跡ありく
山岸ゆく流の水の出ゆく霧煙の中より涌出る清水あり飛落の流を
之を水乃清冷たりつし比較ハし節季記の清泉は是ハ一尺を得て
可なりくし昔し大和武尊隠此山にて毒蛇の息吹に当り漸くヒコロく
と此處に遂に到ひ是此水を一すくい飲て治ぬ直ハ大きに宗が醒
りしなり毒害を醒ま治ひくるまで流く此水を醒井とハ名付けくるよし
なまい此身に継いその疑なりへ水は小川と成りて西方に流れ丹
生川に合して東ハ柏原村に到て微水に入るとで水上に大和武尊の
の腰掛石その腰掛石の鞍掛石とて小さき石ありて是れと之
もちハ記が仕切さくる件半なりしんと見聞く又一ヶ村ハ東の山下
に流ひ世あハ左右の山にて山の相距る半下にて三丁計り流
頂ゆく中六丁程山の高さ八一丁程て梓川田村と高き村にく人家し候

下泉ヶ此寫真所に在ばかりて名もじ負しかるに只中方に置し畑と深の多くて
中ハ岩室の地なりとへ主を居ぞて坂を上まバ藁葺二所行くに長浜と云
所のうし左此たより高き中川井の頂に此処を山立所行き其此水の多めを
人あまく集り居るを此方へて人家に見えぬハ隣をみて山をに清滝村とて
是より南小の峯に宮道沙通轉を見ゆるより右ちらしは吏此所ハ地第八
柏原の澤く此宮又此中鉄廃中方小く此宮合関し方云ちまで其月とせり
此多くな山ハ狩宮けく山麓かぐら鐘を命く宮に中納言源朝臣の墓
なり是ハ元弘の乱に佐々木道誉に殺されし人なりて東朝方臣の一人なりか
今日此坂を沙羅釋の札摘を摘にいせる也又此所の長命寺に松高
大閤の先祖の墓ありとやかく言傳せて見る是ハ寶暦年中に江戸よ
年動の年年此所にて病没せられしんとで柏原を出て松下西の山下を
行くく東山の麓を一丁或ハ二丁ゆく其所に稲田乗畑に風景快き画
のやしたるの山際に在る人あまく集る居まで是ハ長濱より北関近の所にて
其辺の村々ハ多少若なく丈今十町計りゆて長久寺村に到る花所て

滋賀縣と岐阜縣の管轄堺に美濃と近江の寝物語りし故事なるよし
小さき堀を隔て継けたるハ今須宿にて大垣へハ六里程ありし事也
於此○岐阜縣今小寺利洋ハ此所になりたる故に其様何ともして言ふ
せるまでに作りし濃尾より出でさうしにけり後偶ハ不記作付有所之出書なり
於当参上り行りし池ヶ古書偶然出て角偶に付けたるを史ハ大垣に出でて持ちおれ
なり○ホ二十夕大垣りて乍小く田大垣藩の小泉迪といふ人を書き其父小泉
鉄心の麗齋翁に迪乃麗齋として書ハ洞くして居たりしを其ハ語に依て此るよし
徴ハ有名の人なるが此一行の紙に筆を書して其に興し成りし是大垣藩
の知事に仕へしるが地を作せり其子迪ハ幻形を与へ私に○
言る家次乃月立ちて待能の来氏が珠卉せる張橋図の大竹と自画
竹よ題しける詩の双幅を掛けたり来氏も亦杉字闇大帰題する蹟の
詩よ唐行ちて書を贈せしと聞て寫子題有らせして
一詩を贈せん事を云ふやがて筆を把て一詩を撰写し与へられ
たり　西竿大竹墨淋漓　壯幅宛然得意時　猶憶先生後名氏　云如

耐寒一枝　○今ホ二寸朝首に志紀在所に於て旧水戸藩の
中村栗園の妻の姻戚にと纏ふ是ハ萬く功労ありて賞典
とも得たりし人の此ふく也ろ学者なりとし　○是ら越前街道の木の本
紛に出づ日本に開通せし其の柳ヶ瀬の隧道より是は
本当街道の無りし又て立向て見へしよ道ハ狭かく迫し見え
りバ近江八濱に作利の道路ハ開通了り人ハ是なくて都に至る
なりんとし作り奈良ざさりしが思ひけるで俄に此隧道を柳瀬隧
たるとよたりしハ定めし道ハ隧道の方よしとまりし思ひ隧道
計なく柏原より間し汝阜縣よてそと道路橋梁ハ十分に修き
て能く出来居たり是を長濱の人よ聞くよ一昨夜にも既に村々
の人を出て隧道の柳ヶ瀬隧道の開通を今年中ありと説りしハ
高将の事く○近藤芳樹ハ天武天皇の御代不破の
関の御又関の古跡を穿鑿せんと関が原の或る山村に
至りて探訪せしが是でし思ふに拙くし云けるハ其

村山にて薬摘むべしと見ゆるにありて此薬は世俗の仙過老の為にこそ
なるの事にと問へんとするに我しる者くなるや彼が家の人は有るまじ
さるに何の事にのことを尋ね捜させ給ひしに世数ふくし何かは見るさき老少
と云ひてなりしに其人の先父が紹介にしく其ことく彼の精問へば仙過の候
なりしは無益の事にあらざりし事の評は行きて病も有く悩みもなかりしと
聞へたりしとか

三十八代
天智天皇 皇居 近江大津 在位十年
三十九代
天武天皇 寿年八 在位十五年 年六十五

御巡行の記巻之二

青木下手坂一町半程柏原驛を過ぎ三行りて二ツ瀬は岐阜縣管内に入らせ
玉ふ今須驛なり此峠を上り此路ハ山路なれども道路を広けたる方なく
路ハなだらかなる坂之迄し町の北方ハ東へ向く所又ありて中々坂道の所ろを登る坂
行り是を細ゆき少ハ山中村と名の如く山中なれども村ハ少しく人家
多りしと或ハ小く岸や(き)槻(タキ)のつらつらのうを業としたる水茶屋なり又見ゆる人
物も多く村の出口より是の坂の下三丁斗の所ニ新ニ三ツ又四り此を又過て
停瀧より右の方へ行ハ是ハ旅世ニ不破の関と云ふ海驛に至りて至る也上りて至るの傍に
菩提山の方ハ此より右へ行ハ今日の関屋なる所の跡又其氏の塚を越へ
て行く右の方字流れ下り此処東へ流る不破の関川行り是を若しゆき行く人ての矢の藤川
なりし事ハ是非と越えて又其氏の坂越なりけるより右に作く神社とく
遊行り是ハ世にいふ古も(ウブスナ)の廟(カミ)なり中にも坂を申ハ天武天皇と申あり
もとよりし天武天皇ハ天智天皇の皇太子なりしが位を譲らせ給ふ
皇子の御代にし大友の皇子と御中らず遂に坂を出で給ひて吉野に入り

ましして大友皇子松尾を経て鞍馬に至らんと落行玉ふを
天武天皇の軍して是まで大将を率ひ玉ひ来り玉ひ岩倉をさして
伊勢の邦より来りしが折と地蔵を念じ玉ふに三尊の御かけ穴被の郷
にて天険の地にて敵を防ぎ勝を決すべき處なりと見て
將く兵を引分て大友皇子の軍に勝ちて脱逃を
果させ玉ひし跡なり因て此所を地蔵の村とハ
深泥の池なるへし兵を伏て切りし方の人家の裏に穴被の里此辺
なりとて云れし方ハ何処にも地蔵を崇めて寺と云べく所を
思ふに昔ハ此辺迄西の方に山の峙ちたる様にて流るゝさまと
今の在家の辺まで見えたる陸の出る地なれども又ハ実なるへし北岩倉
又ハ寺など云様なる物もありしやも計り難し軍のハ板庇なりの
出る者がなかりしも何とも云ひかたし侍に例まで居る石碑を見るに
文政の比にや儒者大学頭林衡がさる文章あり北岩倉ハ大武
天皇の事を書て流罪東照公の寄り京会議の

事を天武天皇に比して鐵漿塚に書しあるものありハ今ハ其道標の
序に云寄りかりしなれハ昔ありしや計り難しの心にや其ハ実ハ京
洛の辺此所ハ古代行りし葬所なく平地の如き地形に
なれハ東の方の岩と半飛びやかなく多くの古人の中と覚き所
こそて見へきくりまた何とくし見る能はなかりし有名の處なりとて
中に大きなる清く町中に廣く家に立而し仍て古人の墓なる人あり
此方なるをのぞみて村に集まる百姓墳卯と見ゆるが多く云伝ふ
生まれる郡ならず驛の北方に在る録所とて道も見へず
行くと野なる村に田中地蔵あり東北なる家より道の西方に松並木
家々古人集り居るが実か京に書て中に利とき故村の男女
もて多し畑の中を過ぎ此道ハ流石狭く東の方に大垣村田への
一 道と行く方へ(東を)山に付て行く所ま山林の中に入られとし道ハ綾
つまさきあがりに廣く且平清く西方の樹木は此辺に古方岩見えて出
る男女も多く集り居るが何故と行…村と云へたり

付けハ姫にて平地に出づ長松村にて小休ありせ給ふ是迄ト東山の方は雲
深くして山の稲葉山を見給ふ北村の農家にて小休あり旅人も多し
荒川村を過ぎ枝村を出離れて西方を遥に見給ふは荒くして平野也
地にして山田の近稲と云ふ所に始めて行く方は西濃州の黄雲悉く見ゆ
百姓等の祝ひ居る体なり是を見給ふ大垣の入口静里村にて[illegible]
様の出迎多く並列して風様を迎へ奉る旅人の多き[illegible]
加州家中の人々晴がましく並べて大垣の町にて押し別る[illegible]
本陣にて御泊り遊ばせらる御本陣は竹島町の仮屋[illegible]
十月廿一日雨天御逗留遊ばさる
二十二日雨午前七時大垣より御出発遊ばせらる此所は旧は大垣の
藩主戸田氏[illegible]切労を尚せらる
楽として今須[illegible]天[illegible]市中し
混雑にて旅人も多く大垣の町[illegible]板[illegible]
月の[illegible]霧[illegible]不破の[illegible]

東より過ぎて[illegible]の山々東は稲葉山の[illegible]天[illegible]
つさまに只一[illegible]として[illegible]十町[illegible]の村[illegible]
大府[illegible]居久川の[illegible]と[illegible]居久村の馬[illegible]方[illegible]
小休[illegible]吏[illegible]呂[illegible]二[illegible]河[illegible]村の村[illegible]一方[illegible]
休[illegible]吏[illegible]又[illegible]長良川の[illegible]村にて[illegible]
[illegible]吏[illegible]村にて小休[illegible]吏[illegible]岐阜
[illegible]入[illegible]十[illegible]数[illegible]
[illegible]大[illegible]大[illegible]氏の[illegible]
[illegible]今日[illegible]天[illegible]
なり
[illegible]八[illegible]八[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]御通[illegible]

行かせ給ふ。吏は師範学校并に中学校へ臨御あらせ給ふ。其式は総て大輔
同じく書記官へ従ひ行かせ給ふ。吏は岩倉右大臣を始め名代として
名古屋裁判所岐阜支庁并に岐阜病院及び警察署医学校へ立寄らせ
しかるに此地は美濃国の中央に位して市街は甚だ狭く道三が居城し
稲葉山の東南に在りて後ろは山に接し東北は山脈にて連なり
西北は川を隔てゝ長良川に接し四方の便利宜しく人民も怜悧にて且勤倹なり
故に物産を出す事多く昔より諸侯の邸宅ありしと云へり大名の
領地なりしに海岸の港口なしといへども都会の地にして天下の
地とも定められ織田氏の霸業を成し豊臣氏の頃は此所に長良
が開通せし事も多く其後より長良の川を隔てゝ
川の船便もありて諸方より物産の集まる所となりて繁昌なり
中にも名高きは長良川の鵜飼にて其頃より今に至るまで
岩倉右大臣も此所を通行ありて手づから鮎を捕へ
にて此事を観覧ありて長良川の船を浮べて此の川
むかしより名高き鵜飼は長良川の上流にて稲葉山の背後より
下の方を流るゝ水の清く澄みたるが中にも此の鵜飼の漁は
王の舟を浮べて四方を眺め晴れ渡りたる空に月影の映る時
しかるに鵜飼の舟数艘を並べて篝火を焚き漁を始むる
鵜匠の舟は舳に篝を燃やし十艘ばかり一列に並びて舞ふ
たくさんの鵜を操りて舟の中より鵜の首に縄を付けて
そして鵜匠は声をかけて船を叩きて鵜を励まし
鵜を放ちて水に潜らせ鮎を捕へさせ十二羽の鵜に縄をつけ
それを手縄に取りて鵜匠は巧みに操りて鵜の鮎を呑むを見て
鵜の首を手繰り寄せて頭を押へて鮎を吐かしむるなり
を出だしてヒヨイと法く其様は又甚だ鵜を水の中に放ちて又潜
りて又鮎を捕へて鵜の様を見つゝ篝火の影は水に映じて其の光
又見物人は舟にて岸の方に集りて陸にも鵜の影を見つゝ
始めて見物の人々も大いに感じけり 此地の御巡幸は第一の壮

録之と高く入りあらへあてへこ寄らんまで不倒とりしより近衛家樹公も
の歌ハ（稲屋恋）むかし此海辺のかゞり火と見して鵜舩よとしいさまし
吟ひ之 鵜飼舟むかしながらの川水にかゞりもさし新たなりけん
或る人の方が富樫の家にみなの遊び楽しさんと云ふて短冊を乞ふ
出ませるよ公家の鵜ハ旅の間にあるとて云へしと申しへらまた今ハ湯女
皆見かねて吟詠せり
其より墨俣本宿にて汶阜の在所と申す事ありしより梅見人の多き
ことし此ちまたは市街をなし静なるの事は申すにぞ其道の者信よ
扇と人家ありて其家々の村より出て梅見人ハ送るをかく立並ぶなり
人我ハ中宿と見ゆるが多く婦人の客をかゝる飲食物をつぎなどしなぞ
つまど美女之へ志ぐげなる夜がらハ之組の茶道（裲襠）なりしと
ムツクリ起き出て来るまゝに立出でゝ古きの祭りを真の方知れべく
汶阜ト二分と申すして九府此公家の衆に立せぬるが若ぶ寄りて此所を
ありて少坂楽よ石段をせねハ與川総名ハ本郷川の北岸にて下ゆる

清濁の隔も水至て静かにして京道筋に面白し是ハ舟持の人家が新に送
りけるもしかく其ノ費ハ凡て富家の往来なるが故なれども行きて浄土真宗の信徒
なれば此処も御参りする頃も出て来ては世の中の本願寺御絶へ（専称寺）続きなり
より九府まで墨俣川を渡して出る此所より州股を隔てゝ信州よ登りて吸流を行く
尾州の海よ入る大河なり墨俣村木を伐り出して同方よ運漕となりし皆此川の
便よるると云へり之ハ船屋しなれども此所新に長さ三百余間の舟橋を
架け其の内にも入ハ宰領等の川船を並べて板橋を作りて公家の通を
渡しける橋は本郷の者より之を渡せハ隆保の出張所御方村より
御付せあらしく寶暦の頃の山崩を立めて又沖江の本堂（さゆあ）田間
の庄を申すまゝ付されたる十材木墨俣村の若衆等そのほか此所の人家
も多く一寸しる間の泥（こひり）多く梅見人ハ殺到して御持を右へ大道を
東へ是ゟよ渡くして馬宿村よ到り村の人家に宿借ることなく立て此辺
葉を添ら奉まる是ハ牧野村など村の中程よ酒屋柏木と云ひて
ある此の前よ浄衣宮ある祠堂が二へむなと立てる牧を見ゆずと眺め進てし

又例の江戸をも見わたし東南ハ尾を二十丁斗東北と西南北は陸峯なる
田野にて猿投山ハ高く東方に聳へ南宮ハ遠く西北のかたに遙なり此所より東へ
遠ざかりて本宮山の後に突兀として並び立ちたる峰ハ恵那山・御嶽など
里人の指ざすにまかせて見渡せば高山ハ皆雪を頂きて白雲かかり新くして十有余里
一の宮駅より美濃と尾張の境ハ相隔つる方にて小牧・犬山の辺より遥かに見えて猿投
戸数二千余戸ありて町は繁昌なる所也東方に有名なる諸人参詣する寺は
此処に出でたる大なる井戸は此地の名産也 是より南へ向ひて出で立ちたる
田の中に古道をゆくこと多地池村妙興寺村多加木村吉祥村法田村と
それより関を経て人家多き町なるに百余戸ありて見えたるは清須の町なりし
此所より地蔵ハ肥沃にして家居多く農家も多かりて下津村の
森部宿より北に出でて此処を過ぎて東へ出れバ二子山の道傍に
是より高畑村の大垣細工十二年との花ハ是ハ今代虎渓と肩を並べ
尾張名物の下なれど此地の小さき家にて是を上のにて高く出して人に挙げて名を世に
でハなく元来ハ海虎渓と肩を並べんとする心なるにや　六角堂村と云

川の辺をとる所ハ小方何村一場など云所をも通り過ぎて清洲より出でたる方ハ
西方戸部の小路なとて信長の比ハ名のある所ありて今ハ吏役の館なり地
ともて見えたるハ当所ハ林なり女子ハ此休所をしも見えて後もすこしくある男枝なき
池世より流れてある所を出て東南の方へ出て八ツ口村西福寺村と云所へ
古き地の新田なる道ハ当所にして天神を祭りし云ふ所にハ此休の丸と庭あり
是とも云ふ其新川と云ふを渡り過ぎて行ば当所ハ京の名古屋の入口にして枇杷島の
大小橋をを渡り八坂町江川町と東へ法蓮の前より境町を南へ東へ橋を渡りて
本町通りをまさに伝馬町橋町を過ぎて八丁ハ此処の御堂近く行当所ハ古渡町の西側
なる本願寺の別院にて午後なりけるが此処ハ参詣者多く今日名古屋の旅人
ハ又大垣より此所へ信しける所にて当所より尾州伊勢の土を参りて諸掛けるにて
出でたる者ハ何れの家にも此本堂の町内ハ東方へ入りて通り抜ける道の雑踏なり
是より愛知郡内にて春日井郡等を村の人民が地租との差によりて
此分の田畑を大分今日は此通りの年にて本所せんとて二三百余人程集まりし
地なるが林の内に集まりて云々の流れを除きて謹んで解散し何事なく半済せる

風軍なり

十六日午前府御出発と出発隆行せられ安濃縣令先導し奉りて
名古屋縣廳へ臨御行せられ更に大三區学校名古屋城内と云場へ入らせ
られ十七日ハ尾張以徳楽所々名古屋城郭ホ兵式御覧等ニ臨幸行らせて名
古屋法華上へ入らせ給ひ一天気ホ上らせ給ひ法森の鯱別を御覧へ給ふ
府下ホ御一泊ホ還幸ありて
十八日午前七時名古屋御在所を出発隆行せられ鎮台兵ハ兵大隊ら
知りし如ク御出発ホりし古渡町の所御より十陰町の間に並列して鹵簿を
送り奉る拝見人ハ相まぐ子さかふやかたのを交ゆ熱田の一社ホ臨の
行ありニの宮ハ旧跡ありと云所を南よ向く御車を進め給ひ松て宮駅
よ至らせ給ふ熱田の社へ御参拝行らせる大臨氷川新社御参拝の際よ
更ありに松て更よて御参拝行らせ給ひ更に鳴海ホ々御休ありら
供奉ハ古ざ兵前ホりれハ供奉の方ニ次第にし宮ざ所御紋次くぐ見ありし
ならべし今ハ道て共し遠くるしれとしくまで車し幌とを渡ひらぬ

鳴り行と見へとせバ桶狭間の古戦場を東海道名所図絵ホ細ハ交
ニ八積せさて高[illegible]ら堺川を渡りて三河の国よ入りて鹿(ちりう)[illegible]して池鯉鮒入る
[illegible]給ひて八橋の古跡ありと云所よ至り給ひて鳴海ホト東ハ地鯉
と共し高く古質と云ホ向ひ洪宝寺あり肥前なるバ池鯉鮒ホ
矢作(やはぎ)村より三河ハ殊よ濟せまで草木と繁茂せるで田畑ホ多く茂盛と
樽を作りて村ゞの人家ハ先ざきで北しそと汶西の勝田ホ岡崎迄の
間の風景と大抵同じ様なれ更に京ホホて行まり一宿て止り給ふ。

○又例の人柄を評
さればホ平の生涯
ホの人民なるべし

北朝 永和四
南朝 天授六
明治一迄一五百四年
本多美濃守
五万石

矢剣(はぎ)村ハ古さ駅なれば矢作川ホの岡崎の宿々繁昌よなりしより裏へしホや
矢剣川ハ出山実ホ流せ出く流く誠さ洪川く矢剣の橋ハ長サ百
二十間なく洪構千村之頃ハる橋へ是を渡りて岡崎駅よ至る松ホ之
城趾行ハ永和年中よ松平泰親とも云共の築きし所ホて其後鈔く全
家あしり慶長六年ホ本多氏の居城となりさ午前ホ先ホ古柏の
間よ白壁の城がチラりく見えて満ホ之頃なる城くしら今ハ石垣のを
残し鄰て松柳とすハ提けて薪となりしかるべし今ホ此世ハ丁令威(テイレイヰ)

り時代も遠く城郭ハ此の上迄ゞも人民ハ何の心く思ひ出の辰ハ相継いで好い
のが多く町との様に傳りしはさらく笑ひと泣きんとし千住と府下にある人
紛りに残り出し外との道傍にイ々と據る者あり人の修さ一方ならざりしを
千住大橋を架け御改築に付せらるゝ明治十八年橋成り伊勢へ出でゝ上
成りし渡し船の舟に架け井上氏を御出迎へありて上給ふ候
吉川木村の東京府の豊橋の竣成にて千住大橋改築の浅草を経て
出立の日迄下にある川との柏木の者なりせし（柏木の二百年前の改築にて之）
うちが御座候四五年前の御改築）ともや夜をとをりて明け渡る経に
渡しの折ハ出来之と如何に市中の遠くの船に此氏の多く豊川の
水ぐさまさりしは此千住ハ大雨にて洪水となり千住
三府下の大橋の中程に三十間斗の間を押し切り流しより先刻維新の出張
が四つの人力車で出張（明治十年）して来る途さが大方その
車でいふならばと人に聞きけし圃つき車係しも橋ハ仮橋
をとあり後がまさりとふ事ことけさ御改築の係り留りて十三十二年有り

それないとのざし詳しく思ひ出す千住七時頃明治十年に二十の白髪の昔話
の洪水の事を大川橋吾妻橋と初め御改築と度々橋く流れ失せ長い立
と従来の木橋も薪く流させて之が為に人も無くなりて今日をして聞き磯
就の紐をも解きて手を出し様よ申す渡ればよき者ならずなど今
ぜらるゝも好い、女の様に流しなど聞くへら様子が来たる会が何にて私しの話に
なりと謹んでじやしつくなりへし大臣も行く渡らずと言ふ大輔を始め
粋なる其ハ未だ明治十年に集り出づる内務省の官吏なれども今頃
九府とある上の御改築の御取計らひ総監にも豊橋より道も八里程
なり八十歩して近く三十乃至今日の御新築にハ完成を行ふ者なりけれど
大河ならば一日の内に仮橋を架けるやうにハ完成なりし旅の渡しまで
らうかあるまじきとて再ひて風に従せる樹の様に去て再び人の来る者なる者
いはずもの静かなりと心易く思ひ出しぞ此処橋へ来りし人ハ市中
ただ々二年らの如くなりしはしれも迷ひふとなく初めハ御改築なりしと
聞て漸く何れにか流されし今りハ頼もしき者とかは進て去りし情し

行く末もなし
十月廿九日東都駿府信濃よりの状に洪水の有之趣は前々の雨にて大川を
平日よりハ水四五尺まさり居たる處晦日午後よりは大雨と成り車軸
の如き雨が盆を覆へすが如くに篠を乱して降り続き夜の十時過ぎ
より止んせず夜ハ家との川より出水し夜中に至りて川ハ深さを信州
の山間より流れ来る長河の水ハ十時過より果して溢れて忽ちに平地
より凡そ一丈二三尺に此洪水しかも其勢ひ百万の猛威を一気に押流
を捲へて走り過ぎしが如くなるみぎり川上より流れ来る材木や竹の筏など
ハ悉く皆押流されてもはやなく橋の如きも定まる所なく流れ去り
今や八幡宮の前も此橋と倶に流れ去りて樹木の葉まで流れ行くハ悲しむべき今
朝午前二時頃より忽ちに減りくて年て中程より急に水引くに随ひ
凡そ三尺計り減り来りし處橋梁ハ吉田城の近所まで流れ去り大洞氏
の居城なる辺ハ流水に堤防なる漸く人々の心を安堵して居ると云ふ人々の
沖の保善を始め居りたる時某日此橋にて此の橋が落ちしと
為なる天此線もやかましく沼さへ多くして行くが如く又かくて流し措く
ほどなく嶮岨にて危険なる決定して出来る橋梁と云ひ是信州
川上流に在り其の首府に近き者にて駒せんと大臣其の宿舎
の指図を受けて出張して其の沿岸の郡村へ出入せしの謂
保存の為に着せるも丈夫の電信をなし居る諸君の此の為に帰りし
其の橋ハ東を離れて未だ見ず子で十時の電線の壊れ四日余
汽車線ハ相違なく隣の方の仮橋を造り直しに渡る事の順に至りて
少なくも日々平常の如くに往来し沿岸の村々の出張者に
決して安心なりといふ二十九日ハ長橋にて汽車の半ばにて止まりし○右岸沿岸
の郡村の知県の士族田辺氏へ云ふ文如雲の者実行者も多く
如雲ハ出て郡の傍に勤労せし者なりとされど又盛岡令と云ふへ留
の羽二重を贈りしに先ハ学校を人に渡し方の役にて多く人費を
出しくれたりと又○俄かに長橋の如く一日にて清掃なりし所ハ人に報せ
追て其後の災害見えて出掛けたる人ハ何か又飛田氏ハ失敗の橋を渡し

て天晴に使へなさんとて例の地図の写しを携へて出掛く
今東京なる人ハ是より清洲に参りし小牧へ御入城ありし古跡地なる出張の愛知県川寺勝川
齋藤氏を始め長谷部園正一位等の城主歳の一時の中入りき城積年久しく何年
連尺学校へ臨御を願ひまつらんとて大書記官をもて上申しけれども
万機多端なれバ臨幸ハ止せられて右大臣岩倉公が御代覧なり
為させ給ふを法令をもて午後一時頃よりまた御用ありしかバ直ちに出かけさき
参議公卿の御方々ハ市外を出て遊覧の御方々等より学校をご出覧
あるべきよしの事なりしハ右大臣公も御代覧の式を用ひ給ハて臨幸たりて
人力車にて立還りて大隈参議・海軍大輔・宮内卿・大丞林内務少輔其外の
御方々も共に午後一時頃連尺学校へならせらる 教員ハ生徒を率ゐて門を
出でて迎へ奉り 御出座ありて多くの生徒の内ハ優等と云ふ人等を呼出され 讀書
など御聞に入れ 史ハ畔柳昌平郎とて十七歳の者 地ハ明治日本史略を講じ 暗
算ハ三輪惣太郎と云十五才の者 ハ日本略史を講じ 一天野豊三郎ハ物理学を講
じ何れも生徒らしく出来たりけれバ岩倉公ハ副参事勝川寛太郎を通じて御賞詞ありて

是より引かれて学校生徒の試業をご覧ありて後又も校生徒の出でたるは清洲の
他縣より帰るべき者かり其外は又まるなくとの筈にありしが愛知県の御
仰せ下しけるにや 共に行くべき者と定められしが 然るに其年の二月の
行幸もなく 是より参議公園を御遊覧ありて 是ハ大久保氏の
御行く今ハ天守閣其外矢倉城門なとの石垣ならでハ見る可き物なくして
やゝ荒れハ其外の庭園の名残りなく 京を出し清洲の晴を御見物あらせ
出で給ふ又寛年の社ハ一宮たり是ハ清洲の家康公とも云へる者を祭りしる
この人し其館を見物ありし所に 家康公の生まれた井戸と云ふも見
よ御歩き給ふ 御門を出て 地の何りや其城の御菩提寺と云ふ寺に大いなる石
地蔵ありしを見て 開山の云ふ人ありて 一夫を立て これを建て
車に乗りて御出まし 大いなるもの 之を安置せし 其後の三代
升ほど高さ八尺の其年の建築院ありし其高さ一丈余の仏像の石地蔵を始
めり 是は本堂の前の住持が修して安置せしと 大隈公ハ
長葉園正宮を左にて拝ありて霊験ありとも見えざる 中ノ間眼ハ此に来まダ

御殿ニ見えてしかも其寺持と云ハ無く堂ぞ行ハ大さかる佛像なるハ手續等
見物ニ来る人も多く随て加番ノ錦絵出行らし往傍尤賑ひ居りしなを見え
し此世界大伝行って主人之を基督教ニし此節ハあり○八日午後府
江戸や平川の倉父(オヤヂ)が吉ひたる郷政府ニ香橙子ト云と世華共ニ行
金て銭(ゼニ)ガ天子様ハニてニ此所ヲリイのウト云ひつ入らんとてるを陪席の
巡査ガ押し留め倉父ハ相変らぬ気色で其子孫まで悪しく居るが
東ビ又馬稿寺(紀念示)の勝ニ見ニ入り来り見物で天子様へ此所及さ
おさ行し役員と前出しぞで居合せる者が何ニ人とく是非伝年
の室自由ニ知らゆき記出しるを見て必行し其筋へ何ハ生るが其筑の中ニ
経冊普段行ハ引上げて見るに「四方の海皆同胞」と書きし御主の君が
御代ヲ困学ニかつ分れ」と御ぞ自ら書きつけるハ必ず御九位代の有
難りき恩を感ずる事なり出る成りべし猶し敵とハ一切見せさせ
ちや此所何なれハ世界と大将位に出ずとべし見とぞハ大臣ニなりん何処の
行と云者ハで村不姓名とよく穿鑿べしとか付し造るぞと云ひて

見るヨハヤ何事へハ深き子の行人と之知らるで○明日ハ老夫待の催ニ参
云ハ往生ニ名ヲ合スル事ト生延行らしくとで御通称の言ハ東島長将写ハ
申しきを云ハれで供者の女共土地を返りめくをど御光名行ハべき女史宗之
前様ハ舟ニて御之べしとのことニ縣吏と宮内省ニて行柄出ズて出迎し
行りきりむし此辺驛の役所ハ人力車ニ長将其外ニく迎ニてあるよし
十月二十日午前八時ニ出張り立而と御發輦行らせられ芝川の如く此山休
ありシ所が菊坂ニく此宮へ会を行ひ上御酒を賜りし青梅川よ来るハ此の稿際
ニ新宿ニて捨念りし又此の松の盆向の行列行ひ橋を渡りて此府村とある町
済むく左有橋の日之手が此奥様行ひしハ手づの宿屋と一丁まぐ日脚(ヒアシ)
し言ふ所ハとて大隈氏ニ係る松云共所の内方ニてハ当所の百花園と云
と云園ニ此庭出行りぬるらしかが此ハ室ニて秋ニ来の末枯かる趣覚盛(メデ)
なる人留ごる世ニ聞へし浚ぎ小蕪と云ふ画師ハ此写等ニ住せし
扨て彼の此縣の大名ニく切出居ちこる堂庵ハ其頁弐千枚の外川水泳ぐ
滅りしる之付住年併を多く庭ニ本数大工を大勢出して夜中かけて楽債を

気さし故ハ年前本陣にハ予まく出来もり此道程ハ少なく文なきを知ると
しま思りしそ今日の此處吾前にて此地なりしされハ路次の足も力もと旅に人
氏の背れハ皆し一方ならぬをつとむ又皆を感し人々もいさくり
吉田宿本陣にて本陣宿ハ伴藤甚兵衛方に着ける此處ハ古くより
と称して大河内氏の城下なるが戸数三千余り大城の地廣
く繁昌して此方の運漕ハ便利なれば商業も盛なる人口町並も立並びて
妓楼をも並べり俗に云く吉田通れバ二階から招く鹿の子(カノコ)の振
袖(テガ)がと人の謂ハまさしく今日ハ二階から招く振袖も見えざれども猶其
名残(ナゴリ)の波跡なりしく見ゆる處ありて遊女を抱へ置けりし此道より
ごくドヤと押出し嶽の上に米天ひさまに出て青き嵐を
折並べ此夜の宿貴比ありやと見しさてと出て此海程を指し
暮らきいとなみけなりや扨て此驛を出離れ宿の板ハかのくと同じ
海より東へ一里半許行て飯村と云處の東に寺ある山の絶頂に岩窟
の数多とて大きなる洞窟の佛像を立てるが左右より雲に見えそ続く

又此邑ハ明和年中に飢饉の共が御て之る其の史職の物ども其洞縁の立
ちくる大岩の下に村をなして長寿の人年の永縁え一大年二百年に餘る絵巻が
此處の庭にしる此の縁起ハり元の路ハ此山の上を通りて坂を東におりる
をとる此観音堂を通りて大岩村へ出る所を新居を附ちにまハ此信心の
地方ハ之寄りて此村行くまでせる大岩村とて是ハ二川驛之出家の杉坂
植ゑし方より此休所ハ史なく僅く田間の道を行て又漸くして又立之より
道ておかりて後しハら坂路を二百餘歩にして此坂ハ元白き磨もに家来
も甚多の家并立し道の両方ハ高くして山家にて空の上へ多く生えてる松の
東西にて道少し伝来此地方の洞の事をや入られんと見て此坂をのぼりゐる
家に入家并と言ハ篠原と云處にて此茶屋方にて此休所ハ史なく又此
ありける處に小さき溝川あり是を堺川と云三河と遠州との堺くり同の例に
愛知郡と静岡郡の境橋ありし此堺より立並びて此辺を遠へ来
出り史々又東の坂を上るハ白須賀の坂へ是なくして浦橋の方にて此小
休所ハ此辺を南に出て稍く行きハ潮見坂とて東より五丁餘の坂にて上り頭に

必ずゆるさる事を一時より発して車のかへさに発るの如し　其舞よりの末ハ海き
小く京之浜よ面白し其景色を見る時ハ今の事に移して其上ハ白浪を
津浪のくぶ浅き処ハ今の事也へ移しく前し白浪の渡く
云ありしと其景色や是ハ海辺の村を東の方へ行末ハ浪花付く宮師
云ハ花の方よ浅きく云ふ其さ是のく京よ先表の是る京色写く
古人の奇を数多有る如く深き紅組くが推常し二人で若狭女を寛ふ
てふざけくと云橋本の様也其景色し　よしふれじしえんな古跡ハ其さ
又ど風鐘ハ十府也新井の様よ先せ也三条を下し上りはふ新井武平
方なり
古日宇多新居かく三条を下りより云史よち浜名の海を渡りせよふ
大井坂ハ浜名新居へ造り来ていときうくなる風形にく紅色の幔幕
を打ち中央に小府を建く御高札を振く着りよう稀かく海せかふや
川渡あるく用意しより船て濃き出てうるに京色いとよし是目浅きを出し
て浅方とうくよ方舟の須よりう伊奈狭細也などと云名所の行く所もこゆ

柳井湖若し浜名ハ年六月十日の浪水にて外海堺なる陸地を打ち断り
湖水の入口となりしより今ハ淡水湖ハ此ざれし今ハ又其の名まで
改むべきよあるが矣ちり遠津淡海と云なるへし年歳十府まるも
よ前坂の湊よ近きくる地ふしよ跡より来る船く浜名の馬と云を一志
載て濃き浮りしが御行しうりくん馬ハ板毛を踏を取りて海の中よ
入りうりしが此を浅りうく船ハ馬下りし川扱んで身を掛ずしるよ馬ハ
身を痛めして船よ飛入らんしまる折ふよ又荒毛を踏ますして今の歌ハ
写し前海と海の底よ沈みこうりくてアハヤと跨く内よ前のも起きより
馬し浮き出て渡りつく陸地よ上ると前のハ浜也つきて妻とうつ事を
なぐよ川て行きぬこし其海が今其し深くるもしが馬を人し兇り
なんとて人の濃く金くう其様なくハ字段傳ふ前方小て此体行の其様ハ
え又り是田又き外なりが近比新本の船渡荒くしより其底と無るも状
なくさしへ物を冷浅よ扇し市街と共き浮瀬く且舟流此人家ハ其の
三筋ハなりど他本と其し実なる板よミりくハ行く旅あるや又ハ漢元など

ハ昔船ごとの山やへわかれど若しハ離決しさらしも先行羽兵の道筋なりき
云此の海路は絶ぬし離決の京と云所も亦今は小島ハ聊しもちろハ山して
西ハ海の渚に近し御名綱尾のうぐひハいとしう愛らし白き山のと有て岩
の様ひろく似てる其間に雲ら多く生ひ添りて塩風指などさわぐ也又やし
の華比茂と云ろく生えゆり漁人沙家などのすみかや在りんさうとしてうを
こ是ハ言余年の昔しと今比は有租し塩屋遺ひしなき様に但来と行き聊
京と云ハ是しものハ今ハ良田となりけり是ハ浜島と言ひ年の日ハ先行
羽兵の言ひ伝ふめく洲のを行りて人を営りかく事しいぐりて鉄塁ても
洲地ハ家島らし化物ともからさしとえて徧とよく実のり畑に作り云物も
よくそ出来るり浜島に来さ村々ハ農家の家居し浅かるも蒼角桃の作り
くく強てき巧く人物ハ中宮太る女も都人にも出くる共ハ至て女なりし浜島非ハ
入日ハ只勝を報ひる男女あるく出流して風雅を専ら奉して年始所
申浜浦島に古大聲約並前ハ神女い貴の書を経りく斯限ハ至て井上氏の
旧跡ありて人家之多し新旧に編り大解かれハ中と挟い所て旅ぎ一抗云之右是ム

と述べられんとせまりしく○是僑の行く市へ至たへつくし松葉を飽ひ入来て柏らむ
天の旅へ上けくわるてさ茂しけり又ハ云刑堤浦部宇頭金屋村の中桃渓羽
ヒと云所は山く茶の経の給ふ萬色の古股引とそへき腰に瓢箪を付け茂也
○今日金京明岩来路ハ者偶を只仲村お御宗衣久兵衛ハ少炭何行て来らり
少頃お相く征伍の徳酒を偶けりしや
十月十一日晴未年前八時浜島行く出市と定め撃ち行くせと至中野村より出
西京と東京の中央にくもどちら○此間里数ふるよし井守と金京間
茂と云共何りく父の志を継ぎ。天龍川治水の事に尽く而力を尽と費し
村又而首の所を立ら私養り掃ひ代々云治家の身代を川家僑と聞込
来て大いに世の為ふ公益を興しらる者特へ行りし者世多より山仕の方へ
大の明宮来文政を本前又応なしく補僑を語らしての風宇行く添
員わが作りすらとくし里人の行りく余る毎人と聞きぬ天龍川ハ元と旅をし
しぐ通る所松浦と架け長さ云首四十間余りと云川中ハ世多く流り橋を
数多なく作し都ぐ長き橋ハ未ぐ作りぎりしき川の吾卯の山仕の者行りハ

小夜中山にて憩せし茶屋の主は伎芸なりとて、新田義貞が船田入道の古筆
なりとて人しらぬ珍らしき事なりけれは、抱きて見しか、更に珍しく、田舎の道を急ぎ
坂を上りて中山を出て、玄人間の岩あり、と渡りて、さき方くに昔しを言
の國府あり、ここは是ぞ去りて、旅を急ぐて、間もなく、下の坂を下りは見付
駅にて、戸数凡そ百五十軒にて、不思議を拾く、探ぬれり、并村の植村新田
小夜ノ食邑より二百五十軒にて、袋井駅に入口なり、川井村の一本三百間にて
此出体某寺にて、東は高天神の方へ、手板に掛川の城の見えたり、又路く
過ぎて、御府宿に出て、物騒の宿に至る、続きて茶屋は土佐、千二百（西蔭）とて
豪商之某家は之に古田氏の旧城にて、戸数凡そ三百軒之商賣切へり
相見へし、某大く、夜に成て、松提灯之跡へを見上、北陸道邦の如何なる
山旅にて、之を見ば、土藩を拍わ、頼は日の丸の紋、つきこり、彩提灯を出さざる
京へ入なりけるが、掛川にて、其所迄にて、まで潤へざりしかや
二月午前七時、二里は掛川駅、出立しし山茶屋、行せしる人の見る思ひの外に
一天公家は之、此方の方にて、今夜は深田の如くなりけると来る々の

長髪の人夫が側に捏し、これは小夜の中山の飴の餅にて、粘り強き此法の功力こ
其茶店に腰掛て見て、是て見くへば、飴色なり、九州より旅路を辿りし、此ぞ大津の宿
方にて、此小休所より、佐夜の中山にて、二百五十間、近き険路なれば
某家にて、小夜中山の名物（さやせんべい）とて、佐夜の中山にて、雲取て昔話を聞り
旅の御駕籠の人夫の手にて、坂路を越ささせし、左坂と云へど、頗る
東海道なれば、道幅も広く、凸凹もなく、なれば、来りて、島田辺まで見え
して、御菓子を納め奉り、佐夜の中山にては、館の傍なる、小泉左兵衛
方にて小休所、某家の奥座敷より見渡せは、西北の方へ高き山あり、何て
此勝景を尋ねしに、此の山を見下ろす、昔は無間寺とて、近所に寺
ありし由、某寺の無間の鐘と云ふ、その俗伝ありて、遠く臨むなるを
聖王人は眺望なり、あれば忘れずざりしや、又々山を下り来りて、菊川なり
戸数百五十軒にて、間の宿なれば、見くるしげなる民家の、土藩を
出して、彩提灯を掲げし、此菊川駅の名所なるや、宮人知りけれ
とて、遠くの幕府の、その辺り備へたる事なり、此所なれば、茶樹なきの続くる

あはれなるもの語りを菊川の流れにて他のそばちけたるを
丈ケ又橋を渡りて二三丁行て山を越りて牧の原と云山村より出る世村の名也
らし左る方の方へ登る路行り其名を小夜の中山と云峰の東に続く榛の原に古戦場
と云地武田と徳川の戦争此所なるとか世葉丈ケ東へ下りける処の金谷臺
とて見晴しよき所にて此所を立行り世に名高き重宕の右なる大井川を
眼下に見わたし左さに駿河の山々を一目に見渡して京の方を見るさき然なり
是より山を下り行しく金谷宿の山田谷に至る方にくし此小休行り世様にして
國路と掲ける旅人各々之を見て丈ケ大井川を渡し世に世川は川幅十三町
斗有りて秋頃落合の中に川瀬六ツより七ツにも流れて仮橋を六ツ架ケ
有り其外は生涯二度に登りて渡りしとも此所は度せまして寺
ごろ駿河の島田宿より来せり云秋頃年々方のく此島金谷行り府の宿也
立行りて青島村の榜田若方山にて又此小休行り丈ケ年程此村ころ旅校鉄
又此安楼より行せる絵出す八幡宮の年宮前の事ん ○島田より旅校丘の間代
京の方へもうよ東者は府年なる島田の京の方く橋となく寄り有名

八三町の張殿を便りき山行りて登るくは頂にて先づ景色細しく少くして茶
を植付られたる年小茶の出殿小屋にて古代の生活は自らと冷濃(サビ)しとも
道端の人家を見れば家々も又共に少き所なる所に至るは世(ナイ)さき
茅屋に少く屋上の草さへなきとの共なりし所見人に少くして人ぶ
概して此宿の下にかく訪まに旅人にさし茶樹の生育は利しく二三名を
近るよれくり且婦女の此従(ジュウ)業を見るにチラホラ東京り旅の波紋し見るを覚
ゆ ○云ん京はより濱名の湖を渡らせ給ひける折に御船に付ひて詠みて
奉りし歌
大君の御ため漕ぐ日は浪風のあらふの浜の夜のなけくそり　高橋正風
世情や伊予情風の日にて湖上(コヨ)の風景と世上たく面白かりけれは　自らを
志しうち眺めさせられ此所を遠見へし(ヘ)此所しましくる所に御船を浮く
船の水(カコ)もまた船を漕ぐことも多くなる如く引網(ヒキツナ)に寄りて見へ人々は右大
臣殿人とかやの給ひく
んいかにも急げあるめの御ものしける日浪を数へつくまつ

と信ともなく今おもふ川原のうへにて洗ひて見えなむぞ人々この歌此流
八月は足ゆゑ水まさしく盛せしなれりあまふくなどとなひつる事かさ
今まで書よ又澄此歌を見れバ其六勝れ所ハて人とのとて笑ひ給ふ
言上七開しぬて笑ひせ玉ひ今よとり好く開けバ此水る其の名の極
見えしハ此峰其外の洞及猿の出でしもあまくぎ前坂の所く洞り出ざり
ければ今して濡ざりけるかなりしとや

辛六級

十一月十六日発七日旅立紀其所を出発峰けせる此處ぬ中に大縣山で
入日ト出づと事を仕りおるべし此を出離れて東の方見る所八幡の境内
なるぞ云る所ハ佐渡の中山と字津の山との間にて十里四方計の平野
なる所々ゑ遥下々に居住の人家をところに然る事村にし大権現へ
参え申ふしき岸峰の小家のとなりし人物とおりよつてそ往し橋川
を渡り程く行かば円谷村の内なり此處ト少曲りて田間の其並木
所の道を行つて左り句を見まへ小山の山裾の木間よ見越次の町
橋が共しこれ先刻に西南より見へて来りし一座の横山へ忽ち戦ドて

馬の外の方よ行り是ハ宗像の山ト東南よ及ぐさる山脈にて其さ及負かく
越さ行り東の道よ面白く此海峰の道所より松眺る事十町斗これ
しるし今より八大長谷なる也八入てとの開くところつもり千代万世を
祝し奉る心せしそはおりし此山のさま坂の下る胡目乱のうらく
さし渡り其八田面よおち雑き稲穂の露を濡らさ大小の名も見へり
めるを渡へて岩つわくるが如く山本氏一村落より立出る胡餅の蝶
小と字津の宮氏古事さ之其逢て見ゆる本の松六八年編る其れ社
寺に小さなりける出部次の八月谷町の松山真本三方そて小休み
然て左とけら行りて小川を掛る橋を渡り此より東よおしてて山並の間よ入り
るふ光景の並木ありて道をけぶり云風気今さとして其の入るかるの
路傍行るよ人家なり漸く過曲り一て遊り坂下と云處よ至り見るら
宇津谷ハ一面小萱の細き道沢く山の高西より東北の方から激しき坂
よなりて今の道にて有名なる難所しり近は彼の松山其家の伝
延名其所数名の有志統り拡張して此山を隧道を開鑿せしハ里程

大よそく謂うを坂と名付くなりこれは大に旅人の辛苦を救ひ且は東海道
中山道数多の云部を潮より今日の行者に此洞を通る
行かせる故其洞道の入口は坂を少しも登る事なく行く坂は左右に出る
して険しからぬ洞の事と成るさ大なる洞の入口は小さき所より気深き
此所を後ろにして出なき此所を流る幸なる前なる小流との廻
は蔦楓など此所の此谷に色づき流る紅葉の色添うて折りは
言語にして面白く敷見あらせられる借しの内方こし左右に飾る此
言の葉の種とや成りけん ○ 織や叢の時より長く生ひ茂りて
人々は往来する道に蔦かづらの言の葉しては数も無く皆ここ此代の例
少しいかにしかも長閑な景色の里をも見て見えれば此所は山より
此山は昔より山を掘り巧の削りをなせる山と云ひしとされしと
昔しより風景面白き所にて殊に今に此大長寺は此山に清浄を極め
ひんとは此寺の山道なれうて少し美にと人の思ふ少しことなれば能く
山眺めて紅葉の頃の美しくて見えて実に文殊楼にも劣らぬ

又入口より洞穴の内は日の光も無くて暗けれども多く坂にて
連なりて道を照らしつ此所の人こしも穴ありて穴さやけれども
やさしく隧道の此代は出来て宗緑の石川右京方にて此体にて
見より又此る事にて石鏡させ出でて東の方に向かせる矢の沢茶屋
なりと云村より宗緑の山に掘りて山を山の方なれども此は車坂と云門の
水書家氏生風は其子の事此軌る筆に和して万歳を祝ふが如し此は
今日の此頃の詩は（山洞蔦蔵声）とかや掘りまでして此所にも詩の名を
奏せられ横田流俳方にて此体にて見よれは又例の茂りかる年と人の
なりて復して後ともに此所にて此紙の古沢を見て
らせられ年新
此所はとして駿河府中と帰く文駿府して云ひし
安部郡の阿陰の事ありし
川氏と此府と此所に
榮華の城市の如く今日は儀衛をも称し着らんと町その

尾張名古屋抔の大様に比し男女の風俗に係りし所も少しく異なると見ゆる人
柄も宜しく見えたり○今日は英舞会なりて京を始め倶楽部の貴顕一同知恩院に
参集行はれて 天長節の賀宴を開く事に 勅任官は此席にて盛宴を張り
奏任以下は知恩院の内庭に待たる三千有余の国旗を繞りて酒肴を賜り判任
以下の人々は各酒饌料を下賜せらる天長節は宴会を開き国民を祝し事をば是等
知恩院の此辺の事なりへ倶楽部の有様盛なり是等は各人今日の此の佳節
を祝せられたり
今日午前八時より静岡動物へ臨時行幸あらせ給ひ夫より把紙陳列所並に当所へ御寄附
て公立商品陳列場へ臨御行は夫より京都府裁判所へ臨御行幸あり裁判の体
裁判を叡覧に供せられ夫より静岡山の公園に於て奉迎行はれて清凉院の庭
於て供奉の高等官へ酒肴を賜わる可き筈なりしが雨天に付公園へは
出御遊ばされず更に御所の園内陳列所の廻廊に陳列し並べたる古代の
珍物並に和洋の書画幅等は御覧ありし事を其き撰みて知恩院へ献上し
天覧に供へ奉りしと云ふ事其間に於て京都府より大宮村の陳列等を記

と云ふべき品はなかりしが其中にて陳列所の寄附せし黄金の
鯱は名古屋城天守の下と申物にて画例の下に飾りて京阪と一方見るを押せず
蟹は天守閣天地像を現はし又家康公の初めて一見として三河在城の頃の紀府
箱と云物なり其間に天守と見ゆる本願寺の宝物中に桜の蒔絵にて紀州の
桐の紋所なり陳列品は天守閣より出たる物にて其所存の品なりし其
上にての珍品十六品にて見物人にて陳列されたる由なく壮麗なりし今日陳列所に
より高財の品なり抑京都大宮の陳列所なり
当午前八時頃より出京して寄贈を寄附せし頃に当り降りに降る雨もいと深く
やうやう雨も止みて雲の晴れ間に滋賀府の町を出て辞去して安楽村松本村などに
至る松並木の続ける道を東北に向く行きて風と向きに進むに雲の晴れ
間に富士の山いと高う見えて高嶺の白雪は雲く朝日に映じて目
ざましき眺めを東京にて見るより近かくして殊に美しく見ゆる
画家なりせば描かせたらん筆にても彩らむと思ふ程なりし 道すがら
車の間より眺めつゝ詠じて興を催しとて灰に雨て写し甚く

名にし　きよみかたの山家まで隔けくるえに朝日かゝやく富士のしら雪

又右大臣の御歌とて

見わたせはいつしか花も咲にけりかくあらく富士のね

と起せしとなん　此所より東は山多く平原にて稲田潤くらし又山

いとあつく道に沿ひて長く頂より麓に畑を開墾して大根菜麦等なと

作れり　東京と云は何も東なる南に見え

山脈なる山のまつ道なりまた爪先也の坂あまり程なく国吉田村の

稲荷ある方より此山休行り草薙村の近此右の方に草薙の神社の鳥居

あり是は昔し日本武尊と云人が東夷を欽させし富士の裾野にて賊

草に火を付しまゐらせしに大きにお苑御をせしまゐらせて伊勢の伯母倭姫より賜はりし

宝剣を抜いて草を薙き払ひ漸く命からくて逃来しまゐらせて云所也と

名を指の名に指くる老人の物語りし笑し夜は闇さくらまつに池を見たり

爪先行りの道を東に見つゝ東枝村と云るにて夜は江尻の山家に泊此

方に道へ京多維に西北し　十時過りに江尻なる宿に着せり山野村辺に方に

て此山休行りせしる世話を渡りて長き町ありく人家まて立並へ波を出る東山

の方より少し海見より橋の上より東とふる人家地方に近来の方より清海を隔てゝ

三保の松原は東京地図に見えし所にて前面を見れは一山の見ゆる所あり

横たり蜿々として海に突出て来るは其山此方面に青葉日緑行りて緑樹

緑葉の間より十余りくらゆるものは清見寺なる横砂村とまてさ波の奥川

（是を隅田川と云よし）彦信は此を前に行りしを渡りて漸く行方は字を寺

下と云所行り是その清見寺の下ありく西海浜の入口にて十時頃清見寺に着

差繁行りて午餐を取ひてる茶菓は山海の類を揃けるか如く実に東海

の名区ありく前は西津の浦に臨て漸くとして大湖の如く三保の松原は

長く水中に浮んで風帆漁舟其間に往来し富士の高根は入江を隔て高く

雲中に実に乃至り東は足柄函根の山脈連りて東南に向けて伊豆の一大頭山に

続きて終りに海を隔てゝ左対持し此海辺の眺を成せり 掛る絶景なれは

昔年安房守氏綱の此寺に遊覧でも此寺に此山休行りせしまゐらし由　爰に此荘

厳は中に名ある池庭清潔にして寺中と宗自から進む行り　すゑて深く感

させる事なく勝て此羅漢の竹から寺院より定林の奥を語らひ給ふ盛栽
ありて此家に帯びたり小林は孫に此事を語りしに其の紀若く打ち立て
此佐出ける也傍に之の御手百五十歳と記せるを得らるべからず但其の由来
ありし時文に綴りて或は渡海を禁ずる者ありて得たる折例
なきにしも世事とは行平卿の歌の思ひ寄り寺例によりし多く得は
あらしからずなど皆ある人にて何しもよりこ十丁斗にて其河内に出る青濤を渡
りて和泉村と云ふ家の海辺をとる由なる麓塩山の事をとる岩は剣を立てたるがごとく
其所ゆゑ此の岸より西へ向ひて生ひたり若き松などあり遠く眺めたる所なり宗也
ら旧の所は此家の三河川を渡りて同村より麓塩浜の松を眺めし所に近く
海瀬に新たなる流れに浜の家の流れが其名に和泉の銀銀を見るれたる
此逆藤の先より右を御代に祈り給ふ太刀代の大小湯挿みてはるか海邊の秋
泉より上へ出る海辺より御殿のよそほひて丈姫様葛形などと云ふ輪路比
あるい山や芦しき見えし花とある花雲などを見ゆるに並び立てる松の様なる
東の方に当りて国々に此海に打出たる旧所跡の麓なりと覚えしき松ども山の中腹

又今とは此辺の事也いまだ和泉倉浜の入江より旧きのかりはと今を此家の旧家
七(稲屋)方向く此体行くとも杉柄村在家の桜千の右が浜の海の其家
少く此辺は漁業をかへて世を渡る其の傍に家なきをも漁く浜を見せず世をば
忽ち一人の翁が海を見やりて大きなる網を取りあげて捧げくるよ
珍しと思ひてよく家をも浜にて世を見るもしても浦へ漁ひて見るに出たる大石
多かりしが鳥居もある世をかけてかれども多かりけん西の山をも浜に出づる海浜の此
なきとは今の世にて女などもかくてれ姫君ても宮崎の母なれ浦の此る宿千人来りつくしか
立並びく此海辺を挙げて来て浜の其此入江に東町屋西 神浜なども云
西行川を渡りて東と此北と云也 由比が浜の方なく此体行く所に丈に堀村
中村小舎村は農家浜辺に出て所に町なりとて地元の旅人の蘭とて出家
も冷淡にしては世の中の蒲原沢は其所に矢張山より流るる海岸の小休なり
羅斗に出る世たりける身もあり旧家なり俗称に ○波耳に此駐繋此辺
南に沖出家の祖と此時き家の人ぞ彩ぬるが如し 巡査より此方そ病気にて
又は三十歳斗の男が地上に案内して如何なる者ぞとて田舎に入る所

天気が晴にて[illegible]ばかりして見て
今宵の旅宿と[illegible]て此宿の[illegible]を待ちやと[illegible]と云事
特の[illegible]なん
六日午前七時[illegible]を出立[illegible]せる人[illegible]の[illegible]て[illegible]
の[illegible]て[illegible]海道の
道と[illegible]出る
新道が[illegible]て[illegible]して[illegible]を通じ[illegible]
[illegible]新[illegible]を[illegible]て[illegible]
[illegible]を[illegible]東の[illegible]佐[illegible]
[illegible]丈[illegible]平垣[illegible]云村[illegible]川[illegible]東の[illegible]入りて[illegible]
[illegible]人[illegible]
[illegible]場と云[illegible]中の道の[illegible]の[illegible]文字の
[illegible]の[illegible]料理[illegible]泉水[illegible]

花笑かど[illegible]迷[illegible]の[illegible]の[illegible]にて[illegible]
[illegible]
箱根[illegible]
[illegible]道の[illegible]山[illegible]
[illegible]苗代田を[illegible]
又して[illegible]町[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]海[illegible]
[illegible]
[illegible]雲[illegible]細[illegible]
[illegible]大宮[illegible]
日本第一の富士[illegible]の好風[illegible]
[illegible]
[illegible]吉田[illegible]十二時に

京の騎兵行列にて通過左右に汎濫方向へ此處へ食を取り夫々
陳し其後は西洋様の庭園は世界に聞へたる名園にて文く芳草異花を集め花
松柏杉檜等を剪りて彩とし曲径方地と奇雑体なり且其間へ古画の名幅を安
かけ開て進みて是を観覧し其奥に通し清流の
趣周く冠幅と共に是に見る一奇麗の物へ入り多く之れを見て遊覧し之へり
午後一時より此處を出て汎濫の中村九十郎方にて休憩
史下此處の閣を渡り出て長浜へ行き新宿とも云ふ處を過ぎ午後四時に
三島へ着せねば此處を越へ行きて今夜の宿所は世古
六右衛門方へ着す歌に○明日は箱根山の険路へ手前二府等の行装と
御出立の馬車は皆人足にて引せ人力車は空車にて綿押しに行きを途中
金谷へ行て山田氏に着せ入り今夜此處に泊る

しるし

十二月七日晴午前六時三島を出立直ちに行幸の御行列せらる頃より騎を進めさせ
西へ向ひて渡りしなど晴れて小雨の中を上り初めて上りて

箱根山にて京の如く文に山や谷を走りとも足を入れ皆其上へ海に分一
の険阻と言ふへき箱根山の難所なりと云へども人は風を吹かせて
服を着せて振りなど更に進みかねて見るに雲が上りて其際
ての道中とも云ふべし坂と云ふ間を多く休み用立して坂よりも下の険路
なれば馬車も人力車を引く事是ならず皆人足にて掛けて空車又
鞍を付けて坂を引き上ぐ坂を下れば小車は馬車にて乗りて道を付け
て行く事も出来ず徒行にて先へ出て行き又は歩して其身は全く
駕籠又は長持等を負ひて進みて其他の道に出て午後二時頃宿の
中にて入り往の御休所は未だ出来ずなりてあれば夜の道を越して小田原にて着り
参らせぬ

八日午前六時小田原を出立する事と成り御休所へ着かせて是より今
三子の十余の大磯にて茶の一杯の休憩より後は先へ進みて藤沢
好機を見て人馬続けて是を出し程ヶ谷の方へ行き東へ丁寸里の路程を経て
東京の馬車の一統来りて城下へ来る手前の大森村の始めて迎へ取りて

して後小田原氏に依る後ち徳川氏の治に至り大久保氏の居城と成る今は陸軍省
の所轄に属せり東京を去ること廿里外郎売の薬は今尚名高くお江戸を去るこ
二十町ばかりにして男女の風俗言語を聞くに江戸に異ならず髪鬚の風俗は
夜の明けぬに宿を出離れ網一手を付けて酒匂川の仮橋を渡らせ玉ふ
酒匂川とては鞠子川とも云ひし也源頼朝騎馬にて酒匂を渡り掛る梶原景
季が後より追居けるに馬を早めて川に飛せ入れたりしがばかりと何ねたる
流石に梶原の天下物に掛りて濡れたりけれ依ては景季とりあへず「鞠子川ながれは
ぞ流の清ければと云へるに梶原とりあへずかく悲しくと人や
入れけん」と付けたりとかの話は名高し酒匂川は東よりまた歌橋と云札をおくる
小橋ありとて是又数梶原の連歌をとして鞠子川は酒匂川にて今此酒匂
川は船渡しなるや小川いくつをおいて国府津梅沢よ酒匂ふとて
小橋を渡りて梅沢出でて小田原の一里程小田原宿を出て太久
所の海岸は池が浦とて一本の松の一つなり小田原の松を見
一本の松の中に一の石碑を見て高さ七八尺程の碑を建てたる方なし

渡して大磯村の大磯宿に至る鴫立沢に至り山家集なる西行法師の歌を思し浮ぶ
沢の入口なる小さき石橋に鴫立橋と云札を打つ又其傍に鴫立沢と
云札を立てあるに庵あり後て西行法師の木像を安置せり
何時の頃よりか鴫立庵の額を掲げたるは悲しく西行が歌に原風の語を見え
し方に依りて鴫立沢は元より此名ありしを何を様々ととて歌に
云ふ物の縁を以て世に弘まりしや又より東大磯のあたりは淘綾の浜とて其名
高き名所なれば古今集に淘綾の浜たちならし目ざし濡
れながら流れと云古歌なり一此まで平塚の縁に至りてより
又より程なく馬入村に至り此村の人家に掲げたる
名所なりても来る見けざりし
(或は此く煤けたるにや)是又の旭の中なる
此先津を勤めたる阿部伊予守が足袋の紋つきたる利物のお方と安く
出てやがて村の中に至りてた大比をとらえ村の松山
東助方に休らひ又小川と渡る川市見えて休み仮橋をして

廿人余りて橋を架けたり御通ありし折の橋くハ何にても欄干なりて
貯置かけたる其中に無類の事取りたる事あまたありて是の欄干なども付けさせたるハ
行在なりしや姫人山吹丈ハ盲人なりとし渡り此道を行く旅人にいらんとすまじ
危き事と思ひ見ることを渡りたる文を中島村と云ふ是よりまた芳ゝ蔭名
小留田 渡 沼なから云村にとゞまりて当所に其付たる道の両脇に驛場の外ハ例の
埴せの山なるも立つ芳花の咲きけり関東井に藤沢停に小休 鎌倉ハ
清浄光寺通称ハ遊行寺なり
九月十五日六時藤沢の宿を出立御発輦に行せられ遊行寺の横なる長坂を登らせ
給ふハ東海道にて丈に山谷 新田原 名 沢 深し山を越えて坂をおりゆくて
戸塚迄の朝早くゆかりや見る人ハ皆に出て拝むハ遠く世にも廿し海迄
をさゝとん石の柳堤を越えたる村ハ廿なりしく行幸の御事知る思ひき
比須田を過ぎ送りたりや西方の家かたよ秋の終りて道の中央に奈
ちと咲く露より上けたる無限の残りたる面白く過ぎたる処を眺めやりの
長橋石車ふの人足が踏行やしまへ渥田の如き宿たり御車ふと人分車

ふし粧ひしよりとし今日りハ遥りなく御巡行の御発輦にゆかせ玉ふと云ふ
昔日の吉日くるし今ハ嶋と云ふ所を過ぎて道のすがら遠き信
なきと人し若なりしせ及なるくし戸塚迄にて安藤知縣の方々に迎くも休
行り夫より柏尾村平戸村岩瀬村なりと云ふ処を過ぎ玉ふ列くも小川に至る
ありし石橋板橋を架せり又かく坂路行り岩間なくし岩瀬村なる信
濃坂ハ殊に急なりし所くありて鞭らせし人とし共くて丈に相模
と武蔵の国境なる境木と云ふ処を過ぎ玉ひて程ヶ坂と云ふ長坂を
下らせ玉ひハ保土ヶ谷驛なり無事に御神廟に次第に各御休行り
夫より芝生村にあらせ玉ひよ浅間ケン下と云ふ所ハ村にて沢深く谷ハ道なり又
蔦窪なども越ゆるつゝかく御車を通し奉る程ヶ谷に無事に過ぎ一段ときの町にて
右の方に横浜の高島町とて長くて神奈川の臺を越え玉ひ神奈川停に
御発輦行りて石井某方に小休食を召し給ひ夫ハ流来まてし
の川より東京へ還幸行らせ玉ふ

掛巻も畏き事なれど吾嬬の峯坂氏家にましまして天下
を治しめす天皇は民の艱苦を体認ありて大御心を廣く東北に巡狩
ましまし去る年八月廿日を以て東京を出させ玉ひ東山北陸
の我東海の諸道を巡狩して親く治民黎庶の疾苦を問はせ給ひ
十一月九日を以て還幸あらせられき　御巡幸の道すがら武蔵上野
信濃越後越中加賀越前近江山城美濃尾張三河遠江駿河伊豆
相模の十六国を経て埼玉群馬長野新潟石川滋賀京都岐阜
愛知静岡神奈川（一府十県）の管下に渉りて東京より京都までは二
百八十八里十五丁京都より東京までは百二十二里十二丁にして
計り各方七里二十丁余あまり余と知るべしなり立て上西
鎌倉の日代宮　宮川の豊浦宮　軽島の明宮に座せし　御歴代天皇は親ら
國々を巡らせ給ひしは碑史にも中世に至りて其事なかりしを二千歳の今日に
行はせ玉ひて有り難くも亦又畏き限り沿道の庶民は敬て巡輦の通信
詣でつ日々の拝謁ありて漢土にも知らぬ未だ有ぬ事なりしく　羽旋も美と見えは

欣く飛として我庭を従ちて奉らる米先出す引は人々都て　聖徳を
頌ひ奉るの遊行未だ嘗てなして止まんとする頃賛を極むるの大さなる
盛に出来て諸者は未だ其事を思ひ奉らで神霜の降りまで碧迴の皺を
とも申しならぬ者も山河を跋渉し波路を　休泊あらせ玉ひつる本営
の跡は今にても奉らしまでとして止むべき者頃は萬代の神ならぬまで
板橋に霜ふみしも秋の柳も名助かれこそ旅情を催すらん蕨浦和を
為ちて氷川の社を見しに沼代池の名残ぞふ　祠の池に水清く
ましきる花として上尾桶川鴻巣や此辺の思ひ限なきを熊谷男衾
武蔵今宿で稀に見る悪しく深谷本庄は旅宿の日数の限なくして何や上野と
岩鼻や倉賀野の辺し聊ヶ岐の路傍に残る鳥川を渡ると名にある古への
佐野の渡りは今不知をしのぶ松橋の跡をかけて月を見て渡る旅人の歌ぞ思ひ
更しまつ板鼻安中大坂は坂は険しく高嶺を仰ぐて見よふと高陵もあまたある山路は
海岸ならぬ峯に雲霞そ立てる坂本横川や碓水の川は水清くかゝる信濃の
境へ入りぬれば浅間山の楓　紅葉して秋の最中と称へ吾嬬者耶と遠し

倭建尊の御名ありて思ひ出られし遠州の山代名蹤所々残り時代をとし
年て見まし大君の威光ぞ畏き秋葉川小坂上田や丹波路御代を
名蔵く長野をそし江府の往来を存分枕つ柏るや相良奥川へ行が
残りある頭城の山跡残ある田沼町相良青雲のうちとびく日をそる出
たる海天の山代山風や車のきこじめし走くまる御年の道へ揚けて
新沼新発田に藤や志太代町へまるかし文まや濱名の道にけく込
抄満しまき長濱よ人の療まで今奥川牧野とまる名つつずし差し
らうさ名保ふ海と徳本の境川留まり山らる尾本神まて金沢小松大聖寺
加賀福井越前敦賀は越前加賀への要所として郡くし限なく出会しにてをの
西ふ入り彦名塩浦長濱多賀なる琵琶の湖きぎ浦や滋賀の都を見る込て
平安城の大内へ参洛りし八十日あまり過ぎそぎ行りよ名都て又待かく
西京にと出発葉けりせりる又と御年よ在後の山城まそし大津の里膳所
の蓬来ゆくへを尋ぬ旅よあまるる瀬川の跡懐まてく教身付る八坂宮よ
老蘇の杜にならぬ君が御代をたたる山と仰ぐ世の言くと今日志

御年八坂の御代の縁にし徒山移りし多ぶしる岳本高揚歌と井相良に近く
美濃の境から雁物語の里ると過ぎて今彼此奥の戸村まで讃さまあく
浅代よ逢坂や大垣の本家単此町ふ細の里をまるそこて鳥や尾張路や
一の宮清洲名古屋愛知沼汲一十よまりし知多の浦秋代日いそぎ経くて
月とも名高き鳴海の浜は宮の渡しは熱田よ夜此岡崎まで矢矧の川
又長橋せぞ赤坂吉田よ人や行かふ夜はおのくあり坂や濱名の橋此名の
小て一筋名をさ浜松の法まえまさ名を杜はなから流と風よのなつ寒し
見附袋井日坂や佐夜の中山なりしよ掛川島田よ金谷の家よ風さへて鞠子八
過ぎ岡部宇津の谷越へ府中の城清水の里よ此浦富士の高根は雪
は清てかく見ゆる小芸の宮よ威光を慰めまるて沼津三島や玉くしげ
箱根の山代越えくて行くよ月日は小田原や鴫立沢の名高は実よ哀し
とや思ひくん戸塚藤沢過ぎまる神奈川を渡りて流れよ品川東京へ
還幸行せ給ひしは実よ古月九日の御年なりこさ寛文十年霜月 本
まそこりう

明治廿六年十二月十八日書写

七十二歳　一翁